

あり。古來來りて清遊を試むる者多く、或は八景を撰ぶものあり、或は八勝を稱する者あり。里人は又七浦八崎八島の勝を唱ふ。然れども八百青螺の星の如く散せる松島の灣内、豈八勝八景のみならんや。接せる者悉く景なり、到る所皆勝地なり。然れども勝中の勝を探らんと欲せば、遠く舟を舩して宮戸島寒風澤島の附近に到らざるべからず。此邊の島嶼皆怪巖奇石の相倚て成れるもの、而もその配置宜しきに適ひ、生ふるところの翠松各趣を殊にして倒まに影を水中に垂るゝもの、實に匹を名書に求むる能はず。普通里人の遊子を導くは鹽竈より舟を舩し孤帆に海風を孕ませ松島村に至るにあれど、此は唯舟を行るに便あるのみにして、松島景中の壯觀を盡くせるものにあらざるなり。

要するに舟を舩して灣内を回れば、千狀萬態の變化を極めて形勝の優數へ難きものあるべしと雖も、然れども皆局部の景を賞し、一小部の勝に接せるに過ぎず。松島の如き面積の廣潤なる雄大の景色は、之を一眸に收めて全景の美を賞せんと欲するには、須らく高きに登りて觀ざる可らず。是に於てか

松島四大觀

富山

扇溪

松島四大觀あり。四大觀とは富山扇溪多門山及び大鷹森是なり。近來は更に是に松島村後の新富山を加へて五大觀とも稱す。富山最も著はれ、扇溪之れに次ぐ、最も行くに便多ければなり。然れども大觀中の大觀としてはまた大鷹森を推さざるを得ず。富山は灣の東北松島村字手檜に在り、全山巨杉老檜森然として繁る。この間山麓より磴道を傳うて上ること數町にして、山上に達す。山上に大仰寺あり、南に而して開く。一望豁然松島十里の碧灣は恰も一泉池の觀に異ならず。八百の青螺點々また指摘し得べし。古來松島の勝を説くもの、松島の景は松島にあらずして富山にありといふは即ち是なり。昔は藩主も屢臨みて之を賞し、明治九年東北巡幸の時には、親しく鳳輦を枉げさせ給へりといふ。唯維新以後地方の人實利を収むるに急にして、山脚に近き群島の古松を伐り、或は島嶼の間隙に隄塘を築きて海水を堰き、海を埋めて水田と爲したるもの多く、爲めに富山の風光半ばは殺がれたり。富山に次ぎて名あるものは扇溪なり。扇溪は松島村と鹽竈町との中間にあり、丘を熊耳峯といふ。峯頭海無量寺あり。その達磨堂はまた最も名高きものなりしが、

前年火災に罹りたりとて、今は僅に茅屋の庵室に片影を止むるのみ。觀望の景は富山の如く弘からずと雖も、山勢二つに分れたる所灣深く入り、碧潭脚下に廻りて白雲山影と共に水に映し、參差伍を爲せる島上の翠蓋綠滴らんとす、寧ろ雅趣は是れに在り、伊達綱村最もこの地の景を嘉みして屢遊ひたりといひ、茶亭の跡を存す。多門山は灣の南端代崎に對して馬放島上にあり。外洋の渺茫たると灣内の靜波とを共に相見るを得べく、亦特別の趣味あり。大鷹森は宮古島大平山上の稱なり。山高く水面を抜き最も眺望に富みて四顧悉く佳なり。西北は即ち灣内白銀盤上碁布星散の青螺悉く指點し得べく、四大觀中の隨一なり。若し夫れ翻て眼を東南に轉すれば、山麓は直に外洋に接して、脚下に躍れる白波は岸を噴み、遙かに連る浩渺たる水色は遠く南濱の雲に接し、東は野蒜港一帶白砂連りて山緑相映し、遠く牡鹿半島の髣髴たるを眺むる等、心胸濶大意氣爽然たるを感ずべし。島中また奇勝多く頗る一日の探遊に値ひす。蓋しこの島と寒風澤島とは共に島中居住の民あり。半農半漁を業とするも、風俗質實にして太古の趣を存す。蓋し遠く離れて人衆に

交通を絶てるを以てなり。

松島村	五大堂	觀瀾亭	雄島
-----	-----	-----	----

松島村は灣の中央沿岸の小村落なり。東北は丘陵に圍まれ、其前方は更に小港灣を爲し、岸に沿うて旅店商舖櫓を列ね、瑞巖寺の大伽藍及び觀瀾亭五大堂雄島の名蹟皆この地にあり。五大堂は(第七十一圖の乙)村の東方水濱の一離島の上に建立せる小堂宇にして、大同年間坂上田村麻呂の創建と稱し、五大明尊像を安んず。島上には老松蟠屈し、枝葉垂れて碧潭に臨む、一勝境なり。島と陸とは二短橋を架して通ず、危橋にして渡江橋の名あり。觀瀾亭は村の西月見崎に在り。亭は政宗秀吉より桃山殿の一字を賜はりしものに移したるなりといふ。當代豪莊の建築を見るべし。此地素より眺望の勝あり。近く雄島經島福浦島徳浦島に接し、遠く宮古島寒風澤島の烟波に浮ぶを見るべし。亭頭に掲ぐる雨奇晴好の扁額は、即ち此の亭上の景を盡せるものなり。雄島は觀瀾亭のある所より更に南數町竹浦の東南にあり。松聲寒く苔蘚深き一幽境にして、小松崎との間に渡月橋なる長橋を架して往來に備ふ。周圍は碧淵に臨みて斷崖削るが如く、悽愴人の膽を寒からしむ。島中松吟庵見佛堂坐禪

瑞巖寺

堂あり。松吟庵見佛堂は見佛上人及び頼賢和尚の舊蹟にして、坐禪堂は雲居禪師の建つる所なりといふ。眞に轉建開悟の好禪境たるへし。

松島の地に最も名高き瑞巖寺は村の西端に在り。後に山を負ひ前に蒼淵に臨む。(第四十八圖の甲)一に松島寺といふ。淳和天皇天長五年慈覺大師の開基にして、本と延福寺と號し天台の寺院なりしを、その後北條氏の世改めて禪宗となし、僧法身を開祖と爲す。現存の伽藍は慶長十年伊達政宗特に名匠を京都より招きて造營せしめしものにして、四年の歳月を経て成を告げたるものなりといふ。佛殿暨二十間、横十二間、方丈庫裏之れに準す。殿上正觀音を本尊とし、又政宗甲冑の木像を安置す。その像短面にして獨眼、半月を飾りたる兜を頂き、手に軍配を携ふ。着する所の鎧冑は亦生前常用のものをその儘用ひたるなりといふ。英風颯爽正にその人に接するが如し。本誌沿革欄に挿めるものは即ち是なり。殿内各室の金屏は三樂以下皆狩野名家の筆にして、天井欄間の彫刻設彩は悉く諸國名匠の技に成る。裝飾の豪壯にして而も華麗を極めたる、正に桃山式建築の精美として、美術家建築家の賞讃する所なり。

涌谷町

佐沼町

眞に東奥禪刹の冠たるべし。寺の後山に陽明天麟圓通等の諸院あり。共に伊達氏靈廟の在る所、結構壯麗を極めたるものなれども、維新以後大に荒廢に歸したり。

松島停車場は松島村より高城町を経て里餘の北にあり。奥州本線の岩切より利府を過ぎて來れるものなり。是より鹿島臺驛を経て小牛田驛に達す。

小牛田驛に近く東方に涌谷町あり。遠田郡役所の所在地にして、人口七千餘を有する小市街なり。初め涌谷某氏の城下なりしが、伊達氏の領となりて族伊達重宗封ぜられ、以來代々此に鎮す。仙臺騷動に名高き安藝宗重は實に重宗の孫にして、其墓はこの地の見龍寺に在り。町の東には籙嶽あり。その麓なる黄金迫にある黄金山神社は、本朝初めて黄金を出したる所なりと稱し俗信厚し。

奥州線の汽車は小牛田より瀬峯新田右越の三驛を過ぐれば、懸て岩手縣下に入るへし、この間には名邑の記すべきものなし。

佐沼町は新田驛より東方二里に在り。地迫川に跨るを以て水運の便あり。

登米町

今登米郡役所を置かる。町の北端なる城址は天正年間葛西氏の據りたる所なり。

佐沼町より更に東南二里を隔て、登米町あり。北上川の西岸に臨みて交通の利あり。人口七千六百餘を有し、區裁判所の設けあり市街繁盛なり。昔葛西氏の居りし所にして、その後伊達氏の族宗直封せられ已來累代の城下たり。維新の始めには水澤縣廳茲に置かれたり。地に登米神社あり、八幡宮を祀る。初め康平年中源頼義勸請し、平泉の藤氏三代之を崇敬して祠宇を修めしことありといふ。現存の社殿は享保年中伊達村直の再興せしものなり。境内高燥にして脚下に北上川を見るべく眺望佳なり。

石巻町

石巻町は牡鹿郡の西南、北上川の河口にあり。(第九圖のこ)仙臺を距ること東十三里、所謂石巻街道を以て通ず。道路坦々として砥の如し。本と此の地海濱の一漁村たるに過ぎざりしが、伊達政宗領内に良港なきを憂ひて即ちこの地を相し、その臣河村孫兵衛なるものに命し、鹿又よりこの地に到る三里の間を開墾して北上川の水を引かしめたり。工寛永元年に始まり、三年にして



竣る。次に萬治の歲を以て始めて港を開き、領内米穀輸出の倉庫地と爲す。是より仙臺領唯一の門港となりて、その名遠近に聞え、その繁盛は一時仙臺を壓せんとするに至れり。東北鐵道貫通して已來貨物の大半を之に奪はれたる爲めに頗る衰頽に歸したるの傾きありと雖も、尙ほ戸數三千五百人口一万八千有餘あり。市街東西二十一町、南北二十二町、北上川の兩岸に跨りて街衢を形成す。港口は淤泥滯積して巨船を入れ難しと雖も、商船漁艇は來往繁くして帆檣林の如し。鹽竈萩濱田代、鮎川志津川氣仙沼宮古釜石等の外海へ航行するもの、一、關狐禪寺等の北上上流へ行くもの、運河を過りて野蒜鹽竈に赴くもの、皆その汽船會社をこの地に設けて、朝夕の往復頻繁なり。農工の雜貨、水陸の生産品は常に輻湊して賣買頗る盛なり。東海要津の實は尙ほ未だ没せずといふべし。官衙には牡鹿郡役所地方裁判所支部區裁判所監獄署海務署稅務署小林區署測候所等あり。學校には水産學校あり。小學校また町内に四校を置く。産物としては梨茶生糸鱈鯨鯛の黄金漬鮑小判漬等あり。夙に世に知らるゝ稻井の石材大原の牛馬椎茸の如きもまた皆この地を經由して他

日和山

に出さるゝものなり。

日和山は町の西方門脇に在り。山頂は即ち往昔葛西氏居城の址にして、今鹿島神社を綏んす。境内老杉古櫻繁りて蒼鬱林を爲し、山頂僅に東南を開きて眺望の勝を縦にせしむ。蒼海淼茫たる間に遙かに東に牡鹿半島、西に相馬の岬を隱見し得へく、海光山光と共に雅趣あり。

野蒜東名運河

石巻より西方五里野蒜町に至る運河あり、野蒜運河といふ。明治十四年の開鑿なり。これより更に東名に至り松島灣に通ずるものを東名運河とす、明治廿年の開鑿なり。

渡波町

石巻より長濱の松林を経て東の方一里半渡波町あり。漁鹽の利あるを以て名ある地にして、万石浦の鹽田は今縣下に冠たり。是れ本と寛永年中長州の人伊藤信茂なる人の力によりて開かれたるものといふ。現今その反別五十二町餘、一年の産額六万二千石に及ぶといふ。漁業收獲高も大約五万圓内外にありと。戸數八百人口五千餘あり。此の地海濱は浪穩かにして水清く、且つ風光の賞すべきものあるより、近來好個の海水浴地と數へられて、毎年來遊

牡鹿半島

のもの多く、漸次盛大ならんとす。岸に沿うて五六の旅館の設けあり。

荻濱

この地より万石浦を超ゆれば即ち牡鹿半島なり。綿々たる山丘海上に蟠まり、風景到る所佳なりと雖も、道路は崎嶇羊腸の險を辿らざるべからず。半島の中間西岸に荻濱あり。海水深く桃浦の山腹に灣入せる所にして、風波の憂なき良港なりと雖も其の規模頗る小にして灣亦狭く、背後には小丘を負ひて殆と市街を成すの餘地も乏しき狹隘の地なれども、陸前の海岸、他に巨船を入るゝの所なきを以て此の地方に於ける唯一の郵船會社の寄港地たり。石巻鹽竈等へは更に小汽船の往復あり。郵船に由りて到來の貨物を運送す。この地に接して月浦あり。慶長の昔、支倉常長がローマに使用する船を出したる地として名高し、歸途亦此の地より上陸せりといふ。

月ノ浦

荻濱より更に山道を通ること三里餘にして鮎川村に着す。是より一急阪を

金華山

上下して半島の東岸を超ゆれば、即ち本土極東の一名山と稱せらるゝ金華山の眼前に聳ゆるを見るべし。金華山は海中に屹然たる孤島なり。その高さ四百四十五米、寶珠状となし上に五峯あり、之を六十八區四十八溪谷に分つ。半島

より山麓に渡るその間二十四町、山麓ヤマノ渡といふ。潮流急駛矢の如く、舟楫最も險艱、風死し波穏かなる時を待つて初めて之を通ず。舟を着くる所大島居

あり。この邊麋鹿數百あり馴れて狗の如し。黄金山神社は島の中腹に立つ。

(第四十七圖の)社殿廊廓の結構壯麗を極め、仙山靈區たるの觀あり。全山には本社宿坊の外に一民戸のあるなし、來り賽するものは皆この宿坊に一泊するを例と爲す。この所より山嶺までは十八町といふ。頂上に大海祇神社を奉祀す。

四顧雄大の景胸中の豁然たるを覺ゆべし。金華山燈臺は島の南端にあり。黄金神社よりは一里十八町、峻阪險路僅に細徑を辿るのみ。老木空を蔽ひて晝尙ほ暗く、巉岩天表に聳えて幽悽人の膽を寒からしむ。此間野猿群をなして岩角に攀ち樹枝を傳ひ、哀聲亦人の心腸を斷つ。燈臺は明治九年の設立にして、燈光海上二十里を照すといふ。この山初め陸奥山といふ。天平勝寶元年初めて黄金を出し之を貢す、是より金華山に改むと傳ふ。今尙ほ島中を踏める草鞋を島外に持去らしめざる古風を保つは、蓋し鞋底金屑の附着せるものを奪はるゝを恐るゝとの俗傳あるによるといふ。實に東海の小蓬萊なり。

志津川町

氣仙沼町

山寺

志津川町は仙臺を距ること北方二十二里、東北海岸の小邑にして、陸前濱街道の一驛なり。人口四千八百を有し、本吉郡役所を置かる。これより西水界峠の隧道を過ぐれば登米郡に出づべく、北濱街道を進めは十里にして氣仙沼町に達すべし。

氣仙沼町は本縣下極北の町にして、釜前浦に臨み市街を爲す。その地東西に長くして十四町、南北に短く僅に三町なり。人口六千五百餘、地に區裁判所の設あり。良港の開ありて船舶の出入繁く、貨物の集散盛にして繁華の一港なり。浦の東岸に御鳴穴なるものあり、洞中鐘孔石垂れて一奇觀を爲す。春夏の節舟を泛べて觀るもの多し。

仙臺より陸羽街道の國道を取りて北に進めは、先づ仙臺を距る二里にして七北田村に洞雲寺あり。俗に山寺と稱し、有名なる禪刹にして奥羽三山寺の一に數へらる。應永七年時の國主國分盛行殿堂を興し、二十五院の坊舎を建てたりといふも、その後屢、回祿の禍あり。現に在るものは享保の再建にして、二天門山門佛殿通天開山堂大庫裏小庫裏等なり。境内風致に富み、晚秋紅葉

吉岡町

三本木町及び
松山町

古川町

築館町
若柳町

の節最も佳なり。

吉岡町は仙臺より北六里を隔つ。陸羽街道の衝に當る要驛にして、また羽後街道の分岐點なり。市街は乙字形を爲して南北五町、東西七町に連り、商賈を連ね稍繁昌なり。人口三千三百を有す、黒川郡役所の所在地なり。是より北古川町まで四里三十町、この間に三本木町あり、三本木町より東二里にして更に松山町あり、共に小名邑あり。

古川町はまた陸羽街道の要路に當りて、人口八千餘を有し、本縣下に於ては石巻に次ぐの大邑なり。志田郡役所こゝに在り。區裁判所及縣立第三中學校等亦設けらる。市街は南北に街道に沿うて延び、十四町餘あり、人家稠密す。その北方には江合川流れて北上川に通じ、東の方は小牛田の停車場に近くして馬車の往復あり。交通容易なれば、郡内の物産は大概この地に集合し、従て商業も盛に行はる。古川の城址は字稱葉に在り。戰國の世大崎氏の家臣古川氏居城の地なり。

古川町より北五里にして築館町あり、栗原郡役所の所在地なり。若柳町は

中新田町

その東に在りて石越の停車場に近し、蚊帳の産地として名あり。
中新田町は吉岡町を西北に距ること三里、一關に通ずる別街道の要路に當り、加美郡役所の所在地なり。この地より西山形縣に越ゆる道路あり。所謂銀山越又輕井澤越にして、途に馬市及製糸に名ある小野田及び宮崎の兩村あり。宮崎村よりは又盛に石符を産し白墨を作る。

岩出山町

古川町よりはまた秋田縣院内に通ずる道路あり。國道なれども途上頗る險巖通行に適せず、最も寂寥を極む。
岩出山町は中新田町の北四里にあり、天正十九年より慶長五年まで伊達政宗居城の地にして、その仙臺移轉後は第四子宗泰承けて子孫相次で鎮したりし地なり。今玉造郡役所あり。人口四千九百を有す。竹細工及び氷豆腐はこの地の名産と爲す。町の南方には又名生の城跡あり、大崎氏居城の址なり。

鬼首

岩出山町の西北方即ち玉造郡の西境は禿嶽荒雄山花淵山等の峻嶽起伏し、山溪幽邃なり。この谷間の地を鬼首オモカズといふ。古來駿馬産出を以て名ある地方なり。御料に召されし金華山宮城野の名馬も實にこの地より出しものなり。

温泉八湯

近年は東方鍛冶屋澤の地に軍馬補充支部の設置あり。盛に軍馬の飼養に従はる。

鬼首五湯

荒雄川の上流、花淵山荒雄山附近一體の地は總て火山岩より成り、從て最も温泉の湧出に富み、河畔たると山腹たるとを問はず、田園たると畦圃たるとを論ぜず、到る所沸々として温泉の噴出するを見る。其の著る者温泉村に八湯あり、鬼首村に五湯あり。温泉村の八湯は川度カワタ田中赤梅アカウメ新車ニイロクルマ新車鳴子、河原中山の八泉なり。川度鳴子は共に硫黄泉にして河原舊車新車田中は鹽類泉なり。何れも山間の窮地眺望の豁然たるなしと雖も、閑靜幽寂の仙境優に俗腸を洗ふべし。近來古川町を経て小牛田停車場に道を開き、馬車腕車の往復ありて交通の便を缺かず、將來益多望の地たるべし。鬼首の五湯は寒風澤、神瀧轟吹上荒雄の五泉をいふ。村内三里の間に散在す。噴泉奔湍の奇と幽澗山水の美とは蓋しこの地の特色にして本縣温泉の冠たるべしと雖も、地山嶺環繞して交通四塞せるを以て來り遊ぶもの少し。五湯の中特に名あるものは吹上温泉なり。その泉源は眞に天下の奇觀とも稱すべきものにして、山腰の

吹上間歇泉

一小平地に大小の二孔あり、弘法孔不動孔といふ。元此二孔より一晝夜七回凡そ三時四十分毎に一回つゝ、相互交代して、熱泉を空中に噴出せしものにして、時期到れば先づ孔内沸々の音響を發し、繼て轟然水面を破て沸騰せる熱泉數丈の上に昇騰す。その高さは四季に由りて異り、夏季に於て最も著るしとす。その状は恰も大水柱を空中に立てたるが如く、この際水蒸汽の俄かに凝縮せるものは、濛々として雲となり烟となり、その噴出の響はまた天地を震撼して強雷一時に碎くるが如く、壯快いふべからず。世に鬼首間歌噴泉として名高きものは即ち是れなり。(第十圖)近年大孔の噴泉止み、小孔のみ毎二時間に噴泉するに至り、前年の偉觀の半は之を減したるも、尙ほ遊子特に歩をこの地に狂ぐるの値は存すべく、學者また研究の資となすを得べし。里人はこの泉を瀦留して浴地に導き、以て入浴の用に供す。鹽類泉なれとも尙ほ多く硫臭を含む。

岩ヶ崎町は岩出山町の北六里にあり。昔中村氏の領邑にして、人口三千八百餘あり。一關街道の要驛たり。馬市を以て特に名高し。

岩ヶ崎町

駒ヶ嶽

栗駒山又駒ヶ嶽ともいふ。栗原郡の西北隅に聳えたる高山にして、岩手秋田の兩縣に跨る。山上駒形根神社あり。俗間の信仰厚く、夏季登山のもの最も多し。山路頗る峻峻なりと雖も、風光の美は頗る賞すべきものあり。晚秋紅葉の節殊に佳なりといふ。山麓の沼倉の地には遙拜殿あり里宮又麓宮といふ、四季參拜のもの絶えず。山麓の地方は温泉多し、花山村温泉はその名あるものなり。温湯湯ノ倉湯ノ濱等あり。何れも翠巒蒼峰環繞の中に在る地にして、山水の奇勝あり。夏季清遊の客尠なからず。

細倉鑛山は栗原郡の西北に偏し、岩ヶ崎町より西三里許の地にあり。億漣の時より發掘に着手し、鉛の産出を以て聞えし地なるも、今はその産出甚だ減少して收益甚きを以て近來採掘を中止せり。

仙臺より廣瀬川の流に沿うて溯り、山形縣に通ずる道あり。之れを作並街道といふ。沿道に作並温泉あり。仙臺と相距ること七里なり。古湯及び新湯等より成ると雖も人の多く遊ぶは古湯なりとす。共に無色の鹽類泉にして温度は約五十度なり。その地眺望の勝なきも翠巒四環して頗る幽靜を極め、最

花山温泉

細倉鑛山

作並温泉

定義温泉

も避暑に適す。特に交通の便あるは他の温泉に比して盛なる所なるべし。
定義温泉は作並を距ること東北五里、仙臺を距ること西北七里にあり。白
崑山麓峽間にある一勝地にして亦た夏季來遊の客遊からず。附近景勝に富め
ることはこの地の特色にして、怪巖天表に聳え碧潭水激するの壯觀は到る所
に見るを得べし。温泉と定義阿彌陀堂との途上にある材木岩はその規模は渡
瀬のものに及はずと雖も、其の奇觀と幽靜の趣は即ち相若く。遊子一瞥の地
たるべし。

秋保温泉

秋保温泉大瀧温泉は共に作並より東南二里名取川の上流にあり。仙臺に近
きを以て來り浴すもの多し。(第十二圖の乙)

亘理町

亘理町は濱街道の要驛にして、海岸線鐵道に沿ひ、岩沼町より二里の南に
あり。陸上仙臺に通ずる門戸に當るを以て、古來要害の地と數へられ、伊達
氏の支族成實以降代々の居城地たり。今亘理郡役所を置かれ、人口三千九百
を有する一名邑たり。東一里にして荒濱あり。逢隈川の河口にして漁獵の利
に富む。(第二十三圖の甲)

角田町

角田町は逢隈川の西岸に沿ひ、亘理町を距る三里、槻木驛を距るまた三里
にあり。生糸の賣買盛に行はるゝを以て名あり。人口六千四百餘を有す。伊
具郡役所區裁判所等あり。槻木驛との間には鐵道馬車の便も備はりて交通最
も容易なり。

金山町
凡森町

角田町より南方二里にして金山町及び凡森町あり。生糸蠶種の産地として
著はる。殊に金山には盛大なる製糸場の設あり。

岩手縣

岩手縣は奥羽東部の中央に位し、東は太平洋に面し、南は宮城縣に境し、
北は青森縣に連り、西は宮城縣と同じく日本の脊梁山脈を隔て、秋田縣に隣
る。縣廳を盛岡市に置き、陸中國の内、盛岡市岩手郡紫波郡稗貫郡和賀郡膽
澤郡江刺郡東西磐井郡上下閉伊郡九戸郡の一市十一郡と、陸前國の氣仙郡一
郡と、陸奥國の二戸郡一郡とを管す。東西三十餘里、南北凡そ四十餘里、面
積千三十九方里一六〇一七方軒、戸數十一万餘、人口七十一万八千餘(一方里

面積人口

平均六百九十三一平方軒四十五人に當る。各郡の中、面積の最も大なるものは岩手郡の百六十五方里にして、上閉伊郡の百三十二方里是に次ぎ、其最も少なるものは紫波郡の二十五方里なり。本縣は北海道を除き日本全國中人口の密度最も小なりとす。而して縣中人口の最も密なる地は所謂北上川平野を占めたる岩手紫波膽澤等の諸郡にして一方里大抵三千五百人を有し、山嶽重疊せる上下閉伊郡のときは一方里四百餘人を出づる能はずといふ。

此の縣の地勢は山嶽重疊し、東には北上山脈西には脊梁山脈ありて、此兩大山脈の間に位する地は奥羽の大河北上の長流の灌漑する平野にして、耕種牧畜共に縣下に冠絶し、都邑亦此の間に多くして人口の密度従つて諸郡に超えたり。殊に、東北鐵道は宮城縣より來りてこの平野を縦貫し、縣の首腦盛岡市も亦この中央に位せるを以て、交通の便殆ど間然するところなし。土地また肥沃にして、田圃よく開け、種々たる稻田累々たるの果園遠く相連れり。然れども、原野亦頗る多く、岩手山の麓に茨島野一本木野、姫神山の麓に外山野等あり。其他、二戸郡に上野、北九戸郡に蒲口野、和賀郡に貝澤野、紫

地形概説

波郡に北川野等あり。此等の原野は或は耕作するものありと雖も、多くは牛馬等の牧畜に供せらる、有名なる彼の南部馬は實にこの平野に産するものなり。而して農耕養蠶の盛なるは盛岡の南部、則ち紫波稗貫和賀膽澤江刺西磐井等の諸郡にして、米穀桑麻蔬菜苹果梨子等の産物殊に多し。兩山脈中、鍬山また甚だ多く、脊梁山脈中には湯田の銅山仙人の鐵山あり。北上山脈中には有名なる釜石鐵山あり。

北上山脈を隔て、東方太平洋に面するの地は、山岳直に海岸に通り、又廣大なる平野を得ること能はざれども、幾多の小港は海岸に沿ひ互に相隣りて、市邑參差相連り、遠く青森縣の境に及び。盛釜石山田大槌宮古久慈等其重要なるものにして筒々獨立の繁華を保ち、宮古町のごときは人口殆ど八千餘を有せり。且釜石大槌宮古の如きは海水深く灣入して、孰れも良港たるの資格を有せざるにあらざれど、峻峻なる北上の山嶺其の背後を擁し、中央北上川平野と容易に交通を開く能はず、従つて良港たるの實を擧ぐることに難し。されど此の海岸一帯の地は、奥羽地方有名なる漁業地なるを以て、住民皆擧

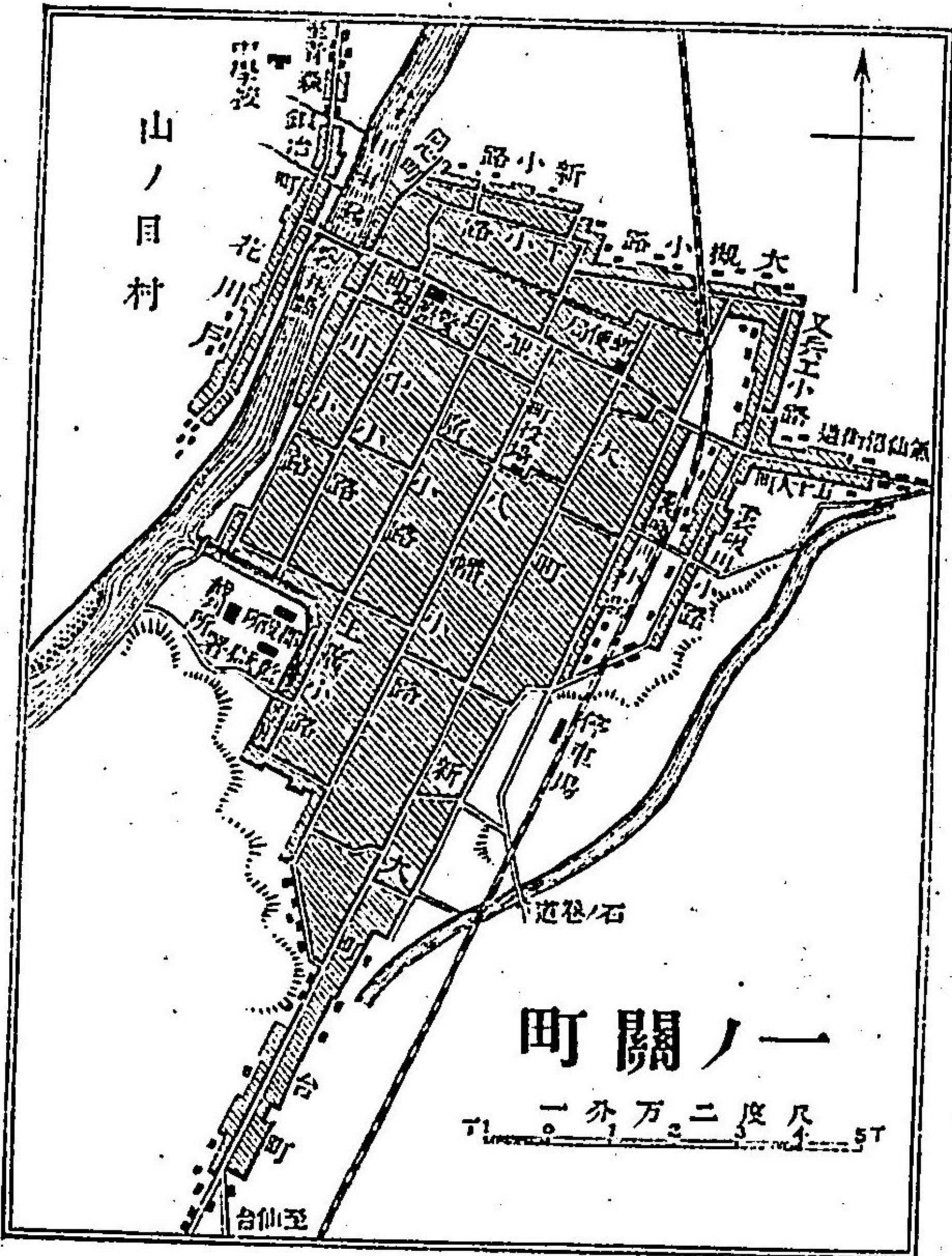
道路

つてこれに従事し、年々の産額實に巨額に達すと云ふ。これを以て水産物、石等運搬を目的とする幾多の汽船は常に此の海岸を航行し、沿岸の諸港常に汽笛の音を聞く。

縣内に於て、鐵道は宮城縣より來りて北上平野を縦貫し、盛岡市を經、中山峠を越えて、直ちに青森縣に向ふの東北鐵道あるのみ。主要なる街道は鐵道と相並ひて走れる陸羽街道の國道を幹線と爲し、一ノ關より千厩を經て宮城縣氣仙沼町に通ずる氣仙沼街道、水澤町より岩谷堂町を經て盛町に至る盛街道、黒澤尻町より秋田縣に入る平和街道、盛岡より遠野町を經て釜石町に達する釜石街道、同じく宮古に達する宮古街道、盛岡より西、雫石を經て秋田縣に入る秋田街道等をその支線と爲す。其の他、宮城縣より來りて沿海の地を縦貫せる濱街道、盛岡より一本木田頭を經て秋田縣鹿角郡に入る鹿角街道等あり。

陸羽街道
一ノ關町

陸羽街道は南宮城縣より來り、西磐井郡花泉村に至りて、始めて日本鐵道の東北線路と相會せり。花泉停車場を過ぎて、有壁の隧道を越ゆれば、一ノ



關町の古風なる市街は忽ちその瓦葺粉壁を眼前に展開し來る。この地は陸中

に入るの關門を爲し、頗る形勝の地位を占め、市街は國道に沿うて長く南北に連り、とに、東北鐵道線路中の一大驛たるを以て、汽車の發着頗る頻繁に、貨物の集散甚だ盛なり。往古より著名の驛邑にして、一に磐井と稱し、維新前は田村氏の城邑なり。市坊の數八、東西十三町、南北十四町餘、戸數二千二百、人口六千五

御館山公園
願成寺
五串の溪流

百を有し、家屋の整頓せると、商業の活潑なるとは縣下に於いて、盛岡市に次ぐと稱せらる。殊に、北上の大河はその北方一里許のところを流れて、南より來れる磐井川は、町の東北端を貫きて直ちに其大河の流に合したれば、甚だ舟楫の便に富み、ことに狐禪寺より陸前石巻港に通ずる川蒸汽船ありて、鐵路の敷設せられざる以前は、これより以北の旅客貨物は皆この地に集中したりといへり。官衙には西磐井郡役所區裁判所稅務署小林區署等あり。學校には中學校あり。御館山公園は町の中央にありて、坂上將軍を祀れる祠ありて、その眺望甚だ佳なり。其他、南郊釣山に願成寺あり。曹洞宗にして至徳二年の開設にかゝり、境内方七町餘、眺望の富贍なるは此附近第一と稱すべく、東北は北上川の衣帶を隔て、藤原秀衡が京都の東山に擬したる東稻山を望み、正西には雄偉壯大なる栗駒嶽の姿を仰ぎ、東には脚下遙かに北上川を來往する汽船を望み、人をして佇立願望容易に去るに忍びざらしむ。また、町の西北一里餘を隔て、山目村に蘭梅山公園あり。されどこの附近最も著名なるは、この町より西方二里半餘を隔てたる五串の溪流に若くなし。

水山温泉
酢川温泉

(第十一圖の甲) 其の地を訪はんと欲せば、町の北端なる荻萩橋を渡り、鍛冶町より左折して、田畔の間を磐井川の上流に溯りて行くこと二里、沓ヶ鼻と言ふところに至れば、對岸の岩石漸く奇に、瀟灑藍を凝したるの風景、座ろに眼底に鮮かなるを覺ゆ。五串とはこの溪に臨める蕭然なる一村落にして、一步に一景を生し、一景に一興を加へ、水の流るゝ、岩の聳ゆる、松の叢生せる、この平野にこの奇勝あるかと訝からるゝばかりなり。天工と稱する一溪橋を渡りて對岸に至れば、小堂あり、最も溪を觀るに適せり。瀧あり、二層となりて落下す。上層を雄瀑といひ、下層を雌瀑といふ。概してこの溪、水清く、石奇に、その水石の變化また甚だ尋常山水の比にあらず。只惜むらくは、山淺く、境俗に、幽邃靜瑟の趣を備ふること能はざるを。聞く或は此溪を木曾の寢覺に比するものありと。水石の趣は甚だ似て、しかもその風趣は甚だ劣り。これより一山を北に越れば遠谷窟平泉の故址に達するを得べし。溪に添うて猶行く、二里。對岸猪の岡の地に水山温泉あり。泉源は泉湯真湯の二口ありて孰も單純泉なり。猶行くこと五六里、酢川温泉あり。有名なる酢川嶽

の北腹に湧出し、夏時は來り浴するもの陸續として群を爲す。酢川嶽(栗駒)また此地より登臨すへし。(地形参照)

平泉は陸羽街道に沿へる一荒村なり。されど兒童と雖もこの地名を知らざるは稀なり。汽車一ノ關町を過ぎ、東稻の大嶽車窓の右に迫らんとする頃より一帯の地勢漸くに凡ならず、丘陵の聳ゆる、河水の流るゝ、旅客は何となくその風景の身に泌み渡るが如くなるを覺ゆるなるべし。これ、則ち三代の榮耀一睡の中にして芭蕉翁が筆を遺したる藤原氏三代の遺址なればなり。かくて旅客は頃刻ならずして、一箇の風情ある一小停車場に達すべし。則ち平泉停車場なり。二階造の一小旅館に旅の包を托し、更に一人の導者を得て、直ちに國道を北に進まば、平泉の遺址は漸次其前に顯はれ來らん。先、氷餅の招帘を處々に懸けたる茅屋の前を過ぎて、荒涼寂寥たる一村落の間を行かば、導者はその間に平泉館址の所在を指點すべし。曰く、かの田疇の間は柳御所のありたる處にして、嘉保元年清衡が始めてこれを築きて以てその居館と爲したるもの。曰く、其の西に連れるは伽羅御所にして、今猶ほ御所屋敷

高館

と稱し、西木戸太郎の居住せる西木戸邸の舊址は其の南に位せり。曰く、無量光院の址は伽羅御所の西隣にありて宇治の平等院を摸せしもの、その當時の壯麗は殆ど狀すべきを知らざりし。曰く三代のこの地に居るや、其の勢威殆ど四隣に震ひ、その四境の遠く開けたる、今にてもかの前山の凹處に馬の調練を爲したる址あるによりても知らる。曰く泉の酒趾。曰く、猫間の淵。曰く、當年城壕の遺址。かく説き來りて、俄に西南に聳ゆるおもしろき形したる小山を指點し、かの山こそは秀衡將軍が其象を富岳に擬してこれを築き黄金の鶏の雌雄をつくり、山上に埋めて、以てこの平泉の都の鎮護と爲したるものなれ、と。かくて平泉館址の間を過ぎ盡せば、風趣畫くが如くなる並木松透迤として前面に連り、その盡きたる田疇の右方に、高館—義經の遺址と記されたる木柱の立てるを認む。而して、其前には樹木の繁茂せる一小丘陵の右より左へと蟠れるあり。細徑を田間に求め、漸くその丘陵に登り行けば、樹木蒼鬱として晝猶暗く、壊残せる石燈の危きこと譬ふるものなし。幸うじて登り果れば、一帯長方形をなせる臺地にして、その東端に一箇の堂

判官堂

宇あり。則ち判官堂と稱するものにして、中に源判官義經の座像を安置す。而してその堂前、樹木の少しく絶えたる所より、遙かに北上の大河を隔て、形勝宛然たる東稻山の風姿を望むの景は、殆んど平泉中第一の好景と稱すべく、單に風景の上のみより言ひても容易に他に求むべからざるところなるに、ましてや懐古の念これに伴ひ、憑弔の情これに加はり、人をして殆ど人事變遷のさながら夢のごとくなるを思はしむるに於てをや。平泉誌の記する所によれば、この高館の臺地の廣さ、昔は東西四百六十間、南北百三十間、高五十間餘に涉り、其正門は北に面し、居館の構造また甚だ壯麗堅牢を極めたりしも、北上の流域年を超えて次第に變じ、その流溢の力は臺地正門のありたる地を全く崩壊し盡し、以て今日のごとき狹隘の形勢を爲すに至りしなりと。従て當時は北上川遠く東稻の山麓即ち今の長部村附近を流れて、平原の市街は現今北上の流域となり居たる處に其繁華なる人烟を颯けつゝありしなりと言へり。感慨これを久うして、再び本道に出て、汽車の鐵路を横断すれば、蕭疎たる數軒の村家相連り、其の窮まる處より直ちに中尊寺の老杉鬱蒼たる

金色堂

丘陵を起す。中尊寺の東奥に於ける唯一の古蹟なるは皆人の知るところ、仁明天皇の御宇、嘉祥三年慈覺大師の開基にかゝり、初めは經山の中央に一宇の本堂を建て弘臺壽院と稱せしに留りしが、清和天皇の貞觀元年に及びて始て中尊寺の寺號を賜ひ、是より歴代の天皇信仰皆淺からず、堀河天皇の長治二年に至りて、勅命あり、藤原清衡をして當寺を經營せしめ、天仁二年始めて工を竣へ、堂塔四十餘、僧坊三百餘、その盛なる真に海内屈指の佛界靈場たりしが、惜むべし建武四年野火延焼して堂宇悉く烏有に歸し、僅かに經藏金色堂の二字を残したるのみ。而してこの二堂は依然たる舊態を存し、後人由りて以て其の當時の盛觀を髣髴すべしと言へば、誰かこれを珍重せざらん。杉樹晝暗き間を登ると五六町、其の一角缺けて遙かに東稻の高嶺を望み、衣川の田疇の間を流れてさびしく北上大河に落つるさま、又明かに指點すべし。猶ほ進めば、蕭々たる寺門路の兩傍に顯れ來り、遂に金色堂經藏等の保存せられたる一帯の平地に達す。金色堂は一名光堂と稱し、方三間の一小宇なれど、正應元年鎌倉將軍惟康親王の此堂の雨露に沾ひて金裝の全く剝脱せんこ

とを惜み、それを保存せんが爲め覆堂を設けしかば、今猶完全に其の舊觀を存し、仔細に見來れば、驚嘆措く能はざるものあり。外部は四面悉く龜布を張り、黒漆を塗り、金箔を貼し、内部は鐫柱彫梁皆な螺鈿珠玉を装ひ、美を極めたる七寶の柱には各十二光佛の圖を描けり。而して其壇上には佛像十一軀を安置し、壇下に清衡秀衡基衡の棺を藏せり。堂の傍に芭蕉翁の「五月雨の降殘してや光堂の句を刻せり。僧は更に説くと縷々、轉じて遊覽者を其背後なる經藏へと導く。經藏は天仁元年藤原清衡の建立せし處にして、當時は二階の堂なりしが、建武四年の災に、其の上層は焼失し、纔かに残りたる下層に修繕を加へ、以て今日に至りしなり」と。三間四面の堂宇にして、柱、礎石より高さ一丈二尺、堂中到る所に書架を設け、中に三代の寄附にかゝれる一切經を納む。僧の説く所によれば、清衡の納めたるは紺紙金銀泥にして、基衡は紺紙金泥、秀衡は黄紙宋版なりといふ。經函の廣さ七寸、長さ一尺三分、高さ三寸五分、黒漆の蓋に青貝もて經卷の題目を鏤めたる、誰か千有餘年前に此技巧ありとは想像すべき。堂の正面に飾られたる毘首羯摩の作にかゝ

れる文珠獅子、運慶の作れる千手觀音等を見て、一泓の池水を渡れば、その中島に辨天堂あり。中に安阿彌作の本尊及び十五童子を安置せり。それより路の右傍に寶什を陳列せる一倉庫あり。奇器珍品頗る人目を惹く。其の他舊趾を此間に求むれば、曰く多寶塔舊趾、曰く三重塔舊趾、曰く兩界堂舊趾、曰く二階大堂舊趾、殆ど枚擧するに暇あらず。

更に來路を取り、辨慶堂に辨慶の立像なるものを見、下りて衣川一帶の地に出れば、天高く雲遠く、前山の翠微一々目睫の間に集る。今の鐵橋の架せられたる附近は辨慶の立往生を爲したる所なりとの俗傳あり。それより猶ほ遡ること五町餘にして衣川柵の舊址あり。前には安倍貞任の兄成道の住みたりと稱する琵琶柵と相對し、址内には貞任が栽えたりと稱する櫻の古木あり。東鑑に「文治五年九月二十七日賴朝卿安倍頼時が衣川の遺址を歴覽あり、廓土空しく残りて秋草鎖すこと數十町、礎石何所にかある、舊苔埋むること百餘年」と記せしは即ち此の柵の事なり。これを思はば誰か星霜の變遷太た急なるに驚かざらん。

衣川柵址

毛越寺

平泉を訪ふ者は猶ほ毛越寺達谷窟を歴覽することを忘るべからず。毛越寺は前の諸址と全く其の方向を異にし、平泉停車場より左折して行くこと十餘町のところにあり。金剛王院醫王山と號し、中に圓隆寺嘉祥寺を併せ、新御堂義經堂のごとき又これに屬せり。その創設は嘉祥三年、中尊寺と同じく慈覺大師の開基にかゝり、その堂宇の偉觀も亦た三代の經營を待つて初めて完かりしが、風雨幾百年、今日は唯、僅かに常行法華の二堂をとゞむるに過ぎず。大金堂圓隆寺舊址は今の常行堂の右に位し、當時堂宇及び其の内部の莊嚴なる、金銀珠玉燦として人目を眩し、その裝飾の美を盡し善を盡せる殆ど當時本邦これに比すべきものあらざりしといふ。而して今日猶ほ存する徑五尺餘の礎石四十九とその周圍の巨石とは其の寺域のいかに巨大に、その寺觀のいかに壯大なりしかを察するに餘あり。南大門址の東端、國道の左に芭蕉翁の『夏草や兵共が夢のあと』の吟を刻せり。(第三十四圖のこ)真に一句實境を盡したるもの。達谷窟は五串より一小丘陵を躡えて以てこれに達するを得へけれど、この地よりも亦容易に至ることを得べし。この窟には毘沙門天を祭り、その岩

達谷窟

前澤町

水澤町

窟、高さ三丈、長さ九間、廣さ七間餘を有せり。昔、夷會惡路王が據つて以て暴威を揮ひしところ、桓武天皇の延暦二十年、征夷大將軍坂上田村麿が東夷平治祈願成就の報賽として、山城國鞍馬寺を模し、九間四面の堂を創設し、百八軀の多聞天を安置し、以て鎮國の寺社と爲せしもの即ちこれなり。境域幽邃にして真に太古の趣あり。概してこの平泉一帯の地、古蹟に富み、風景に富み、旬日の遊覽、猶倦意を覺えざらしむ。正に是れ東奥の奈良鎌倉とも稱すべく、秋風高く落葉疎々たるの候、來りてこの地を訪はゞ、愁人ならざるもまた感慨百端、殆ど斷腸の思に堪へざるべし。

北上の大河の灌漑する平原を國道に沿ひて北に進めば、前澤町は人口五千人を有し、膽澤郡中水澤町に次ぐの一邑なり。水澤町はそれより北すること二里半、昔時仙臺の伊達將宣の居館のありたる處、人口八千六百を有し、膽澤郡役所區裁判所あり。停車場は町の東端にあり。公園は町の南端にあり。この町に注意すべきは、其の公園の中に臨時緯度觀測所のある事にして、世界四觀測所の一に位し、最も須要の位置を占めたりと云ふ。其他大字鹽竈に日

鎮守府八幡

高神社あり。盛街道はこの町より岐れて、岩谷堂入首を経て以て縣の東南氣仙郡盛町に達せり。

鎮守府址は佐倉川村大字佐村にあり。水澤金ヶ崎兩停車場の間、國道を右に五町許入りたる處にありて、金ヶ崎停車場を距ること十五町、其地に入幡宮を祀れり。境大凡方一町許、四望沃野にして北に膽澤川を控へ、東に北上川を帯び、その形勢の勝を占めたる、まことに坂上田村麿が延暦十二年始めて此地に城きて膽澤城と稱し、以て東夷に當りしも理なりと思はる。

黒澤尻町

路は猶ほ北上の大河を東にし、平野の間を進むこと三里、和賀川を渡りて黒澤尻町あり。地は既に和賀郡に屬し、郡役所を此町に置けり。人口五千五百餘。此町は秋田縣へ交通する最も便なる平和街道の起點なるを以て、旅客の昇降、荷物の集散頗る頻繁を極め、従つて商業活潑市街般盛の趣を呈したりしが、奥羽西線の鐵路開通して、今は漸く閑却せらるゝに至れり。昔時は此地を以て南部仙臺兩領の境界と爲せり。丹内山神社は停車場を東に距ると五里、谷内村に鎮座し、多通比古命を祭る。上古蝦夷の崇拜せし神社と稱せ

丹内山神社

花巻町

られ、境内に神池あり、石橋を架せり、又男杉女杉と稱する大樹あり。稗貫郡に入れば、北上の平野は愈々開け、其の低地の中央に花巻町あり。従つておのづから平野の一中心地を爲せり。地は昔時鳥谷の城と言ひ、安倍頼時の城きたる所、天正十九年淺野長政九戸を鎮めて歸城の時、南部信直と約して、其家人北秀愛にこの地を守らしめ、始めて花巻と改めたりと。町を花巻町・花巻川口町の二に分ち、併せて人口八千餘を有せり。而して花巻町は花巻及北万丁目の地と稱し、花巻川口町は黒川と及び南万丁目を併せ呼べり。その繁華は前者遠く後者に及ばず、稗貫郡役所また川口町にあり。釜石街道の別路はこの地に起り、高松七澤の諸村を經、遠野町に至りて盛岡より來れる釜石街道の本路に合す。鳥谷ヶ崎城址は花巻町花巻川口町兩町の間にありて南部氏が東上の敵に備へたる名城の譽高く、伊達政宗も流石に此の一城のみ如何ともする能はざりしといへり。その址内には城主北秀愛を祀れる鳥谷ヶ崎神社あり。其他花巻町陽光山雄山寺に延壽寺觀世音あり。本尊は田村將軍の持佛と稱せられし黄金二寸八分の觀世音にして、東國二十五番札所の一

志戸平温泉

なり。

豊澤川は郡内大杉澤山より發し、東南に流るゝこと五六里、花卷町の東方に至りて北上川に合す。この沿岸温泉を湧出すると甚だ多く、岸に沿うて遡ること二里六町、湯口村に志戸平温泉あり。豊澤川の岸なる岩脚より湧出せり。それより湯口村の東澤内街道より東に入ること一町餘、大澤温泉あり。源泉四ヶ所、川の兩岸に湧出し、皆岩石を鑿ちて浴場を開けり。猶遡ること一里餘にして鉛温泉あり。(第七十四圖の甲)山中の僻地なれど、浴場旅舎の設備頗る整頓し、都人士を宿泊せしむるも、亦た些の不便を感ずることなし。猶浜る一二里、豊澤村に至れば、飛瀑處々に水晶簾を懸けて、山水の景亦た尋常ならずと云ふ。

臺温泉

臺温泉はこれと稍、方向を異にし、花卷町より西北北に入ること二里餘、湯本村大字臺にあり。鹽類泉にして浴客多し。

日詰町

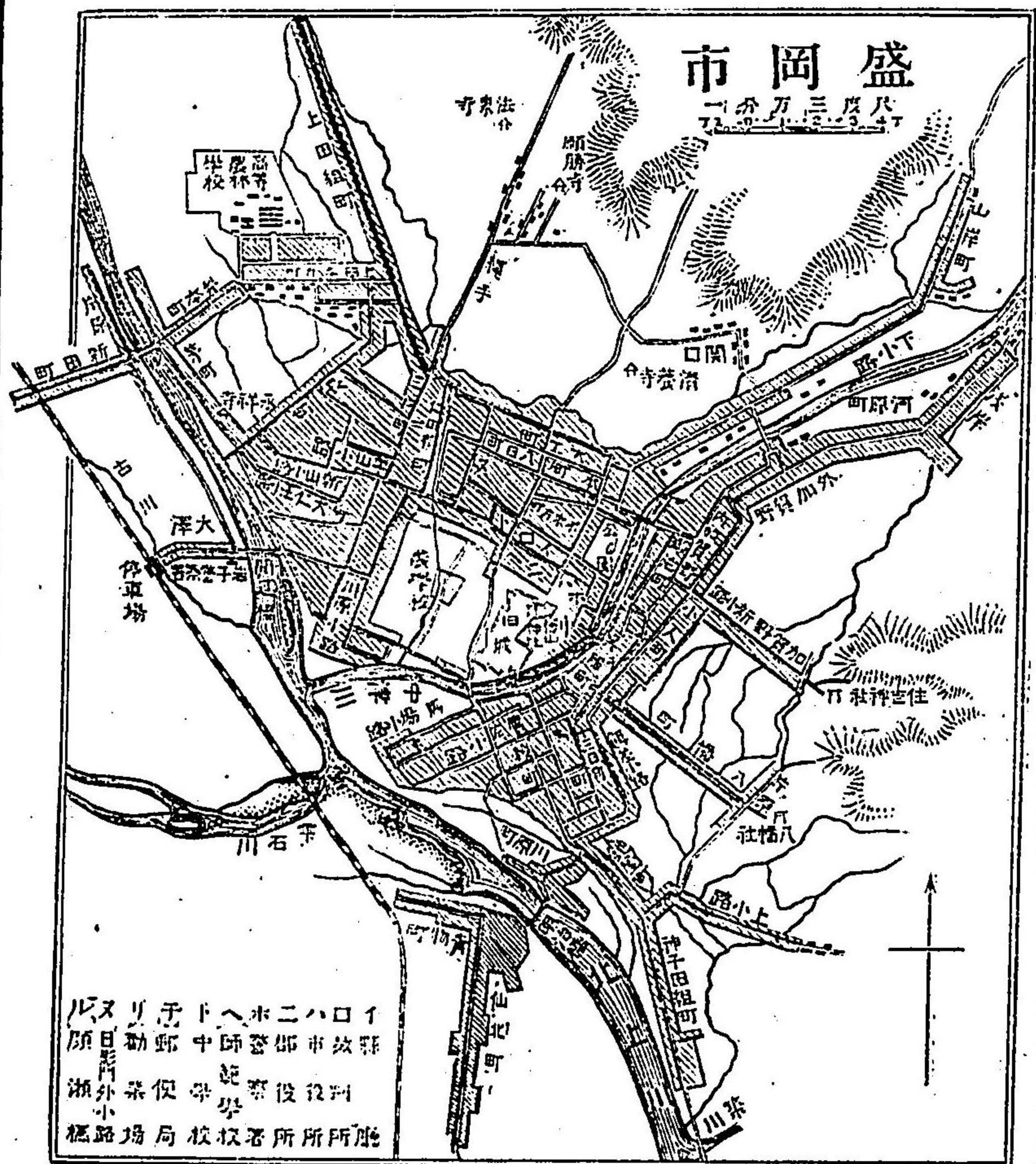
石鳥谷驛を過ぎて、猶ほ北上河畔の平野を北に駛ること二里餘、日詰町あり。人口二千餘を有し、紫波郡役所を此地に置けり。東北線の日詰停車場は

陣岡峰社

町を距ること二十八町。此地は歴史上稍、有名なる古蹟を有し、藤原秀衡の族比爪五郎季衡の居城なりし比爪館舊址と、頼朝東征の時泰衡の臣河田次郎が其主の首を齎し献じたりといふ陣岡峰社とは甚だ有名なり、殊に、後者は東鑑にも記されたるの地にして、町を距ること里餘、古館村大字陣ヶ岡に一古社あり。其他日詰町と郡山驛との中間國道より左の方赤石村大字櫻町に志賀理別神社あり。創建年月は詳かならざれども亦た延喜式内の古社なり。

盛岡市

間錐形を爲せる岩手山の次第に車窓の左右に隱見するに及て、一帶荒涼たる平野、俄かに數千の瓦葺の陸續として鱗次せるを認む。これ即ち縣下第一の都會なる盛岡市なり。市は南部氏累代の城市にして、元、不來方の城と稱する古城なりしが、慶長年間南部利直三戸城より移りて城池を改修し、始めて今の名に改めたり。爾來子孫相襲ぎ、以て維新に達せり。東西三十六町、南北十八町、戸數大凡八千五百、人口三万二千九百餘を有し、商賈橋をつらね、百貨輻湊し、交通亦た甚だ便なり。陸羽街道は鐵道線路と相並行して來り、青物町より岐れて明治橋を渡り、川原町を過ぎて、市内最も繁盛なると



ころに達す。
 汽車を下れ
 ば、停車場
 は町の北端
 下厨川村字
 木伏にあり
 て、これよ
 り北上川に
 架したる開
 運橋を渡り、
 行くと数町
 にして盛岡
 城址(第廿六圖
 の甲)は直に
 其前に迫り

来る。此地は古來不來方城、又は福士官日戸館と稱し、清原武則鎮守府將軍
 たりし頃、その甥宇志方太郎貞頼の居りし處、正慶元年初て南部氏の屬城と
 なり、天正年間南部氏自から城廓を規畫したるもの、今日往きて訪へば、斷
 礎故墟亂草に埋められ、また當時の壯觀を髣髴する能はざれども、亦其の東
 奥の一名城たりしを想像し得べし。其の城址内字内丸には岩手縣廳あり、盛
 岡市役所あり、地方裁判所あり、其の他師範學校中學校獸醫學校工業學校高
 等女學校岩手女學校染織講習所到處に高厦を列ね瓦甍を並べたり。唯、高等
 農林學校の一營舎のみ遠く市の北部上田與力町に離れたるのみ。又其城址の
 中央に縣社櫻山神社あり。(第廿八圖の乙)舊藩主始祖祖南部三郎光行及中興の祖南
 部大膳大夫信直を合祀したる者にして、始め城内淡路丸と唱ふる所に建築し
 て淡路丸神社と稱せしが、後同所の宇を櫻山と稱せしを以て櫻山神社と改稱
 せり。明治に及びて一度加々野妙泉寺山に遷座し、更に米内村字北山に移せ
 しも三十四年再び今の處に復せり。境内甚だ雅致に富み、櫻柳枝を交ゆ。石
 割櫻(第七十五圖の甲)は同所地方裁判所の門内にありて、高さ七八尺、長二丈餘、

厨川橋址

幅八九尺なる大岩石の上に一株の老櫻生じ、根の太さ五尺もあるべく、根元より二尺以上にて双木と爲れり。まことに奇觀と稱するに足る。城址の東南を割りて、中津川帯のごとく流れ、この北岸に公園あり。中の橋を渡れば、對岸には市内最も繁盛なる本町通坦々として通じ、頗る殷賑の趣を呈せり。安倍入幡は大宮宇志家に鎮座せる縣社にして、康正五年源頼義の勸請せしところにかゝる。現在社殿は本社中門幣殿拜殿神門等にして、境内また頗る廣潤に、老杉鬱蒼として晝猶ほ暗く、人をして覺えず襟を正さしむ。其他報恩寺本誓寺等あり。

概して盛岡市の繁華は遠く仙臺市に及ばざれど、近年工業漸く隆盛に赴き商況亦次第に活氣を呈したりと言へば、現今に倍する盛況を見るも遠きにあらざるべし。物産は有名なる南部鐵瓶の他、南部袖傘果等あり。

また停車場を距る西方三十町餘、岩手郡厨川村に厨川柵(第十三圖の)堀戸柵の古址あり。ともに北上の清流に臨み、一株の老松は笠のごとく對岸なる絶壁を蔽ひ、附近の風景宛然一幅の畫圖のごとし。其の下は深潭つねに渦紋を

岩手山

捲き、水色藍のごとく、その深さ幾尋なるを知らず。傳へ言ふ、安倍貞任の女投身のところです。その附近に盛岡果樹協會の設立にかゝれる半果標本園あり。

岩手山は東奥に於ける一名山にして、(第十二圖の)その八面玲瓏、恰も倒扇のごときは即ちこの山の岩手不二の名を得たる所以なり。その裾野は渺茫として瀧澤西山田頭松尾四村に跨り、その雄姿の壯大なる、旅客をして思はず佇立願望天下またこの好山ありやと噴賞せしむ。旅客之に登らんか、其の登路三あり。一は瀧澤村よりし、一は田頭村よりし、一は西山村よりす。而して瀧澤村口を以て最も便なりと爲す。されどその峻峻なるは殆ど言語に狀し難く、平日登山癖ある者も、千辛万苦以て辛うして登攀するを得。山麓より山頂に至る間を十合に分ち、一合目毎に石標を建て、登山者の便に供す。九合目に至れば一帯の平地あり。御不動平といひ、岩窟の中に休憩小屋の設あり。是より目前に崛起する一峻嶺を踰え、御鉢周りと稱する山頂の火口壁を辿り、それより猶ほ少しく下れば、火口中の低地に岩手山神社の小祠あり。

絶嶺より望めば、廣大なる裾野は遠く眼下に横り、北上の長流の蜿蜒帶を曳きたるか如き、俗塵遠く絶し、空氣清澄にして、人をして全く塵縁を断ちたるの思ひを爲さしむ。また岩手山を西に離れて、鎌倉森と小松倉山との間に網張と稱する温泉あり。地の僻陬にあるを以て來り浴するもの多からずと雖も亦この地方の一名温泉たり。(地形參照)この附近牧場多く、殊に岩手山南麓の小岩井牧場のごときは、其規模宏大にして優等の種を産し、第五回内國勸業博覽會に於ても名譽賞を授與せられ、其名聲頗る天下に噴々たり。

盛岡市を出で、愈國道を北に進めば、地勢漸く高く、姫神山一帶の翠微は次第に車窓を歴し來らんとす。好摩驛のあるところは、所謂好摩臺と稱する廣漠なる高原にして、左方に岩手山の美しき姿容を望み、氣宇自から濶大なり。河口驛を過ぎて、沼宮内町あり。人口二千六百を有する一名邑にして、昔時沼宮内少輔の居りたる所、其の古城址は今詳かならず。これより國道を北に進むこと二里半、中山峠の翠微漸く帽廂に迫らんとする所に、御堂村の一村落ありて、その北上山新道寺の北畔に弓頭マユカの清水あり。東奥の地を流る

沼宮内町

弓頭の清水

こと七十餘里、舟楫を通ずること三十餘里、日本國中屈指の大河なる北上川の源は實にこの一小清泉池より流れ出づるものにして、又この清水に一條の古傳説を傳へたるこそ趣味深かけれ。傳ふる所によれば、天喜五年六月源頼義の賊魁阿倍頼時を討するや、此の地に至りて炎暑熾くが如く、士卒の渴を憂ふること太甚し。頼義即ち皇天を拜し、伏して觀音を念じ、その携へたる弓頭を以て岩頭を衝きしに、清泉滾々として岩頭より溢れ、以て兵士の渴を醫し、進んで剿賊を平定するを得たり。頼義即ち一字を此處に建て、昏間藏する所の觀音の小像を收めて龜中に安置せりと。今、其の地に至り觀るに、源泉滾々として常に饒かに、其池の廣さ大凡三四間、深さ七尺、その清冷なる、夏猶氷を掬ふがごとくなるを覺ゆ。傍に觀音堂あり。茅葺の小社にして、後に森々たる密林を控へ、前は國道を隔て、山林を擁し、南は平坦なる田圃の僅かに開けたるを認む。而して其の本寺新通寺は觀音堂の北東十間餘の處にあり、寶什には源義家の寄附せしと稱する陣笠及び矢の根等を藏せり。

中山峠は陸中陸奥兩國の境にある一峻嶺にして、地形上自から一種の關門

中山峠

を爲し、往古は此山より以北を奥の細道と稱せしといふ。東北鐵道線路中最も溪山の風色に富める地にして、東海道の箱根、中仙道の碓氷の下にあるべしとも覺えず。山の聳ゆる、溪の曲れる、隧道は隧道と相連りて、一出入毎に四邊の風景の趣致を加へ行くさまは、宛然名畫工の繪巻物を繙くに似たり。而して鐵道の線路は前後四十二分の一の急勾配を以てこれを過ぎ。ことに瀧見トンネルを出づるあたりは、國道に架せる小繋川の危橋高く深溪に立ち、向ひに一途匹練のごとくなる瀑布を望み、其風景の美、亦九尋常山水の比にあらず。ことに秋風滿山、草木皆紅葉するの候、此の地を過ぐれば、水赤く、山赤く、人赤く、その奇、その快、容易に他に見るべからず。

愈、北進して小鳥谷驛を過ぎ、再び一隧道に入らんとするや、馬淵川は東より來りて小繋川を合せ、國道、鐵路と互に相交錯してその間を横流し、到處に急瀬を開き、隨處に一激湍をつくれり。一戸町は馬淵川を隔て、一戸停車場と相對し、其人家の山に凭り巒に枕める、おのづから山中の名色を形成せり。戸數大凡五百、人口二千八百を有し、二戸郡中に於てその繁華福岡町に

一戸町

福岡町

次げり。是より間道を北東に進むと二十餘町、波打の小嶺あり。所謂古の末の松山なる者、阪路羊腸として爰に露出せる第三紀層には偽層の痕鮮かにして其形に因みて土人之を峠の名となす。又其層中には多く海産介類等の化石を産するを以て名あり。其北一山を隔て、鳥越觀音あり。觀音の像を安置したる絶頂の石窟は廣濶にして十數人を容るゝに足れり。

福岡町は二戸郡役所の所在地にして、一戸町に二里十三町を隔つ。戸數大凡六百、人口三千餘を有し、一道の市街長く國道に沿ひ、家屋櫛比して小都邑の趣を成せり。此地はこの附近の中心地を爲し、四近の物産貨物皆此町に集るを以て頗る繁華の狀を呈せり。町に區裁判所中學校あり。馬淵川は市街の西を貫流し、川を隔て、石切處村に停車場あり。水晶瀧はその東一里許上野山の東麓にあり。これより一里にして金田一村あり。稍、驛邑の趣を成せり。それより國道を右折すること一里大字湯田に温泉あり。鹽類泉にして無色透明、泉源三ヶ所、皆田圃の間より湧出す。此村の附近、馬淵川の沿岸第三紀層中に多く結核あり。之れを碎けば、蟹貝、魚族等の化石を含む。保存好

千厩町

良にして土人これを以て硯石筆架等の小器具を製し、是を名所末の松山の化石なりと稱して發賣せり。猶一里にして青森縣界に至る。

更に初めに戻りて、國道より發する南北數條の支道を記せんに氣仙沼街道は一關町より宮城縣に通ずる街道にして、瀧澤彌榮の二村を過ぎ、北上の大河を渡りて、對岸に海衣村あり。それより猶ほ北すること二里餘、千厩町あり。藤原氏時代軍馬の厩を置きたるが爲め其の名を得たりと稱せらるゝ地なり。町に東磐井郡役所郡立蠶業學校等あり。折壁村は猶ほそれより三里、同村下折壁に室根神社あり。地の高爽にあるを以て一望群山の秀美を蒐め、東南杳かに遠海の勞髯を望み、眺望の佳なるを以てその名郡中に高し。それより横濱澤を経て宮城縣に入る。

又一關より東に向ひ長阪大原世田米今泉に達する道路を今泉街道といふ。盛街道は水澤町より東に出て行くとい里半にして、岩谷堂町あり。北上川の東岸數町の處に位し、市坊の數十、東西四町餘、南北十五町、戸數大凡千、人口六千三百餘を有し、人家櫛比、市街殷昌、又國中の一邑たり。町に江刺郡

室根神社

岩谷堂町

役所農事試驗場等あり。多聞寺重染寺は此町の巨刹を以て名あり。此の町より南方二里黒石村に正法寺あり。康正三年の草創にして、曹洞宗大本山の資格を有し、奥州に於ける同宗の牛耳を執れるの大寺なり。盛街道は此の町に於て二路に岐れ、一は人首より姥石峠を越え、一は伊手を過ぎて種山を越え、共に氣仙郡世田米を経て、海岸の小邑盛町に達せり。而して豊田古館址は後者の街道藤里村にあり。伊手村には戸隱神社あり。

平和街道は黒澤尻町より岐れて、平坦砥の如く北上の平野を西に横きり、和賀川に沿ひて、堅川目下村杉名畑川尻等を経て、秋田縣境なる白木峠に達す。(これより秋田縣横手町へ三里仙人山に鑛山あり。雨宮氏の所有にして、赤鐵鑛を採掘す。又、和賀川の支流ケトウ川の上流に瀬目温泉あり。

北上山脈の中に遠野町あり。山間の一中心を爲し、盛岡市花巻町より太平洋海岸の各地に赴くの諸道路は皆この地に來り集る。従つて市街一種の繁華を呈し、上閉伊郡中第一の名邑なり。市坊の數五、東西十町、南北三町、戸數千、人口六千餘を有し、郡役所區裁判所中學校あり。盛岡市を距ること十

早池峯山

八里十一町、釜石町へ八里七町を隔てたり。宇諏訪山に鎮座せる諏訪神社は村社にして、此の町の總鎮守神なり。

遠野町を距る北方五里早池峯山あり。岩手稗貫及び上閉伊郡に横れる高山にして、山麓より山頂まで二里二十町餘ありと云ふ。早池峯神社は附馬牛村大字下附馬牛にありて、織姫津姫命を祀り、維新以前は此に南部家の祈願所を設け、祿二百石を下賜せられたりといへり。本社地位は前面藥師山を望み、後面早池峯山を負ひ、猿石川の清溪に臨み、甚だ幽邃を極めたり。又藥師山の麓に又市瀑と稱する飛瀑あり。

宮古街道は國道盛岡市より東折し、川目築川を経て、甲明神山と上隅川山との間を越え、田代門馬川内を過ぎて、宮古川と共に南折し、川井に至りて更に東に向ひ、腹帶臺目を経て、宮古町に達す。

秋田街道は盛岡市より西折し、雫石川に沿ひて岩手山の南麓を横り、五里にして雫石に達し、葛根田川この上流小松倉澤に奇窟あり。甚だ岩石溪流の勝に富むを渡り、平野の間を進むこと三里、橋場に至れば、駒ヶ嶽一帯の山

盛町

翠は來りて眼前を歴し、尋て仙岩峠を越へ、秋田縣の生保内村に達す。

津輕街道は盛岡市を距る三里餘、一本木原の平野より國道に岐て、岩手山の東麓を掠め、一本木大更平館等の諸村を経て、更に全く西に折れ、岩手山の北麓を遶りて、北を指し、岩手二戸兩郡の間の丘陵を昇降し、三里餘にして秋田縣鹿角郡に入る。而して秋田縣花輪町は其縣界を西北に距ると四里餘。更に東南に戻りて、宮城縣より來れる濱街道を記せんに、宮城縣氣仙沼町より三里にして高田町あり。(第六十九圖の乙)字今泉と今泉川を隔て、相連り、前に廣田灣の烟波を展開せり。人口三千六百餘を有し、小港市をなす。今泉より北方は丘陵峽谷相連り、一嶺過ぎて一嶺出で、昇降の頻なる、旅客皆其險に苦む。狹長なる大舟渡灣に沿うて猶進むこと一二里、盛町は盛川の河口にありて、人口を有すること一千九百、地に氣仙郡役所を置けり。大舟渡灣は東西二十一町、南北一里餘、灣口東西に向ひ、商船の輻湊するもの陸續として常に絶えず。西に氷上山を見、東に綾里富士を望み風色頗る佳なり。此地、盛岡市を距る二十八里、宮城縣仙臺市を距る卅一里二十町餘、眞に絶海の一



邑なり。
 これより路は海を離れ、さびしき丘陵を越へて行くこと三里、忽ちにして眼下に吉濱灣を瞰る。而して吉濱村はその岸にあり。これより鐵臺峠を越え、小白濱唐丹本郷等の諸村を経て、板木山の小險を越れば、釜石灣の烟波は畫く如く其前に展き、一里餘にして釜石町あり。町は下閉伊郡の宮古町と共に濱街道屈指の郡邑に

釜石山
 釜石町
 して市坊の數五、東西五町、南北六町、戸數九百餘、人口五千五百を有し、市街の光景稍、般昌の趣あり。唯、この海岸地方は後に北上山脈の險峻を帯び、中部との交通甚だ容易ならざるを以て、従つて完全なる發達を爲す能はず。港(第二十五圖の甲)は市街の東に位し、東西九町、南北十五町、灣形を括りたるが如く、尾崎閃蛇崎の二岬南北より斗出してこれを包み、船舶の碇繫に便なること、他に其比を見ず。これを以て帆檣林立、商業また甚だ活潑なり。市街の西二里餘を隔てたる山中に有名なる釜石鑛山あり。(第五十八圖の甲)字を大仙新山硫黃洞大瀨佐比内の數名に分ち、將來この鑛山より探掘すべき鐵鑛の量は頗る多額のものなりといふ。殊に、その交通の便甚だ完備し、鑛山より釜石市街に至るまで鐵道を設けてこれを運搬し、更に港より船を用ひてこれを各地に輸送する等、其の事業甚だ盛なり。(鑛業の部参照)
 それより兩石灣に臨める兩石の一漁村を過ぎて、鵜住居村を踰ゆれば、大槌灣は俄かに開けて、雀島蓬萊島の青螺點々として、宛然一幅の名畫圖のごとし。大槌町は安渡町を合せて、人口六千二百餘を有し、船渡灣の風光明媚

早池峯山

八里十一町、釜石町へ八里七町を隔てたり。字諏訪山に鎮座せる諏訪神社は村社にして、此の町の總鎮守神なり。

遠野町を距る北方五里早池峯山あり。岩手稗貫及び上閉伊郡に横れる高山にして、山麓より山頂まで二里二十町餘ありと云ふ。早池峯神社は附馬牛村大字下附馬牛にありて、織姫津姬命を祀り、維新以前は此に南部家の祈願所を設け、祿二百石を下賜せられたりといへり。本社地位は前面藥師山を望み、後面早池峯山を負ひ、猿石川の清溪に臨み、甚だ幽邃を極めたり。又藥師山の麓に又市瀑と稱する飛瀑あり。

宮古街道は國道盛岡市より東折し、川目築川を経て、甲明神山と上隅川山との間を越え、田代門馬川内を過ぎて、宮古川と共に南折し、川井に至りて更に東に向ひ、腹帶臺目を経て、宮古町に達す。

秋田街道は盛岡市より西折し、雫石川に沿ひて岩手山の南麓を横り、五里にして雫石に達し、葛根田川この上流小松倉澤に奇窟あり。甚だ岩石溪流の勝に富むを渡り、平野の間を進むこと三里、橋場に至れば、駒ヶ嶽一帯の山

盛町

翠は來りて眼前を歷し、尋て仙岩峠を越へ、秋田縣の生保内村に達す。

津輕街道は盛岡市を距る三里餘、一本木原の平野より國道に岐て、岩手山の東麓を掠め、一本木大更平館等の諸村を経て、更に全く西に折れ、岩手山の北麓を遶りて、北を指し、岩手二戸兩郡の間の丘陵を昇降し、三里餘にして秋田縣鹿角郡に入る。而して秋田縣花輪町は其縣界を西北に距ると四里餘。更に東南に戻りて、宮城縣より來れる濱街道を記せんに、宮城縣氣仙沼町より三里にして高田町あり。(第六十九圖の乙)字今泉と今泉川を隔て、相連り、前に廣田灣の烟波を展開せり。人口三千六百餘を有し、小港市をなす。今泉より北方は丘陵峡谷相連り、一嶺過ぎて一嶺出で、昇降の頻なる、旅客皆其險に苦む。狹長なる大舟渡灣に沿うて猶進むこと一二里、盛町は盛川の河口にありて、人口を有すること一千九百、地に氣仙郡役所を置けり。大舟渡灣は東西二十一町、南北一里餘、灣口東西に向ひ、商船の輻湊するもの陸續として常に絶えず。西に氷上山を見、東に綾里富士を望み風色頗る佳なり。此地、盛岡市を距る二十八里、宮城縣仙臺市を距る卅一里二十町餘、真に絶海の一



邑なり。
 これより路は海を離れ、さびしき丘陵を越へて行くこと三里、忽ちにして眼下に吉濱湾を瞰る。而して吉濱村はその岸にあり。これより鉞臺峠を越え、小白濱唐丹本郷等の諸村を経て、板木山の小險を越れば、釜石湾の烟波は霽く如く其前に展き、一里餘にして釜石町あり。町は下閉伊郡の宮古町と共に濱街道屈指の郡邑に

釜石町

釜石山

大槌町

して市坊の數五、東西五町、南北六町、戸數九百餘、人口五千五百を有し、市街の光景稍、般昌の趣あり。唯、この海岸地方は後に北上山脈の險峻を帯び、中部との交通甚だ容易ならざるを以て、従つて完全なる發達を爲す能はず。港(第二十五圖の甲)は市街の東に位し、東西九町、南北十五町、灣形蕪を括りたるが如く、尾崎因蛇崎の二岬南北より斗出してこれを包み、船舶の碇繫に便なること、他に其比を見ず。これを以て帆檣林立、商業また甚だ活潑なり。市街の西二里餘を隔てたる山中に有名なる釜石鑛山あり。(第五十八圖の甲)字を大仙新山硫黄洞大瀧佐比内の數名に分ち、將來この鑛山より採掘すべき鐵鑛の量は頗る多額のものなりといふ。殊に、その交通の便甚だ完備し、鑛山より釜石市街に至るまで鐵道を設けてこれを運搬し、更に港より船を用ひてこれを各地に輸送する等、其の事業甚だ盛なり。(鑛業の部参照)

それより兩石灣に臨める兩石の一漁村を過ぎて、鵜住居村を踰れば、大槌灣は俄かに開けて、雀島蓬萊島の青螺點々として、宛然一幅の名畫圖のごとし。大槌町は安渡町を合せて、人口六千二百餘を有し、船渡灣の風光明媚

山田町

なる間を過ぐれば、山田町は山田灣の灣内にありて、前に大島小島の小島嶼を控へ、灣口狹窄なるが爲め恰も一湖水のごとき趣を呈せり。人口三千七百餘、下閉伊郡中第二の都邑なり。

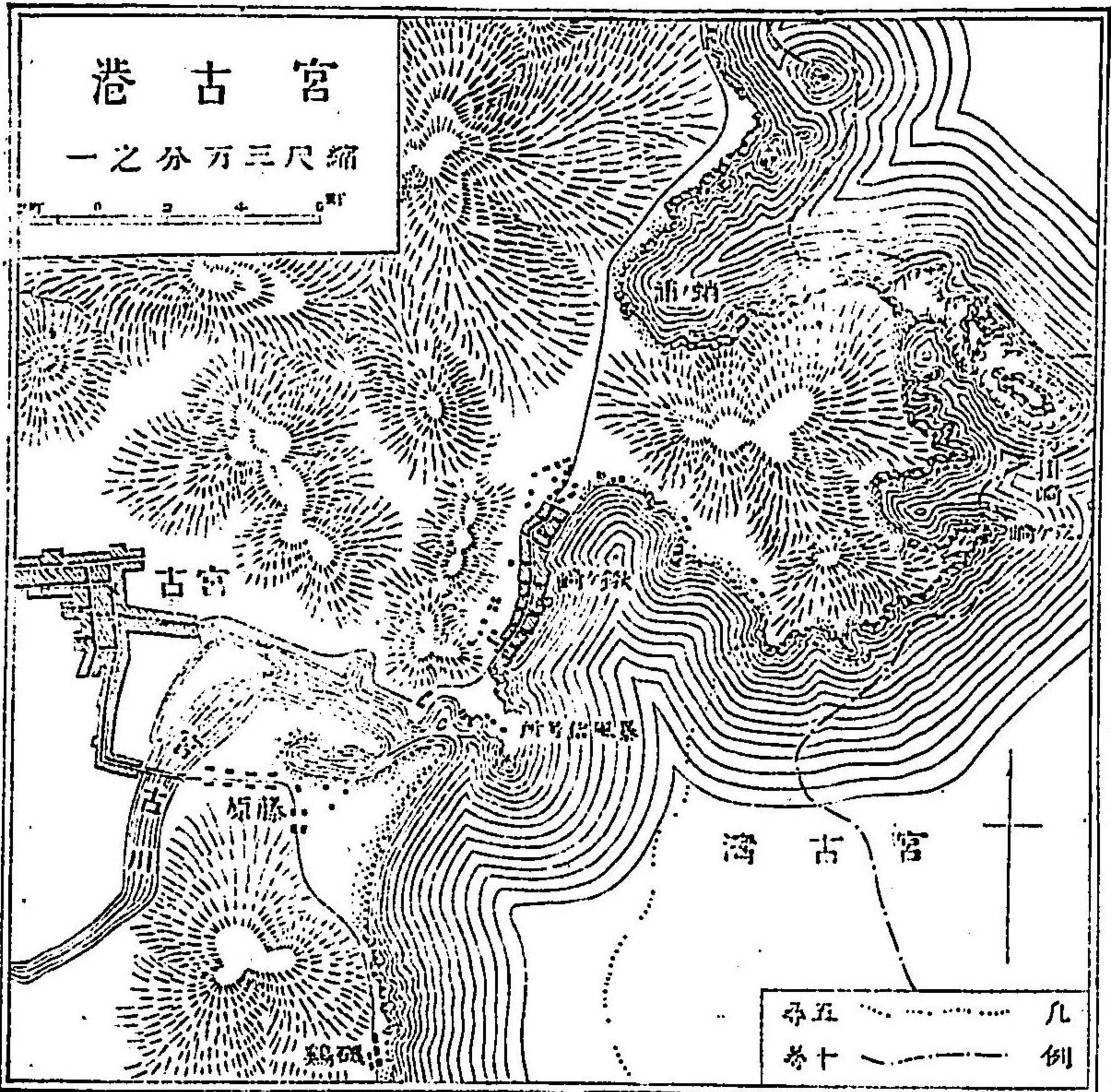
霞露岳神社

霞露岳は船越半島の遠く山田灣を包める絶端にありて、其脈蜿蜒として長く連り、遙かに龜ヶ崎小松崎を以て大洋に面す。その絶頂、山田町と一烟波を隔てたる地に霞露嶽神社あり。海面を抜くこと四百八十米、船越の海岸よりすれば里程大凡一里餘にして、社地は繞らすに石柵を以てし、老樹蒼鬱として繁茂す。前に廣く山田灣を望み、風光絶佳なり。

宮古町

宮古町は濱街道第一の都邑にして、又この數十里の沿海最も良好なる港なり。山田町を去ること五里餘、宮古灣の海水長く陸地に入りたるところにありて、その瓦甍粉壁の美なる、遠くよりこれを望めば、宛然夕陽に辰氣樓を幻出したるがごとし。宮古川は源を北上山脈に發し、宮古街道に添ひて東流すること十數里、町の東をめぐり、溶々として海に注げり。市坊の數四、東西五町、南北四町、戸數九百餘、人口五千九百四十餘を有し、東は嶽ヶ崎町

横山八幡神社



に連り、その宮古川の河口に帆檣林立せる港灣を認む。人烟稠密、街衢繁盛を極め、郵船會社東京灣汽船會社の船舶は常に來りて灣内に泊せり。また、此地に下閉伊郡役所區裁判所縣立水産學校あり。横山八幡神社は字横山に鎮座せる郷社にして、祭神は譽田別尊なり。寛弘元年當社の禰宜某阿波鳴戸の激浪を收め

小本村

久慈町

たるを以て、阿波國の人のこの神を崇敬すること尤も深く、同國の船舶の當港に投錨するもの、先づ本社を拜するを常と爲すと云ふ。其の後、南部家の崇敬殊に厚く、その勢力この地方に冠たりしといふ。又、字館間と稱する地に、持萩中納言の遺跡と稱する雲上人の碑あれど、其の眞偽は知るべからず。濱街道は宮古町より田老村を経て、小本村に達す。人口大凡一千七百を有する一名邑にして、古川は其の北を貫流せり。一路あり。これより中部を横斷して、盛岡市に達す。これを小本街道といふ。これより路は少時海に離れ、田野畑村に至りて二路を起す。一は沼袋を経て九戸郡に入り、一は海岸に出て、久慈町に達す。沿岸、古蹟名勝に乏しと雖も、山海の風景甚だ美に、黒崎より普代村に至る間、最も明媚なり。野田村に、野田川あり。陸奥の野田の玉川はこれを眞とすといへど、如何にや。(第七十三圖の乙)久慈町はそれを去ること三里、前に久慈灣を開き、船舶の輻湊、市街の繁昌、九戸郡中第一の都邑なり。戸數九百餘、人口四千三百餘を有せり。路はこれより大野村を経て青森縣に入る。

青森縣

青森縣

面積人口

青森縣は奥羽の最北部に位し、東は太平洋に臨み、西は日本海に瀕し、北は青森灣より津輕海峡を隔て、直ちに北海道の南端渡島國と相對す。縣廳を青森市に置き、陸奥國の二市八郡を管す。二市とは即ち青森市弘前市にして、八郡とは東津輕西津輕中津輕南津輕北津輕上北下北三戸即ちこれなり。而して陸奥國の二戸郡は岩手縣の管下に屬せり。東西五十八里餘、南北四十五里餘、面積六百三十七方里(九七九八方)戸數九万五千餘、人口六十一万七千五百餘、(二方里九百七十二人一方里六十四人)郡中最も面積の大なるものは東津輕下北の二郡にして、共に面積百八十三方里餘を有し、これに次くものは西津輕郡の百十五方里、上北郡の百十三方里と爲す。而して中津輕郡の六十八方里を最も小と爲す。人口の密度は三戸郡最も多く、一方里大凡千三百の割合なり。されど下北郡のことに至つては、極めて少にして、一方里僅かに百五十餘人を有するに過ぎず。

地形

地形は下北半島津輕半島ともに長く海中に突出し、其の兩角の中に青森灣の蒼波を包めり。地勢は山嶽重疊し、殊に脊梁山脈はその中央を掠めて縣下を東西二部に區分す。東部は即ち上北下北三戸の三郡にして、下北半島は實に其の東角を占め、西部は豊饒なる津輕平野の横れるところ、東西中南北津輕の五郡及び弘前の一市を包含せり。而して青森市のある所は、全くこれと平野を異にして、其東西兩部の中央、青森灣頭の一小平地にあり。縣下最も豊饒なる地は、即ち西部の大部分を占めたる津輕平原にして、岩木川、及び其の支流この間を横流し、岩木山の巍然たる姿は高く雲際に聳え、弘前市の粉壁亦夕陽に反映す。旅客青森の小平野より脊梁山脈の一支脈を通ぜる大釋迦の峠を越へて、一度此の平野に臨まば、誰かその地の豊饒にして頗る形勝に富むを嘆せざらん。黄稻十里、其間に點綴せられたるは此の地方特産物の名を博したる苹果の園にして、農業の盛なる實に縣下この地に及ぶものなし。これを以て名邑亦多く、弘前市の他、黒石五所河原木造等其主要なるものなり。岩木川は此の間を西北に流ること十有餘里、其河口には十三瀉の巨澤

平河川

あり。鱧ヶ澤町はその平野の西方、海に瀕するのところにありて、亦日本海岸の一名港なり。

東部、即ち三戸上北兩郡の地平野を爲し、海岸に沿ふて長く連れり。されど農業は津輕平野に比して、遠く及はず。草野漠々として、三本木原のこととは實に奥羽屈指の原野をなし、従つて牧畜の業、甚だ盛んに、古來良馬産出を以て名あり。馬淵川は岩手縣二戸郡より來りて、名久井嶽の西北を掠め、蜿蜒として東北を指し、その河口に入戸町の繁華なる市街をつくれり。この海岸、鮫白銀の二港ありて、鱈漁頗る盛に、水産の業實に縣下に冠絶す。上北郡に入れば、沼澤多く、小河原沼のごときは、東西二里、南北四里の巨沼たり。野邊地町を経て下北半島に入れば、砂丘遠く連り、人家蕭疎、恰も往昔の蝦夷地に入りたるがことを覺ゆ。半島の頸部青森灣頭に田名部町あり。其附近縣下有名なる羅漢柏の國有林あり。

青森市のある平野は其の東南西の三面全く山嶽丘陵に圍まれ、地積甚だ狹窄なれども、農業盛んに、頗る良田に富めり。ことに青森市は日本本島の最

道路

北端に位し、北海道の交通は多く此の地に由らざる可らざる而已ならず、其の航路また甚だ平穩なるを以て、旅客貨物の集散繁盛を極め、従つて其の市街は北地に稀なる繁華を呈せり。これより西、青森灣に沿ひたる一路は、往昔蝦夷地に通ひたる外ヶ濱一帯の地にして、その盡頭に往昔松前に至る唯一の渡津なりし三厩町あり。且つこの外ヶ濱一帯の地は、縣下有名なる林産地にして、羅漢柏の國有林は、其の林相甚だ美にして、日本三大美林の一に位せり。

縣内の主要なる交通路を擧げんに、鐵路は岩手縣より來れる東北鐵道青森市に至りて盡き、これより更に官設奥羽北線を起し、弘前市を経て碓ヶ關に達し、矢立峠を以て秋田縣の國境に達せり。街道は陸羽街道、岩手縣より來りて、始め東北鐵道の線路に添ひ、三戸より分れて五戸七戸等茫漠たる草野の間を過き、再び八戸より來れる鐵路に合して野邊地を經、脊梁山脈を越へて青森市に達し、これより別に秋田街道を起して、更に津輕平野を横り、弘前市より大鰐碓ヶ關を經て、矢立峠に至る。これを本線として、この支道には

異國馬の碑

長慶天皇行宮址

三戸町

三戸より八戸町に至る八戸街道あり、野邊地町より下北半島に通ずる田名部街道あり。青森市より岐れて外ヶ濱を經、三厩町に至るものを外ヶ濱街道となし、大釋迦及び浪岡より出て、縣の北西部に達するを北津輕街道と爲す。其他、弘前市より木造を經て十三瀉及び鱒ヶ澤に達するの街道あり。鱒ヶ澤より日本海岸に沿ひ、西南深浦を經て秋田縣能代に達するを能代街道といふ。

岩手縣二戸郡福岡町を經て、一鐵橋を渡れば、地は既に青森縣に屬せり。馬淵川の狹隘なる谷地を北に進むこと二三里、名久井嶽の山容漸く車窓に近く、熊原川の北より來りて潺湲として馬淵川に注ぐの邊、數百の瓦甍の前なる一帯の谷地に展けられたるを認む。これ、即ち三戸町にして、南部氏の新業は實にその基礎を此に開き、その古城址は今猶ほ驛東に蔚然たる一丘陵を爲せり。戸數大凡千、人口四千餘を有す。名久井岳には長慶天皇の遺跡ありて、陵墓行宮址等あれど、信ずるに足らず。

異國馬の碑は三戸町を過ぐるもの、皆行きて訪ふ所、享保年間徳川綱吉清

人伊孚九が献する所の斯波國産の二馬を南部家に附して、其種を繁殖せしもの、其の一の死したるを葬りたる地なり。碑の左側に鹿毛二百九歳五尺九寸五分異國春砂の數字を刻せり。斯波は今のアラビアにして南部地方の名馬を産するに至りしは全くこれによれり。是れを以て、俚俗馬の絶勝ならんことを祈るもの、皆其の兒馬を牽きて此處に賽するを例とせり。

三戸町を出れば山谷次第に開け、遂に廣潤たる平野を見る。而して八戸街道の一路はこれより岐れ、汽車の線路も亦之に沿うて、海岸地方に向ふ。先八戸街道に添うてこれを記せんに、二里餘にして劔吉驛あり。人口千餘を有せる一小邑なり。櫛引八幡宮はこの驛より尻内驛に至らんとする一日市隧道の附近にありて、仁安元年九月甲州巨摩郡南部莊に創建せしものを、南部氏の移りて此の地を領するに及びて、更に此の地に移したるもの、社寶として長慶天皇の召し給へりと稱する緋織鎧一領を藏せり。尻内驛は上長苗代村に屬し、人口千五百餘を有する一邑なれど、鐵道線路はこれより八戸支線を起し、四哩餘にして、郡中第一の都會なる八戸町に達せり。

櫛引八幡宮

尻内驛

八戸町

三八城神社

八戸町は三戸郡の東海岸、馬淵川河口の南に位し、舊八戸藩の城邑にして市坊の數四十、東西二十一町、南北十一町、戸數二千四百餘、人口一万四千餘を有し、今の三八城神社のある所は即ちその古城址なり。地勢平坦、土地豊饒、ことに鮫灣の良港をその東に有して、海陸交通の便、他に其の比を見ざるを以つて、市街の整頓せること甚た美なり。官衙には三戸郡役所地方裁判所支部區裁判所稅務署監獄署等あり。學校には青森縣第二中學校實業補習學校あり。相傳ふ、此の地は元池沼多く、荒涼寂寞としてさらに人のこれを開くものもあらざりしを、寛文年間、徳川家綱、南部直房を此の地に封するに及び、直房其の家臣に其の地を割與し、盛に開墾に従事せしめしが爲め遂に今日の繁盛を致せしなりと。縣社三八城神社は大字八幡町にありて、南部光行南部直房の靈を祀りたるもの、市街の北端丘陵の上に位し、北は渺茫たる外海を始めとして、松ヶ崎一帯の松原の遠く蒼波の上に搖曳せる、真に一巻の畫譜のごとし。况んや西北は遠く八甲田十和田諸峯の雲際に聳ゆるを望み、近く万頃の田野脚下に連り、馬淵川の流の蜿蜒帯のごとく其の間を貫

鮫湊港

流するものあるに於てをや。祭禮は毎年八月五六日を以て之を行ひ、其の儀式の古風に富める、其の賽客の肩轂相摩せる、またこの町の一盛事なり。其の他宇糠塚の南宗寺、小田の八幡神社、小松村の小松寺等あり。

燕島
館鼻の岬
御前神社

八戸町の東に連り、港市をなして湊・鮫の兩港あり。共に東北地方有名なる船舶の好碇泊地なるのみならず、また漁業の利を以て縣下第一と稱せられ、殊に鱈漁の如きは、最も其の盛なる者なり。湊停車場は八戸支線の終端驛にして、馬淵川と新井田川と相合する河畔に位し、東、鮫港に一里弱を隔てたり。鮫港は戸數三百、人口三千餘を有し、灣内は水清く、水産漁業の盛なる、實に縣下に冠たり。燕島は海岸を距ること三町許、往古より全島燕草を生ずるを以て名あり。而して春風駘蕩の候は其草皆花を開き、遠くこれを望めば、恰も金泥を刷毛にて抹したるかごとく、深碧なる波濤と相掩映して、實に名狀すべからざるの奇觀を呈す。島に天妃の廟なり。毎年舊曆三月三日を以て祭事を行ひ、遠近來り賽するもの甚だ多し。また、湊停車場より十町餘、新井田川を隔て、館鼻の岬あり。山を日和山と稱し、上に御前神社と稱する

小川原沼

小祠を安んず。眺望絶佳にして、外洋の杳茫、島嶼の翠微、遊人をして覺えず快哉を叫ばしむ。

鐵道線路はこれより岐れて、下北郡田名部町に達する所謂濱街道と並行し其の西方半里餘のところを一直線に北に走り、下田古間木沼崎乙供等の諸驛を經、野邊地町の前二里の處にして、再び七戸町より來れる陸羽街道に會せり。此間一帶の平野にして、其の光景頗る寂寞に、過客をして轉た往昔の蝦夷地に入りたるが如くなるを覺えしむ。小河原沼は東西一里半、南北四里半、周圍十一里を有する巨浸にして、其の東端は太平洋と相通せり。旅客注意せば、汽車の沼崎を過ぐる頃より、其の波光瀲灩として鏡の如く、次第に眼前に展開せらるゝを認むるなるべし。乙供驛より野邊地驛に至るの間は、冬季最も積雪の深きところにして、往々汽車のそのなかに埋没せらるゝことあり。これを以つて、山の裾、野の末、ところ／＼に雪除の木造隧道を設けたるを見る。

陸羽街道は三戸町附近より汽車の線路を離れて、淺田村の一部なる淺水を

五戸村

過ぎ、直ちに人家蕭條たる五戸村に達す。藤島驛は地既に上北郡に屬し、十和田湖に通ずる山路の入口なる奥瀬温泉は相阪川に添ひてその北二里半餘を隔てたり。

十和田湖

十和田湖は本縣の南方秋田縣と相接せる深山の中にありて、奥瀬温泉より相阪川に添うて、路なき路をたどり、其の距離四里餘と稱す。四面悉く峨々たる高山を以てこれを圍み、休屋宇檜部十灣田等の諸村落あり。西南、稍平坦なるところを小國平と稱し、其の北に相阪川の源流を爲せる銚子瀑あり。湖の周圍奇景に富み、恵比壽島甲島鏡島種島蓬萊島等あり。又た、御門石なるものあり、巨大なる長方形の石、二個並立して、頭部を水面に顯はし、宛然たる門狀を爲す。十和田神社はその岸にありて、恵比壽島より約二町餘を隔つ。社は甚だ小にして、附近には古杉樹叢も小暗く叢生し、日光薄くして氣甚だ冷かなり。鐵鎖に縋り、鐵梯を傳ひて、數十仞の舊火口壁を下り、舊火口たる中湖ナカウミの沿岸に達すれば、所謂御占所あり。古來此處より銚錢を湖中に投し、今日これを探るもの日に二十金を得ると稱す。其他湖畔に和井内某

十和田神社

の養魚事務所あり。某はこの湖に魚介なきを憂ひて、多年辛苦の後漸く魚類の繁殖をつとめたるの人、今は年々多少の鯉を産出すと聞く。而して此の附近甚だ紅葉の美に富み、秋風蕭條たる頃、此の地に遊へば、滿山皆是錦繡をかけたるの想あり。舟を曠して蛭子島より中湖沿岸の風光を賞するを十灣田廻りと稱し、岩石樹木の配置、其の宜しきを待、人をして割愛去るに忍びさらしむるものあり。(地形の部参照)

三本木村

藤島驛を過ぎて三本木村(古間木停車場より四里あり)。其の東南に展開せる廣漠たる原野は所謂有名なる三本木原にして、軍馬育成所は實に此處にあり。これを以つて牧馬の嘶聲四邊に遍ねく、其の自由に原野に放浪せる光景はまた一奇觀なり。(第五十五圖の甲)附近に青森縣農學校あり。三本木の原野は博士新渡邊稻造の祖父の開拓せるもの、その紀念の爲めに碑を建てたることを大素塚といふ。七戸村は三本木より二里二十五町、上北郡の中央に位し、七戸川その市街を横きり、西には七戸嶽の巍然として雲表に聳ゆるを認む。舊七戸藩の城市たるを以つて、街衢稍整ひ、上北郡役所あり。人口六千五百、ま

七戸村

野邊地町

た郡中の一名邑なり。北すること一里、坪村に壺の石碑の古蹟と稱するものあり。或はこれを以てまことの壺の碑なりと稱し、陸前のものを偽作とすれども、孰れか信たるを知らず。猶ほ一里餘にして、久しく離れたる汽車の線路は來りて國道と相合し、野邊地驛に至りて、陸奥海灣の沙漠たる蒼波に接す。

野邊地町は陸奥海灣の東南隅に位し、北に龐大なる下北半島を控へたり。これを以て地勢交通の要路を占め、従つて百貨の集散、商業の活潑、郡中他に其の比を見ず。戸數千三百、人口七千三百餘を有せり。陸奥海灣の東更に南に延ひて、其の一隅は野邊地灣を作れり。野邊地港は其の一隅にありて深さは三尋より五尋に達し、よく大船を容るゝに適せり。これより北に岐れたる路は、有戸より下北郡田名部町に達し、有戸以北は道路皆海邊の砂濱にして、人車を通せず。

小湊

きんと欲するの頭、恐山の形正しき姿を仰きたる、自然に渴せざる人と雖とも、誰か襟を披いてこれに向ふを欲せざらん。殊に馬門鑛泉のあるあたりは風景頗佳なるを見る。汽車は是より少時の間、青松蒼波の岸を走りて、其の間に十府の浦錦木塚狭布里等の名蹟あり。猶ほ進むと一里餘、小湊驛に至れば、地は既に東津輕郡にして、其半島は長く立岩崎夏泊崎の二岬を造れり。小湊より汽車は山中の隧道に入り、淺虫附近に至りて、更に青森灣の蒼波に接す。此の灣頭は野邊地灣に比して、更に奇岩怪石に富み、近くはゴミ島生子島湯野島の奇偉絶特なる姿を始めとして、遠くは鷗島茂浦島二兒島等の點點たる翠螺を點出し、更に平館海峽を隔て、北に下北半島の西南端と西北に津輕半島の平館崎を望みたる、其眺望の廣潤なる中に無限の變化を備へたる、縣下第一の好風景と稱するも決して溢美にあらざるを信ず。况んや、青森港頭に碇泊せる幾多の船艦は、盛に簇々たる煤烟を漲らして、汽笛の聲は長く灣内の蒼波に嘯くに於てをや。否、注意深き旅客は、津輕平野の一角に宛然富嶽のごとき一大山嶽の屹然として聳立したるを認むるならん。これ即ち津

椿山

輕富士の名ある縣下第一の名山岩木山の秀姿なり。

椿山と稱する一名勝地は、小湊淺虫兩驛間の突出したる半島の絶端田澤にありて、兩停車場より各三里餘を隔てたり。其地、山を負ひ海に臨み、滿山椿にして其幾千株なるを知らず。山麓に椿神社と稱する一小祠あり。詩的な傳説に言ふ、越前の商賈此の村の少女と契り、交情甚だ濃かなりしが、別に臨みて少女悲嘆に堪へず、再航の日は必ず椿油を携へ來り給へと乞ふ。明年至れば少女病んで既に死せり。商賈悲哀に堪へず、椿二三株をその墓畔に植ゑしに、今はかくの如く繁殖したるなりと。其の境自然の景に富みて、宛然一仙境を爲せり。

淺虫温泉

淺虫温泉また甚だ風景に富めり。停車場を距ること僅かに一二町、海灣の遠く開けたる、島嶼の星散羅列せる、松影の參差として相連なる、眞に得易からざるの景なり。(第十六圖のこ第二十五圖のこ)温泉は鹽類泉にして、泉源八ヶ所、分ちて椿湯大湯大湧の湯五郎兵衛湯裸の湯柳の湯日の湯鶴の湯と爲す。傳へいふ、昔、圓光大師東國巡錫の時、偶、此の地に來りて一頭の牡鹿の海波の中

唐味棧道

に浴せるを見、初めて温泉のあることを知り、里民に諭して浴場を此の地に開設せしむ。これこの温泉の濫觴なり。されば土人は恐れてこれに浴せず、唯、布に織るべき麻を温泉に浸して蒸しけるが故に、誰れ言ふとなく麻蒸の湯と呼びしを、後に至りて今の字に轉訛したるなりといふ。

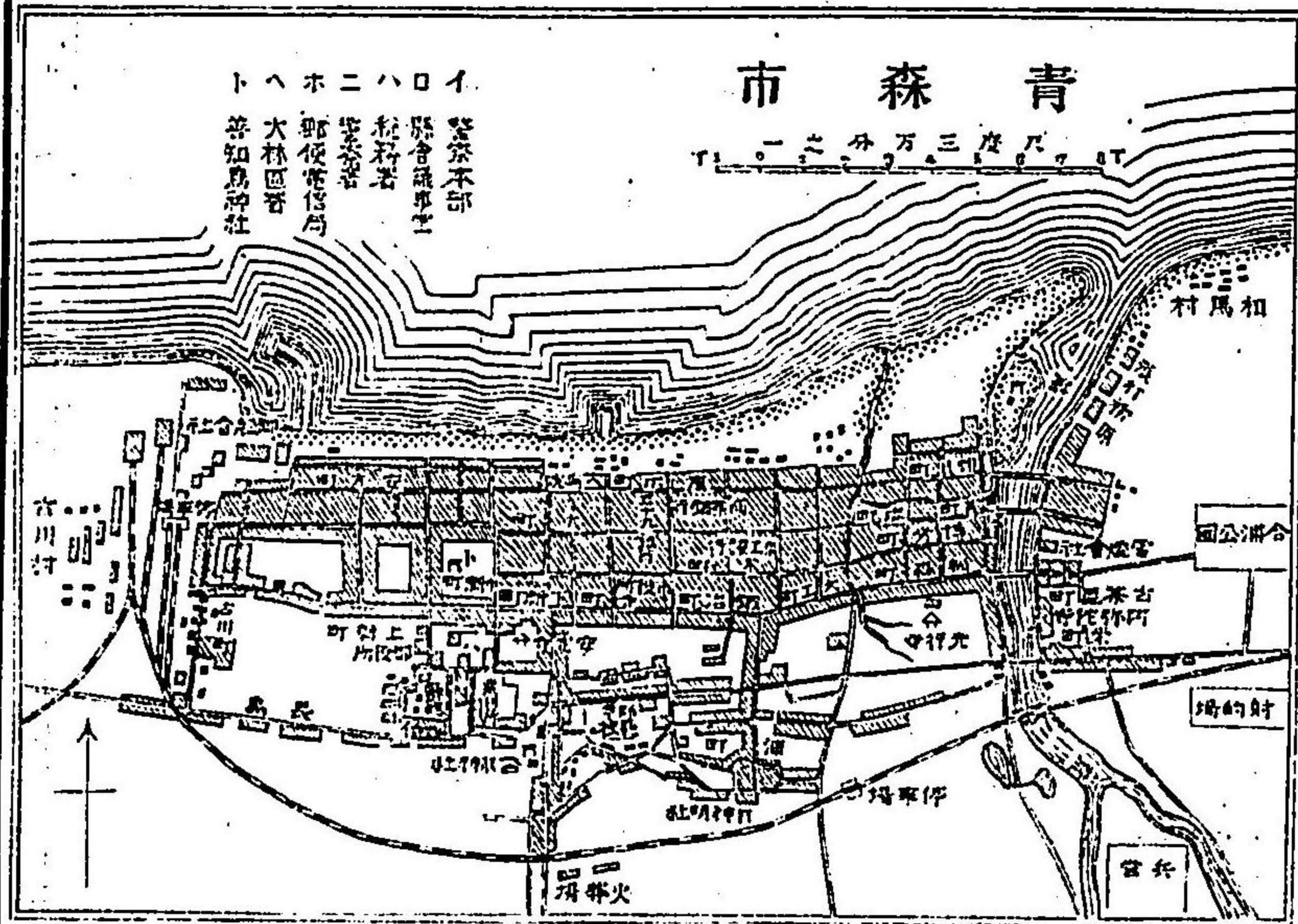
淺虫を出て、久栗坂に至れば、地に唐味棧道の遺址と稱する珍らしき棧道あり。東鑑に所謂多宇未井の棧と稱するもの即ち是れなり。此の邊、山嶮に波荒く、道路を開くに由なかりしを以て、往時は此の海岸に小徑を開き、其の上に棧橋を架し、以て交通の便を謀りしなり。文治六年藤原泰衡の遺臣大河原兼任が壘を築きて頼朝の臣足利義兼千葉常胤比企能員等を拒きし古蹟にして、傍なる不明ノ窟は兼任が武器を藏せしところなりと傳ふ。

野内驛

八甲田山の秀拔なる姿を左に仰きつゝ猶ほ走ると一二里、野内驛を過れば、

青森市

青森市は、忽ちその瓦葺とその埠頭とその煤烟とを眼前に展開し來る。青森市は北は青森灣に臨み、東に横川の流を帯ひ、其の市街は二箇の埠頭(第二十六圖の甲)を以て渺茫たる蒼波に面せり。青森縣廳の所在地なると、北海交



通の要衝に當れるとを以て、其繁華實に國中に絶し、商業の活潑なる、百貨の輻湊せる東北地方稀に見る所なり。市坊の數二十一、東西に長くして二十八町、南北は狭く僅に七町、戸數四千餘、人口二萬八千餘、市街は海灣に添うて長く連なり、大町の繁華なる街路は、停車場より一直線に横川の橋梁に達せり。この地は元、烏頭安瀉多聞天堤の四村より成れる荒涼たる一漁村なりしを、寛文年間津輕信牧、其の臣森山彌七郎に命し、始めて埠頭を築き、以つて一碇泊港を作らしむ。彌七郎乃ち日夜心

青森縣廳

善知鳥神社

を勞し、市街區劃の方法を案し、溝渠を埋め、池沼を塞ぎ、市邑を作りて、移住を誘導し、移住者へは食料及び日用の家具を給せしかば、荒涼たる寒村忽ちにして一の繁盛なる商業地となりたりといふ。明治四年、元の弘前七戸八戸三縣を併せて、此地に青森縣廳を置き、今は陸奥の中一市八郡を管轄し、首要なる官衙皆此地に集まれるを以つて、市况愈々隆盛を呈するにいたれり。青森縣廳は市の南大字大野字長島にありて、即ち元の弘前藩陣屋跡なり。洋式二階造に改築したるは明治十四年にして、構内に縣會議事堂あり。裁判所郡役所警察署中學校師範學校等皆この附近にあり。それより中新町を向ふに出れば善知鳥神社は安方町の一角にあり。境内荒涼にして、社殿の構造また甚だ美ならざれども、古來有名なる神社にして、明治以後、縣社に列し青森市の總鎮守たり。或は稱して允恭天皇の御宇此の地に配流せられたる安方中納言の靈を祭れるものと爲し、或は安倍貞任の子を祀れるものと爲す。現今祭れる所の神は市杵島姫命多紀理姫命多岐都姫命の三座なり。往古は社の周圍一面の潟池にして、今の安方沼は實にその一部なりと聞く。且、社名の善

合浦公園

知鳥と稱するは、其の附近鴉鷗に類したるその名の鳥ありて、よく砂中に巢ひたるを以て、村を善知鳥と稱し、神社も亦この稱を襲ひしなるべし。銀行會社等の瓦葺相ひ連れる大町通を蕪直に東に進めば、市街の盡頭に横川の水靜かに流れて、其の一橋を渡れば、合浦公園は僅かに七八町を隔てたるに過ぎず（第七十五圖の乙第七十六圖の甲）公園はやゝ高く、四方廣濶にして北の一面は蒼波に面し、青森灣頭の光景は宛然これを掌に指すがごとし。加之天晴れ氣爽かなるの時は、遙かに北海道の山影をも勞翳することを得へしといふ。歩兵第五聯隊の兵營はその西南十町餘、筒井村にありて、數箇の厦屋は田疇の間に散在せり。其の他市の南濱田村に妙見堂あり。其の境内の櫻花は頗る著名なり。

歩兵第五聯隊

妙見堂

青森港

青森は港としては東北諸港中實に第一位を占む。地勢は陸奥灣の南方に位置し、陸は以て日本奥羽兩鐵道の起點に衝り、海は以て一葦北海道に航するを得。但、其の港の北向にして、その狭口を括れる九艘泊平館兩岬を距ること甚だ遠く、且つ其の間に些の遮碍洲渚なるものなきを以て、一朝西北の暴風

津輕平野

に邂逅せば、貨物の揚卸は勿論、船舶の安危また料るべからざるものあり。而して里人はこの西北風を名けて玉風と稱し、これを恐るゝこと甚だし。埠頭二つ、西にあるを郵船會社の貨物揚卸の埠頭と爲し、東にあるを普通船客の昇降するところと爲す。
青森より岐る、道路三つあり。一は陸奥海灣の西方に沿うて三厩に至り、一は大釋迦を越えて、弘前に達し、一は浦町より王余魚澤を経て浪岡に赴き、更に一路を起して黒石に至る。而して弘前に達するものを秋田本街道と爲し、官設奥羽北線の線路は絶えず之に沿ひて西南に駛れり。新城驛に至れば、一たび遠かりし山嶺再び近く、その窮るところに大釋迦の隧道を穿つ。これより汽車は四十分一の勾配を以て下り、直ちに大釋迦の停車場に入れば、渺茫たる津輕の平野はさながら晝くがごとくその前に展開せられて、西北津輕郡に達する七段阪の丘陵は遙かに其右方一帶の高所に隱見す。而して八面玲瓏たる岩木山の秀姿は、その長き裾を平野に曳きて、眞に奥羽の名山たるに負かず。

浪岡町

この平野の中、先、浪岡町を得たり。戸數二百、人口千餘を有する一小名邑にして、弘前市、黒石町より青森市に往復する要路に衝り、商業交通頗る盛なり。此の地は南朝の名臣北畠顯家の子顯季の據りて以て王事に勤めし所にして、今猶その城趾を存せり。また、桓武天皇の御宇、延暦十二年坂上田村麿の建立にかゝると稱せられし八幡宮あり。黒石町はそれより更に別路を起し、八甲田山の餘脈の蜿蜒として津輕平野に臨める一角に位し、地勢高爽なるを以て、秋田街道を駛れる車窓よりも歴々として其粉壁瓦甍を指點し得べし。此の地は舊津輕藩の支封にして、市坊の數二十、東西十八町、南北十一町、戸數千四百、人口七千二百餘を有し、南津輕郡役所の所在地にして人烟稠密なり。その城址は驛の南端にありて、字市の町に、藩祖津輕信英の靈を祀れる縣社黒石神社あり。社は一帯の丘地にありて、老杉鬱然として、天口を蔽ひ、周圍を限るに塙を以てし、内に梅櫻を栽培せり。社殿は本社拜殿神樂殿等なり。構造清酒にして中に自から神威の高きを含む。黒石川に沿うて温湯板留等の温泉場あり。不潔にして浴するに足らず。それより猶西する

黒石町

黒石神社

猿賀神社

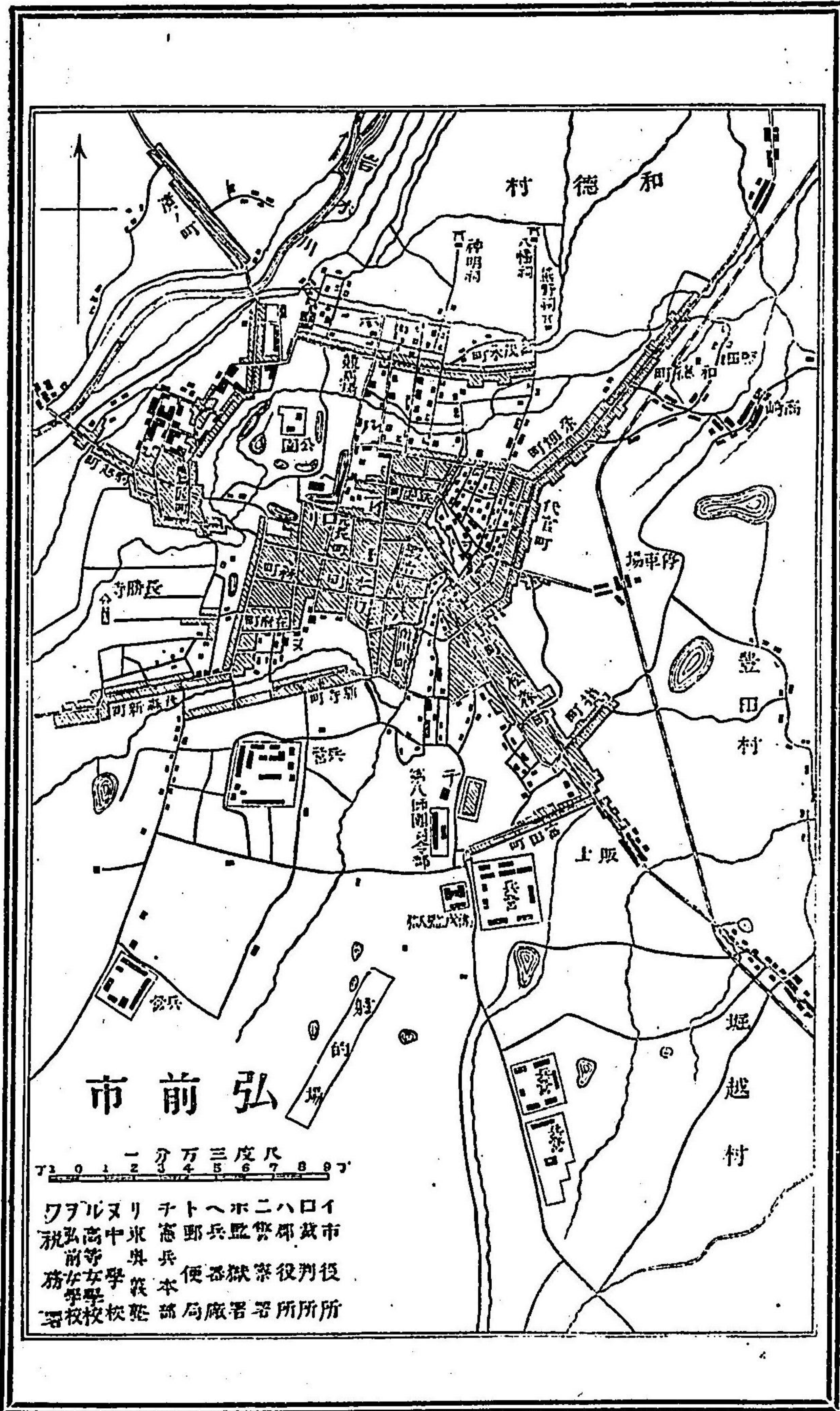
こと一里、猿賀村に猿賀神社あり。祭神は仁徳天皇御世其の靈魂大蛇と化して蝦夷を噬殺せし上毛君田道將軍の神靈なりと傳ふ。其の眞偽は得て知るべからすと雖も、津輕地方に於ては往昔より岩木山と本社とを以て、崇尊無上の社と爲せしは事實なり。况んや大同二年に於ける坂上田村麿の再建と、治承二年に於ける藤原秀衡の造營と、津輕家歴代の淺からざる崇敬とあるに於てをや。その隣村大光寺に古城址あり。南部津輕兩氏の互に兵火を交へし之地、壘壘の跡歴々として猶辨すべし。

藤崎村

これより西して本街道に出れば、一里半餘にして藤崎村あり。地に川部停車場を置けり。清淺にして急駛せる平川の流を渡れば、弘前市の瓦甍はさながら畫くがごとく平野の中に横るありて、その地勢の廣濶なる、津輕一族のこの地に覇を唱へしもまことに偶然にあらざるを見る。而して路傍苹果園の美しく紅なる果實を聯ねて夕陽の光に反射せるが如き、亦この地ならては見るべからざる特色なり。

弘前市

弘前市は津輕平野の中央に位し、北に岩木山の秀麗なる姿を仰ぎ、東南に



本町通
松森町通

八甲田山の餘脈と對し、岩木及び平の二川は市の南北を流れて、其四近の平野の豊饒なる、實に縣下に冠たり。市の廣さ、東西三十四町、南北一里五町戸數六千五百、人口三万四千七百餘を有し、市坊の數實に七十一の多きに及ぶ。往昔は津輕氏歴代の城地にして、慶長年間中興の祖津輕信牧此地に城を築きてより。その巍然たる白堊よく此平野の間に君臨せり。明治四年廢藩置縣の後、頓に衰頹を來し、士族は各所に散落し、工商は多く業を失ひ、縣廳も青森市の爲めに占有せられて、一時は殆ど支うべからざる衰境に沈淪せり。而して市に留れるものは、繼かに實業を目的とし、養蠶苹果によりて以てその計を立てたりしが、明治廿七年、奥羽西線の鐵道開通せられ、續きて第八師團設置せられたる爲め、爾來日に月に盛運に赴き、漸く舊觀を恢復するに至れり。

市街の最も繁華なる處は本町及び土手町松森町通にして、本町は國道を一
直線に大圓寺の五重塔に通したる道路を言ふ。土手町松森町は即ち本町の一角を右に折れたる秋田街道にして、人家櫛比夏の夜は露肆の燈光燦々として

兵營

弘前舊城址

雜選を極む。官衙は地方裁判所弘前支部弘前區裁判所稅務署監獄支署等あり。學校は第一中學校東奧義塾高等女學校等あり。第八師團の兵營は新寺町に於ける歩兵第三十一聯隊をその重なるものとし、其他騎兵第八聯隊野戰砲兵第八聯隊工兵第八大隊輜重兵第八大隊等は皆市の南部にあり。而して其首腦たる第八師團司令部は清水村宇宮田にあり。弘前舊城址(第三十六圖の乙)は屹然として市の中央に聳え、松樹鬱蒼たる間より壊殘の白堊の髣髴として隱見するさまは座ろに人をして封建時代の盛時を追想せしむ。牙城は石壁の高五丈餘、三重壁にして八樓十二門を具し、日本七名城の一なりしを、明治四年陸軍省の用地となりてより、大方は崩壞せられ、今は追手搦手外東内東内南の五門と牙城址の一櫓とを剩すにとゞまる。遺者舊藩士等牙城の地を陸軍省に乞ひ、以つて公園と爲し、天守閣には、史前時代以後の古器物武具等を陳列して、以て一種の歴史的博物館と爲せり。その牙城の立つ所、遠く西方岩木山を望み、その秀てたる山色の美と、岩木川一帯の銀蛇のごとき流とは實に限りなきの趣を呈して、遊覽者をして殆と去るに忍びさらしむ。大圓寺の五

天守閣

博物館

大圓寺五重塔

長勝寺

東照宮

津輕漆器

重塔は(第三十六圖の乙)南本町通の盡頭にありて、寛文七年に建設したるもの、高さ十七間餘、郡内何れの地よりも是れを望むを得。大圓寺は今類廢して、又舊觀を見る能はずと雖も、此一帶の地市内に於ける一小公園の趣をなし、夏の夜は、住民皆行きて涼を取り、ことに盆踊の盛なるは市中この境内を以て第一と爲す。これより士族町のさびしき處を北に過れば、一區劃は全く數箇の寺院を以て組織せられ、その盡んとする處に長勝寺の一伽藍を起す。寺は西茂森町に屬し、津輕地方曹洞宗の總本山にして、長勝の名は爲信の曾祖父光信の法諡長勝隆榮と云ふに取れりと。古杉樹陰森として路を夾み、高さ八間餘の山門の樓上には五百羅漢の像を安置せり。寺内にある大鐘は嘉元四年の鑄造にして、南北朝以來の古色を帯べり。其他笹森町に東照宮あり。津輕信牧の夫人の勸請したる者にして、初めは城内にありしを、寛永元年今の地に遷座し、明治十四年縣社に列せられたり。此の地産物多く、殊に津輕塗漆器の如きは、一種堅實なる塗法の中に無限の雅致を帯びて、都人の珍重する所なり。(工業漆器の部参照)又、苹果を産出すると甚だ多し。概してこの市街形

岩木山

勝に富み、古蹟に富み、風俗また敦厚、其商業は青森市に如かざるも亦種々の點に於て遠く其及ばざる趣を存せり。

岩木山は東北著名の高山にして、(第十五圖の甲乙)形の似たるを以て、津輕富士の稱あり。岩木村外三村に屬し、西は西津輕郡中村に跨り、海面を抜くと千四百三十一米、其秀拔なる、真に一名山たり。是を登らんとするには、先、岩木村大字百澤に至るをよしとす。百澤は則ち岩木山の東南麓にして、其地に岩木山神社あり。國幣小社にして、顯國魂神多都比呂賣命宇賀能賣命を祭り、延暦十五年の創建以來、安東家北畠家津輕家等の崇敬甚だ厚く、徳川歴代の將軍亦特に使を發して幣帛を捧げたり。樓門は高欄付の四方椽にして、丹塗の色頗る鮮に、これを入れは神樂殿あり。それより物黒塗にして鍍金の金具を打てる中門を過れば、朱塗の瑞籬左右に連り、直ちに高さ五丈一尺、東西五丈五尺、南北五丈一尺、總朱塗なる拜殿に達す。本社はそれより唐門を入りたる奥にありて、白木造の柵立及び瑞籬を以て二重にめぐらし、六段の階を上げば、高欄付大床濱床内陣外陣の美燦然として目を驚かす。蓋し、

岩木山神社

高照神社

東北地方稀に見るところの好建築なり。宜なり、奥の日光の稱あるや。岩木山はこれより登路一里二十町、半腹より以上は岩石嵯峨として、熔岩流の跡を存し、山勢峭拔、頗る峻峻なり。山頂には岩木山神社の本宮あり。白木造にして、極めて小宇なれども、其用材は俗に所謂節無し御用木なるものにして、一箇材は必ず一箇の扁柏生木を用ゆ。而して三年毎には必ずこれを改造するを例とし、其間風雪の爲に損所を生ずるも、之を修繕せずして必ずこれを改造す。此山の南麓に數箇所の温泉あり。常磐野に於ける岳ノ湯最も著はる。また、岩木山神社に賽せし人は同村神馬野にある高照神社に詣づるを忘る可らず。(第四十九圖の乙)縣社にして、天兒屋根命外三神を祭り、これに配するに津輕藩祖信政の靈を以てす。境内は古松老杉枝を重ね、鬱蒼として猶暗し。且其柱梁には皆名工の彫刻を以てし、甚だ壯麗を極めたり。岩木山の周囲には石器時代の遺跡甚だ多く、殊に北麓森田、東麓十腰内を最も有名とす。(沿革参照)

中津輕郡紙漉澤村に御陵墓参考地ありて、長慶天皇の遺蹟と稱す。されど

御陵墓地参考

暗門溪

その眞偽は未だ確定するに至らず。又此の村に石器時代の遺跡あり。岩木川を迺れば、十里餘にして、暗門の大瀑あり。飛流直下十數丈、頗る壯觀なり。

弘前市より秋田街道を東南に進めば、廣潤なる津輕の平野は漸く盡きて、兩傍より來たる山嶽は漸く合し、街道は平川の流に沿うて、直に矢立峠の嶮に向へり。石川を経て翠嵐搖曳する間に入れば、平野に君臨せし岩木山の秀姿も既に見え、平川の溪流は石を噛み、岸に激して、大鱈驛に入らんとする前、二三の鐵橋ありてこれに架せり。

大鱈村は風致に富める一名邑にして、溪を隔て、對岸藏館村の人烟と相對せり。ことに、有名なる温泉はその西岸に湧出し、共同浴場五六ヶ所あり。温質は鹽類泉にして、浴客常に磨集す。蓋し浴場の整頓して、都人士を浴せしむるに足るもの、この附近この地を除ては他に求むへからざるが爲めなるべし。阿闍羅山は大鱈村外六ヶ村に跨る峻嶺にして、其の形恰も机卓の如く、この地を過ぐる者は皆その奇抜なる姿に目をとめざるものはあらざらん。

大鱈温泉

阿闍羅山

藏館大日堂

碓ヶ關

傳説によれば、絶頂の平地に往古三千の精舎あり、弘仁十一年には僧空海來り訪ひ、建久年間に漢土の僧圓智來りて詣てたることありと。藏館村大日堂の門外に萩桂と稱する有名なる古木一株あり。幹は桂にして、花は萩に似たり。高さ數丈、二幹に分れて、花時の壯觀は譬ふるにもなし。本居宣長の玉勝間、川田斐江の隨筆記程に此樹のことを記すること極めて詳なり。

斗南半島

これより西北に向へば、山嶺漸く愈々相迫り、雲烟卷舒、翠嵐搖曳、汽車の進むこと甚だ遅々なり。碓ヶ關は矢立嶺下の一小驛にして地に温泉あり。猶行くこと一里餘、汽車は數箇の隧道を出入し、路傍國有林の甚だ翳鬱たるを見、遂に秋田縣の境なる矢立峠に達す。

田名部町

下北郡は縣の東北海上に斗出せる半島にして、地形上之を斗南半島又は下北半島と稱す。地勢は北部及び中央部に山嶺綿亘し、漸く傾斜して海岸に連り、其の沿海は港灣に乏しく、陸奥海灣は風波殊に靜穩なりと雖も、北方は津輕海峡に面して潮勢殊に急なり。而してこの半島の首邑をなして最も繁華なるところを田名部町となし、關根奥内中野澤の三村を併せて、戸數九百六

十餘、人口四千九百餘を有せり。この地方に達するには、陸羽街道の野邊地驛より岐れて、陸奥海灣に沿ひたる荒涼たる砂濱を殆ど十一二里をもたどらざるへからず。且、其の道は車を通せざるを以て、旅客は馬背によらざるを得ず。其の間、野邊地町より有戸まで三里、有戸より横濱まで三里半、横濱より田名部まで四里半強を隔てたり。其の海岸、唯、荒涼たる砂丘のみにて、奇景勝區の其間に散在するものなしと雖も、玫瑰花（モウジ）到る處に薔薇に類せる白き花を開き、陸奥灣四面の山峯遙かに蒼波に影を照して、其の眺望甚だ雄なり。田名部町は大畑及び恐山の通路に衝り、又た、西南一里餘にして大湊の要港あり。有名なる南部の恐山はこれより三里三十町、東北地方有名の大山にして、其の最高峯高さ七百九十一米、山に攀るに二徑あり。一は田名部町よりし、一は大湊よりす。而して其田名部よりするものは本道なるを以て、其の路甚だ險ならず。山嶺に至れば、眼下に青森灣其の他無數の峰巒を望み、頗る佳景なり。圓通寺（第四十九圓の甲）は山の半腹に位し、境内甚廣く、四方小巒を繞らして蓮花八葉の形を成す、寺畔に周圍二里餘を有する湖水あり。上

恐山

圓通寺

流を賽の河原といひ、下流を三途の川と稱し、猶ほ域内各所に、血の池極樂濱、劔ノ山畜生道の名を附せり、其の他八大地獄の稱あり。寺は曹洞宗にして、貞觀元年、慈覺大師の草創にかゝり、本堂には其手刻の地藏尊を安んじ。本堂の後に、不動堂あり。其他無緣塔慈覺堂藥師堂五智如來堂等境内に散在し、東南釜臥山に奥の院あり。毎年六月二十四日を以て緣日と爲し、是の日地藏を祈れば死者の苦艱を救ふと傳説し、賽者の遠きより來るもの、陸續として踵を絶たず。又、寺の境内、地藏堂の正面左右に温泉湧出し、硫黄泉にして、無色透明、著しき酸味あり。浴槽は石を以てこれを壘み、小屋掛を爲して風雨を凌げり。賽者多くは是に浴するを以て、喧騒を極む。

大湊は海軍の要港にして、陸奥灣の東北隅にあり。人口二千餘を有し、水雷艇の碇泊する所。設備未だ完からざるも、地形良好なるを以て早晚其の好軍港たるの實を擧ぐるを得るに至らん。大畑村は田名部の北にあり。人口二千九百を有する一邑にして、それより北すれば路は透迤として尻矢崎に達す。半島の東北端尻矢崎の一角に立ちて眺賜を擅にせんか、津輕海峽を隔て、

恐山温泉

大湊

大畑村

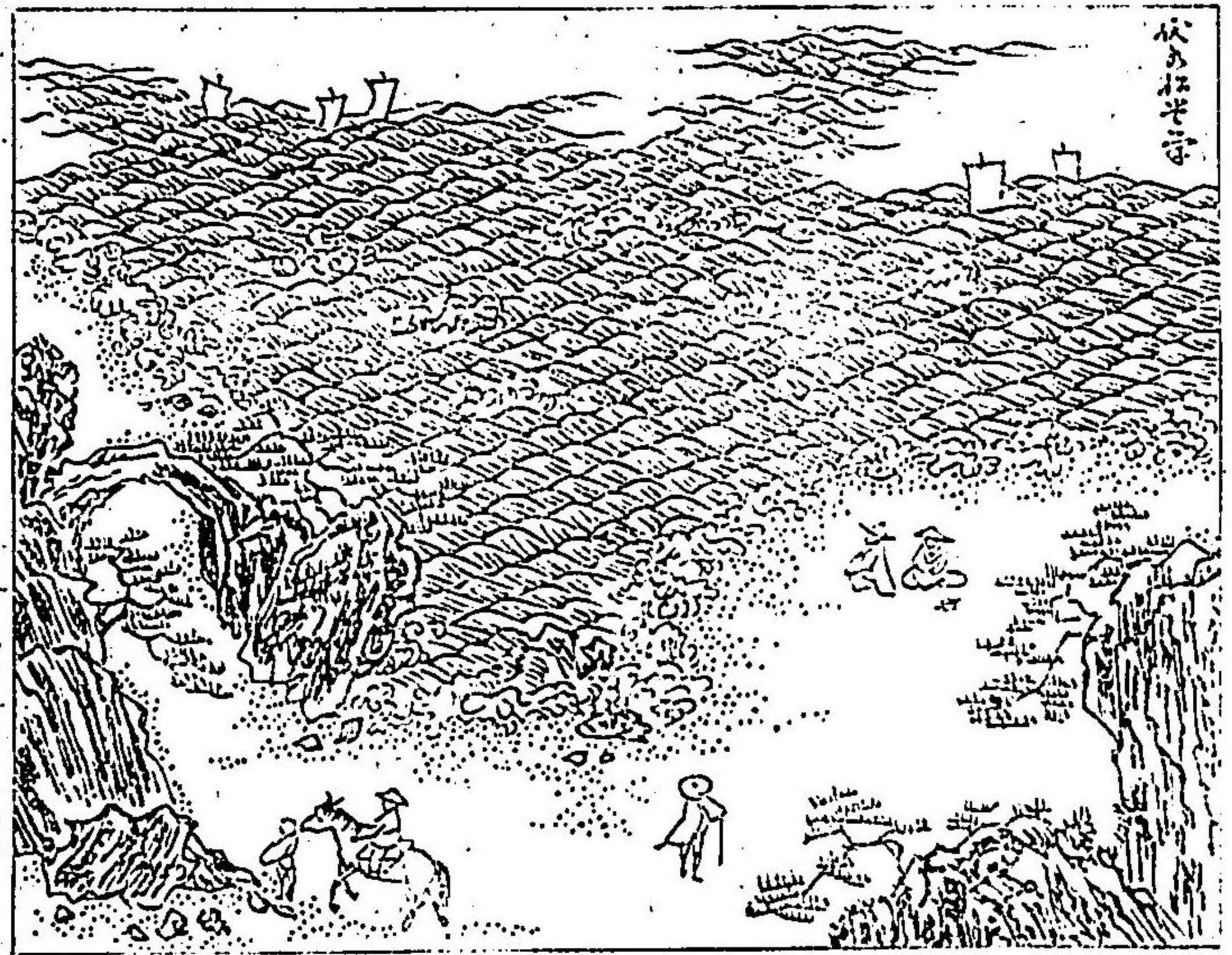
北海道の南端を望み、其盡頭に噴火山恵山の斜に烟を噴けるを指點し、本島北海道兩陸の間を交通する船艦また勇ましく眼下を過ぎ、雄大の光景自から想像の外にあるを知るべし。

青森市より起りて、陸奥海灣の西岸に沿ひ、津輕海峡に臨める三厩町に達する一路、これを松前街道と稱す。青森市より一里餘にして人口二千を有する油川村あり。それより後潟中津等の諸村を経て、蟹田村に至れば、路は爰に海を離れて、山岳重疊の間に通し、三里餘にして、其峠に至れば、津輕海峡の蒼波は忽にして、眼前に展開せられ、北海道南端の山影は來りて旅客の衣を掠め、風景の美、座ろに人をして徘徊願望去る能はさらしむ。下ると二里にして、今別村あり。三厩村は其の西方凡一里半、人口二千を有せる一小邑なれど、昔は松前地方に赴く者、皆此地より天候を待ちて渡海せるをつねとしたれば、其名は古くより世人の耳に知られ、當時は港の光景も今日の如く荒涼たりしにはあざりしなり。且、此街道は都人士往來の衝に當りたれば、この沿海の風光はものつから人口に膾炙して、外ヶ濱の名は夙に國風に

三厩村

外ヶ濱

舍利ヶ濱



古人の紀行に見たる陸奥舍利ヶ濱 (橋南齋遊紀挿畫)

も咏せられたりき。ことに、かの旅行家橋南齋は今別村字母衣カ月に於ける舍利ヶ濱のとを記して、奥州外ヶ濱に母衣月といふ處あり、此海邊に舍利濱ありて、小石の中に舍利石交れり、白きあり、餉色あり、大豆の如く米粒の如く、明徹うるほひ甚た愛すべし(津輕瑪瑙と稱する玉髓の小礫のことなり)、此處を通りし日は、天氣殊に朗かなりしかば、濱邊に座し、舍利石を拾ひ、甚た樂めり云々と言ひたる、最も當時を追想すべし。今別村に本

覺寺と稱する巨刹あり。風光の明媚なるを以て、其名甚だ著はる。

縣の中央青森若しくは弘前より北津輕郡及西津輕郡に至れる街道三あり。一は大釋迦及び浪岡より、飯詰金木中里の諸聚落を経て、十三瀉の東をめぐり、迂曲して小泊村に達するもの、一は大釋迦浪岡より五所川原町を經、木造町に至りて、弘前市より來れる街路に合し、更に北向して十三瀉の瀉口十三村に至れるもの、一は木造町より分れて西に向ひ、鱈ヶ澤町に至りて、それより海岸に沿ひ、以て深浦に至るもの即是なり。五所河原村は戸數七百、人口四千餘、北津輕郡役所の所在地にして、岩木川の東岸に位し、津輕北部の要地なり。弘前市を去る六里二十町、青森市を距ること八里二十七町なり。木造村は戸數五百、人口三千を有し、村に縣立第四中學校あり。これより十三港に至る間に、龜ヶ岡の地あり。此地は人類學上非常に著名なるところにして、明治十年東北御巡幸の際特に埋没せる土器を發掘して天覽に供したるの地、石器時代の遺物多くこの地の土中より出づ。而してその土器中最も多きは瓶類にして、土偶も亦た往々これを出せり。(沿革の部參照)城墟あり、元和八

五所河原村

木造村

龜ヶ岡

十三瀉

小泊村

年津輕信牧の城きたるところといふ。此街路の西は低き丘陵一帯海岸に連り、防風松林其の上に駢ひ、恰も屏風を擁立したるが如し。十三瀉は西北津輕兩郡に跨れる巨瀉にして、周圍八里、岩木川以下大小十三の河流皆この瀉に注ぐを以てその名を得たり。瀉の西端日本海に通する邊は、瀉口恰も囊を括りたる如く、その南岸に十三村あり。戸數二百、人口一千餘を有し、金木以北の木材米穀は今猶此の港より輸出すをいふ。其の北岸今泉と稱する處に城址あり。豪族安東氏の居りたる處と稱す。南に入洄明神の社あり、詳かに創建年月を知る能はずと雖も、祠背の土中より發掘せし佛像佛具より推せば、蓋し鎌倉時代の創設なるべし。四近の風景甚だ美に、初後の八郎瀉には及ばずと雖も、亦た東北の一勝地たるに耻ぢす。小泊村は瀉を涉り小泊崎を回りに行くこと四里、戸數四百六十、人口三千餘。更に北すれば龍飛岬は長く海中に突出して、日本本島の最北端を爲し、津輕海峡の怒濤を隔て、北海道の南端渡島國の山影と相對し、風光甚だ雄大を極む。岬端に踞して一望すれば、北海万頃の烟波相逐ひ相争ひて、その眺矚の壯絶なる、蓋し天下の偉觀

鯨ヶ澤町

なり。
 鯨ヶ澤町（第二十六圖の乙）は木造村を距ること西方五里、海濱に臨みて狭長なる市街を成し、東西十五町、南北三町、戸數千四百、人口七千餘を有し、縣下日本海岸に於ける良港なり。昔は大阪廻りの和船の發着所にして、帆樫林立、商賈踵至の盛況を呈したりしも、今は漸く衰頽に傾き、商業また萎靡せり。地に西津輕郡役所、區裁判所等あり。港灣は北に面し、辨天人造岬ありて、日本海風濤の險惡なるを遮れども、未だ充分に船舶を碇繋せしむるに足らず。殊に毎年冬季に至れば、西北の風浪甚しく、それを拒がんが爲に巨費を投じて木造の防波堤を築けり。これより海岸を西に傳ふこと四里、大戸瀬の奇景は俄然として其の前に横はる。此の地方の岩石は凡て第三紀層なる斑綠色の角礫質凝灰岩より成り、奇岩の削立するもの二、一を大戸瀬一を小戸瀬と稱し、怒濤の來りて其の岩脚に奔跳するさま、さながら銀山の崩るゝがごとし。又た其附近千疊敷と稱する地は海濱一面の平然より成り、よく數百人を座せしむるに足る。其の一部回みたる處々に海水を湛へ、恰も酒を盛れる

大戸瀬の奇景

盃に似たるを以て一に呼んで盃沼と言へり。蓋し西海岸中、最も著名なる勝地なり。

深浦村

猶ほ進むこと西南六里、また一港を得。即ち深浦これなり。猿神岡崎の兩丘は海水を擁して一小港灣を爲し、市街これに面して、戸數四百、人口二千二百餘あり。灣内水深く風波穏かなるを以て、往昔より大阪廻の船は皆な風濤の難を此の地に避くるを常と爲せり。港の中央に暗礁あり、これを傘の瀬といひ、船舶の出入甚た危険なりしが、先年縣費を以てその上部を破碎せしを以て、稍安全なるに至れりといふ。村内に一古刹あり、圓覺寺といふ。地は丘陵の上に位し、樹木繁茂、風光明媚、本尊は觀音の立像にして、殿閣の美なる、縣下稀に見る所なり。此寺由緒を詳にせずと雖、藏せる古文書によれば甚だ古く、康正三年永正三年文明十九年等の造營書あり。又た鰐口の銘に至徳三年六月二十四日等の文あり。これより海岸を傳へは、絶壁高く怒濤の上に聳えて、風光また甚た雄大なり。然れども街道は深浦より全く海に離れて、山中を行くこと三里、岩崎に至れば、前に島影參差たる一小灣を開き、

森山の窟

危崖岩石の配置頗る奇なり。森山には有名なる岩窟あり。窟口の邊、怒濤狂瀾互に相呑噬して時に壯觀を極む。
それより砂濱を行くこと三里餘、大間越村あり。人口千餘を有する一小邑なり。猶二里半餘、小山の頂を越れば地は既に秋田縣に屬せり。

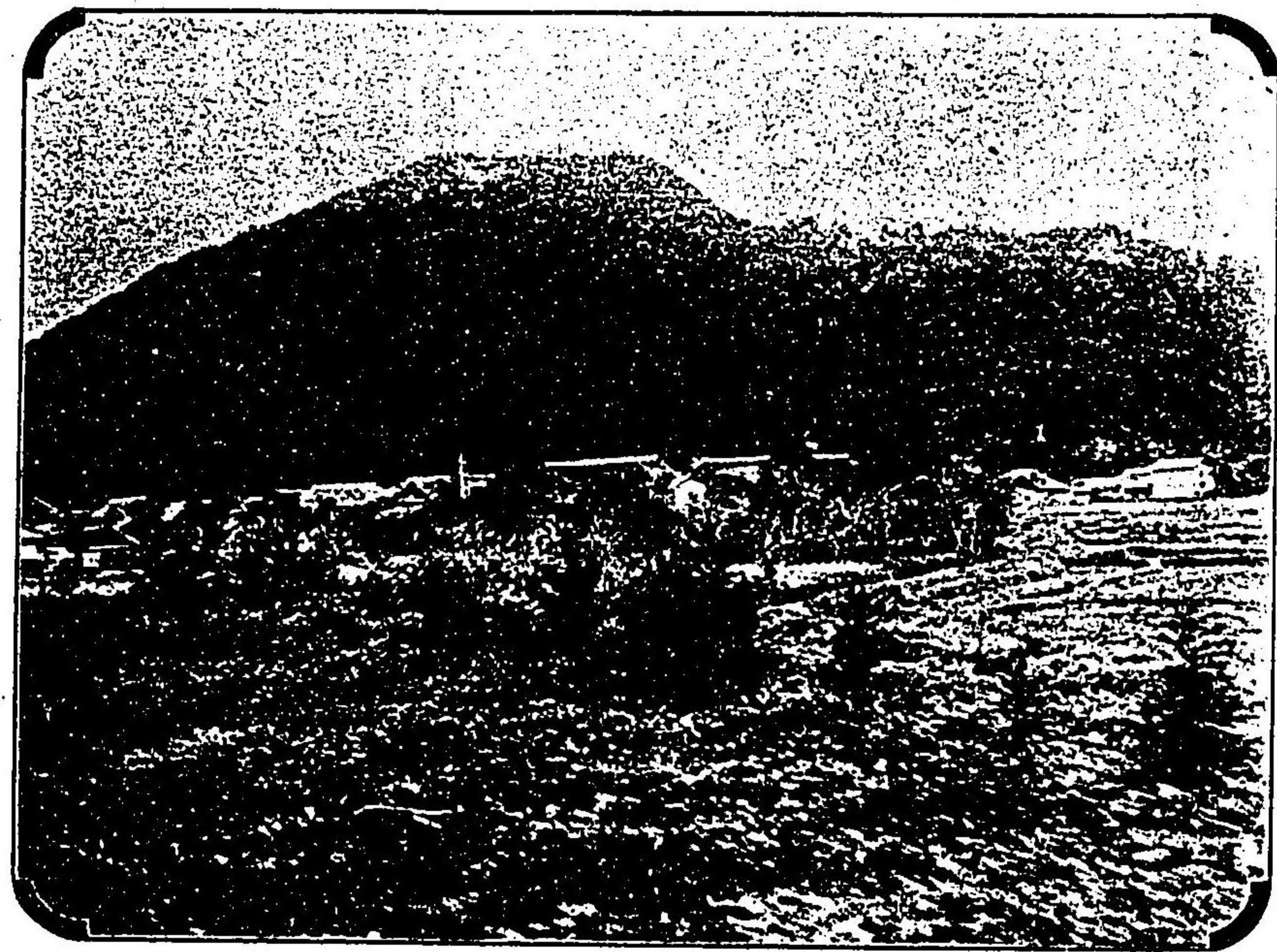
山形縣

山形縣は奥羽の西南部に位し、東及び南は山嶽重疊自然の境界をなして宮城福島の二縣に接し、北は秋田縣に隣り、西は一部新潟縣に境し、一部日本海に面す。縣廳を山形市に置き、羽前國の二市十郡と羽後國の一郡とを管す。二市とは山形及び米澤を云ひ、十一郡とは東村山西村山南村山北村山最上東置賜西置賜南置賜東田川西田川及び羽後の飽海郡是れなり。東西大凡二十五里、南北大凡三十九里、面積凡そ五百八十八方里九一九九方疋、戸數十二万五千餘、人口八十二万七千餘(一方里一千四百二人、一方疋九十一人)あり。而して各郡中面積の最も大なるものは最上郡にして、面積百五十方里を有し、

山形縣

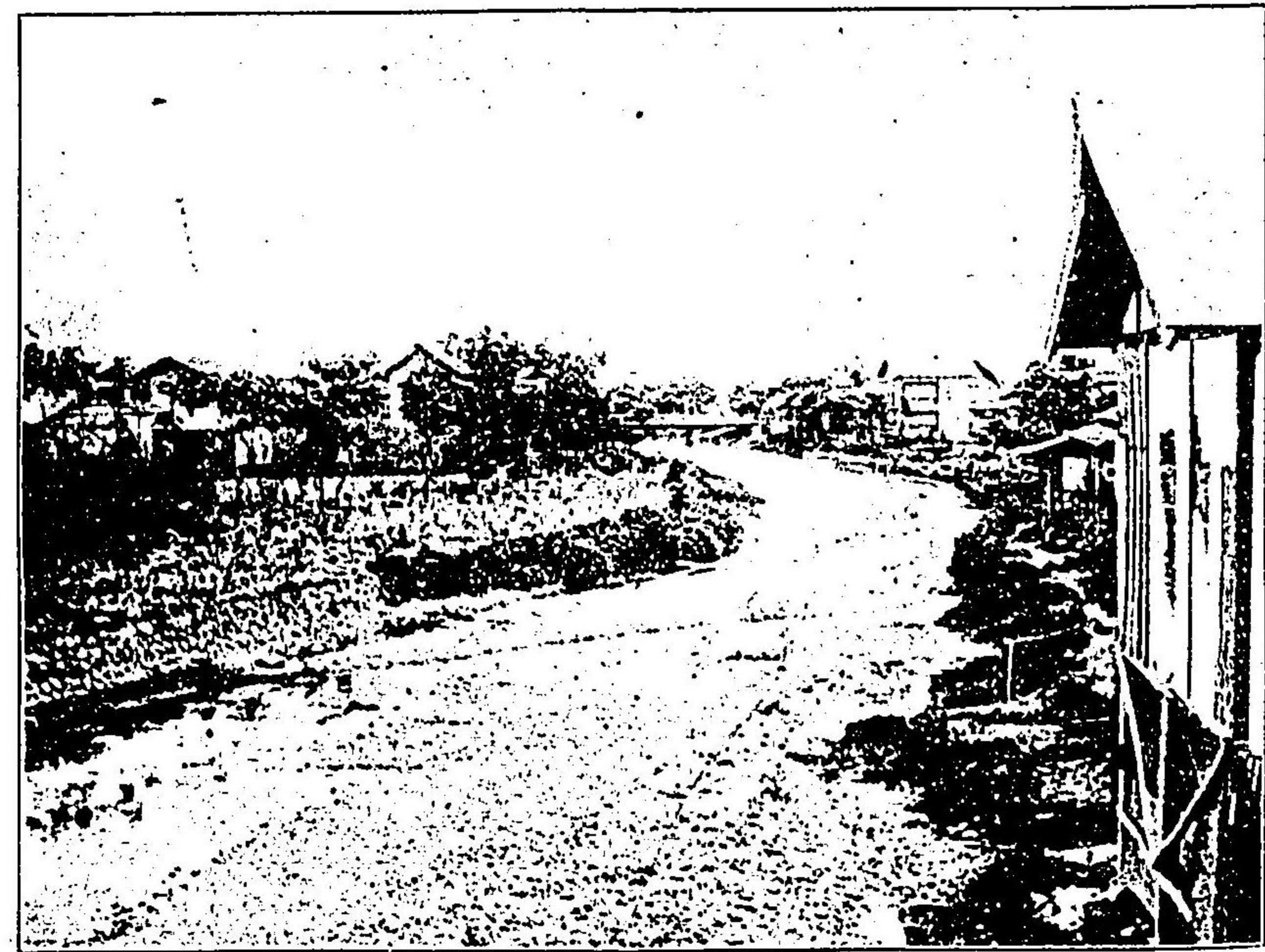
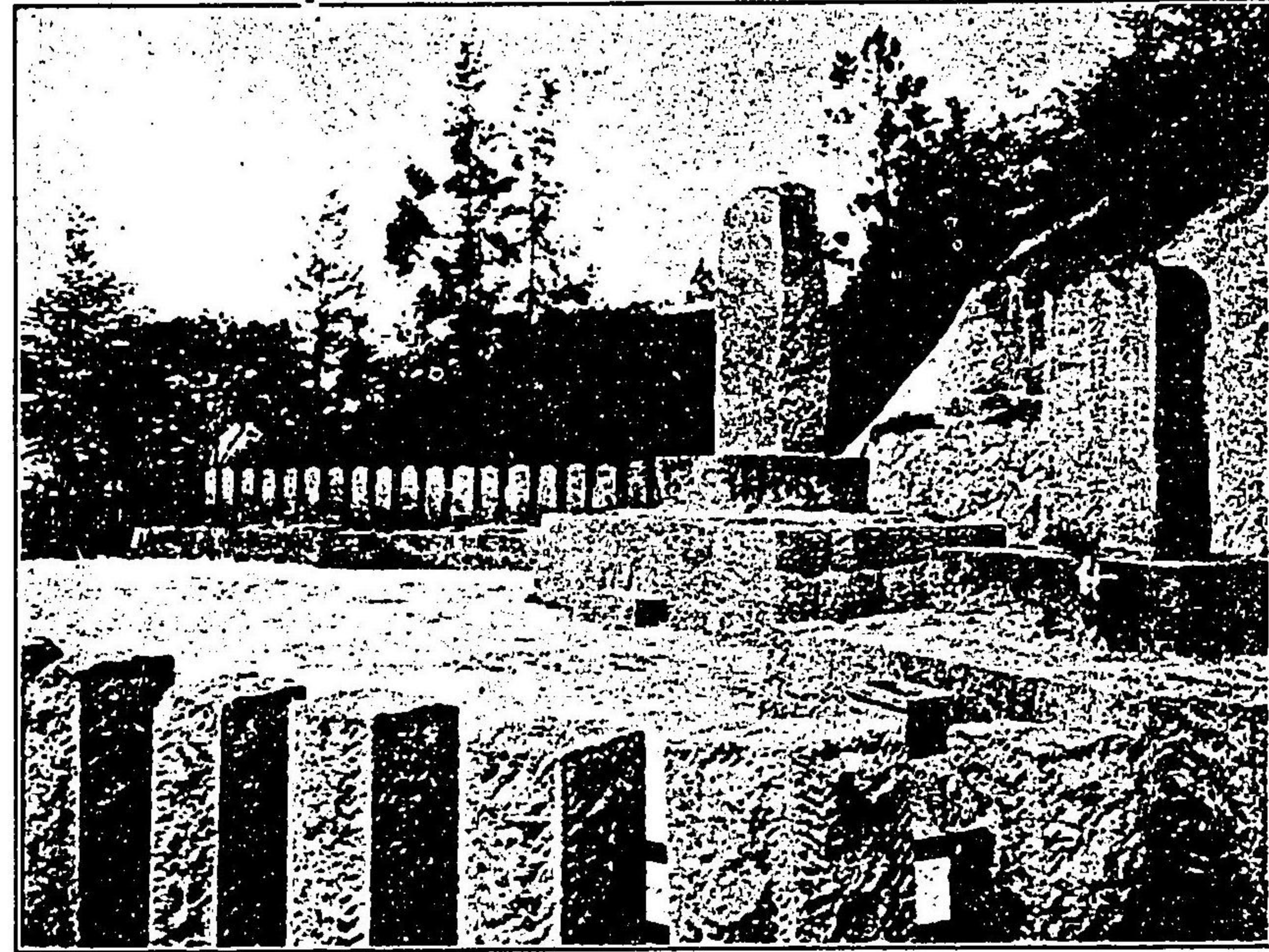
面積人口

泉 温 海 熱 代 岩 (甲)



市 松 若 代 岩 (乙)

岩代飯盛山白虎隊碑 (甲)



(第六十八圖)

岩代喜多地方町 (乙)

岩代東山温泉泉

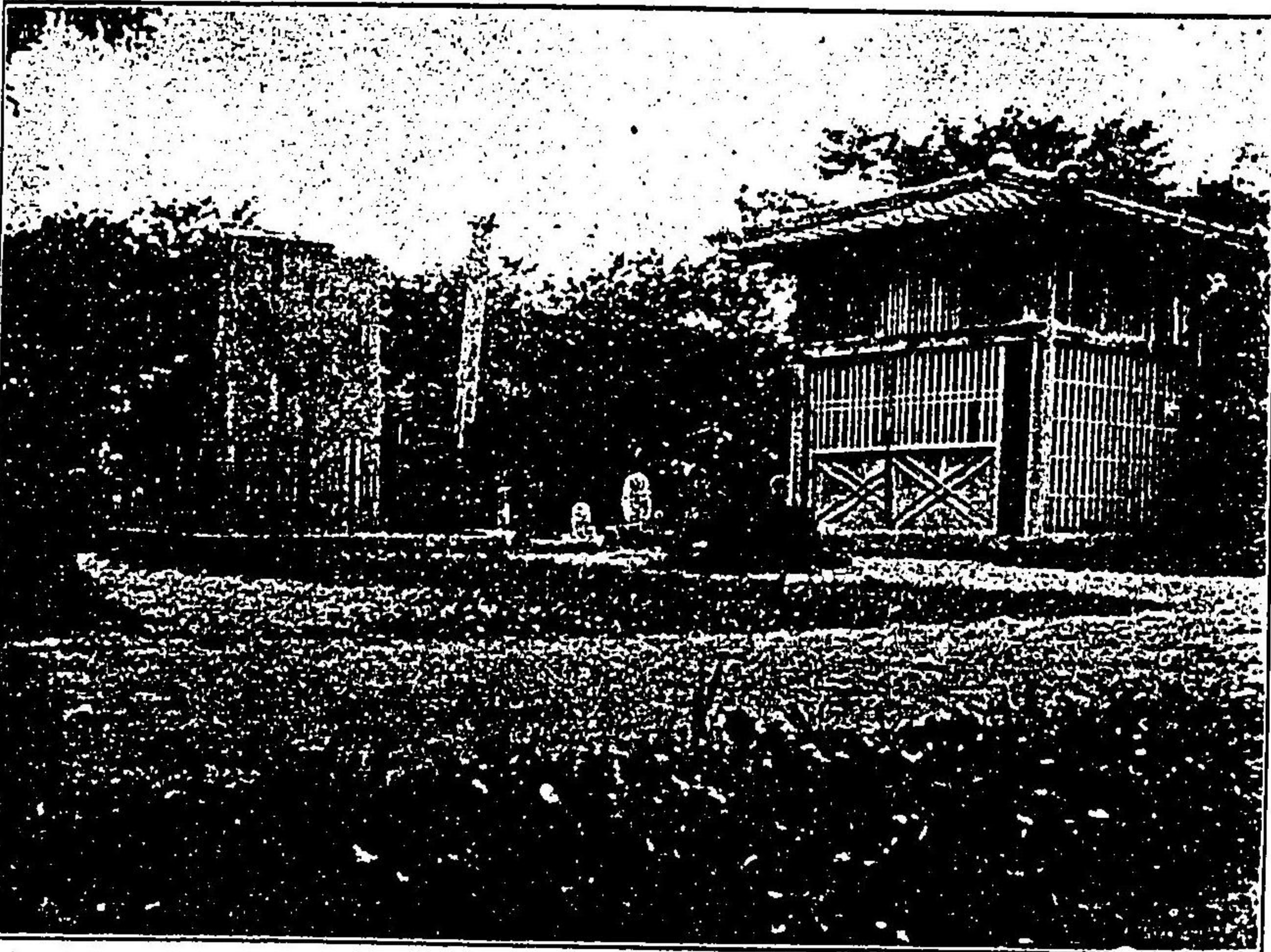


(第六十七圖)

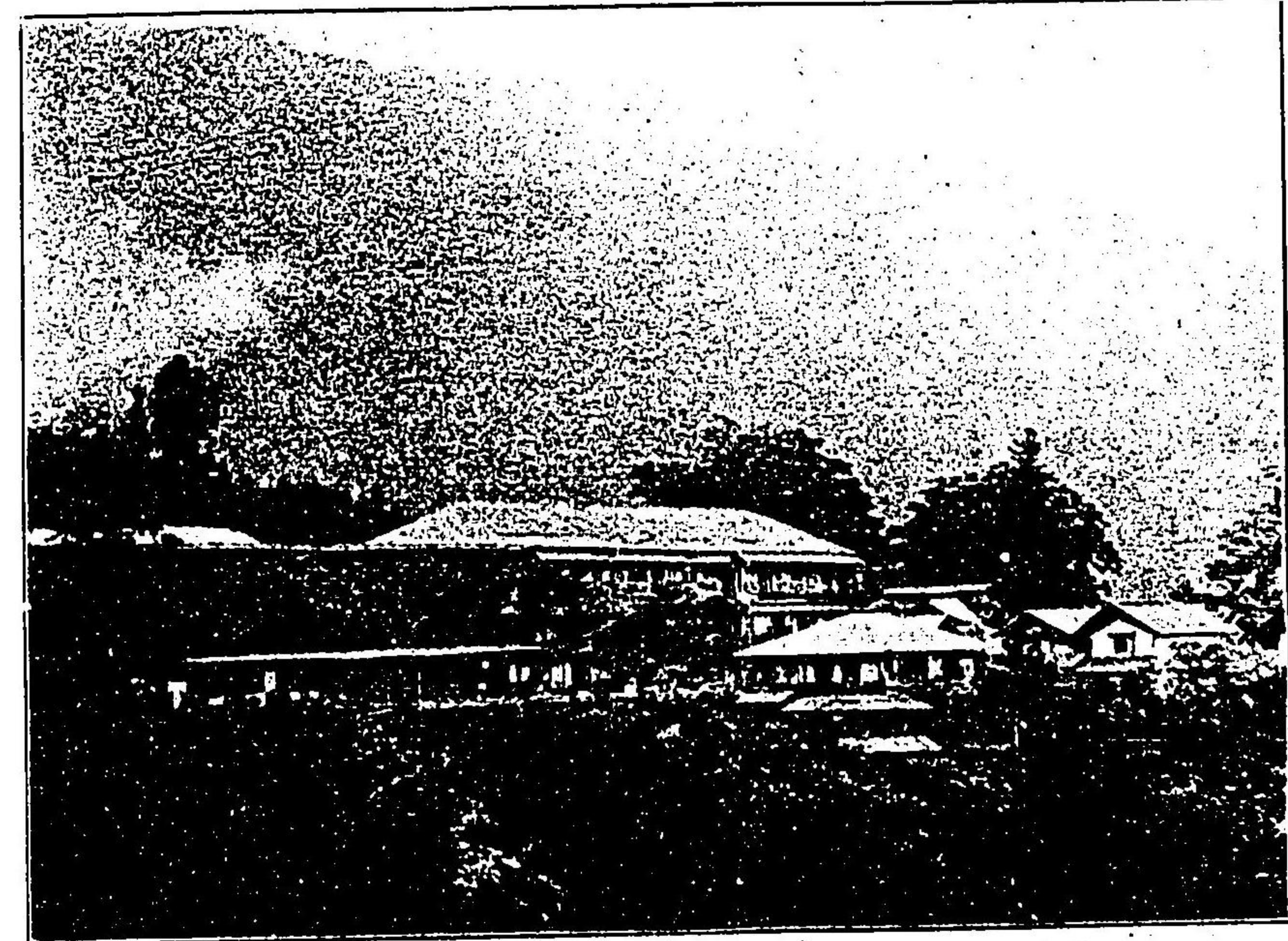
岡ヶ榴臺仙前陸 (甲)



泉温先鎌城盤 (甲)



碑墓の平子林市臺仙 (乙)

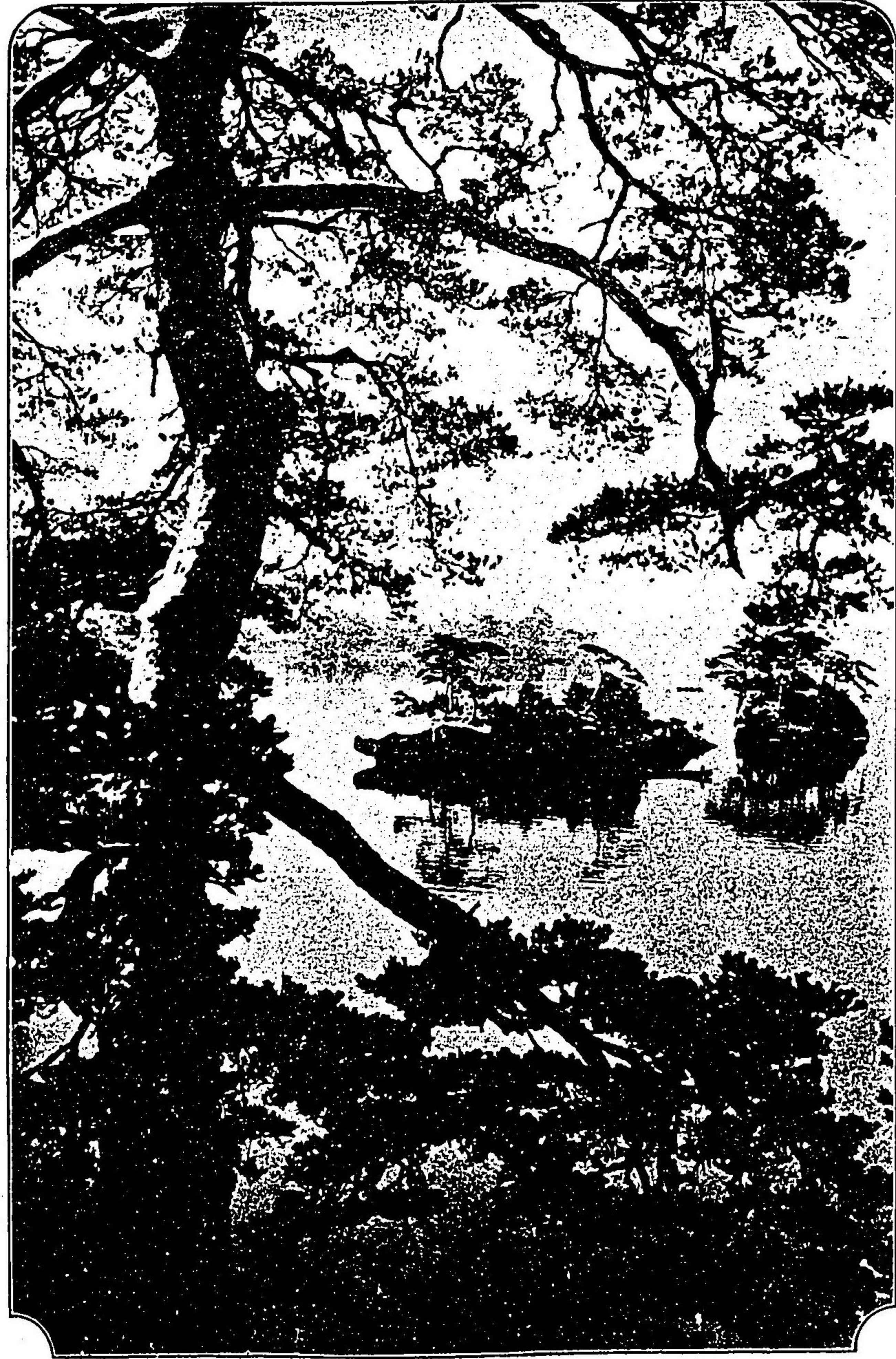


泉温根青前陸 (乙)

(第七十圖)

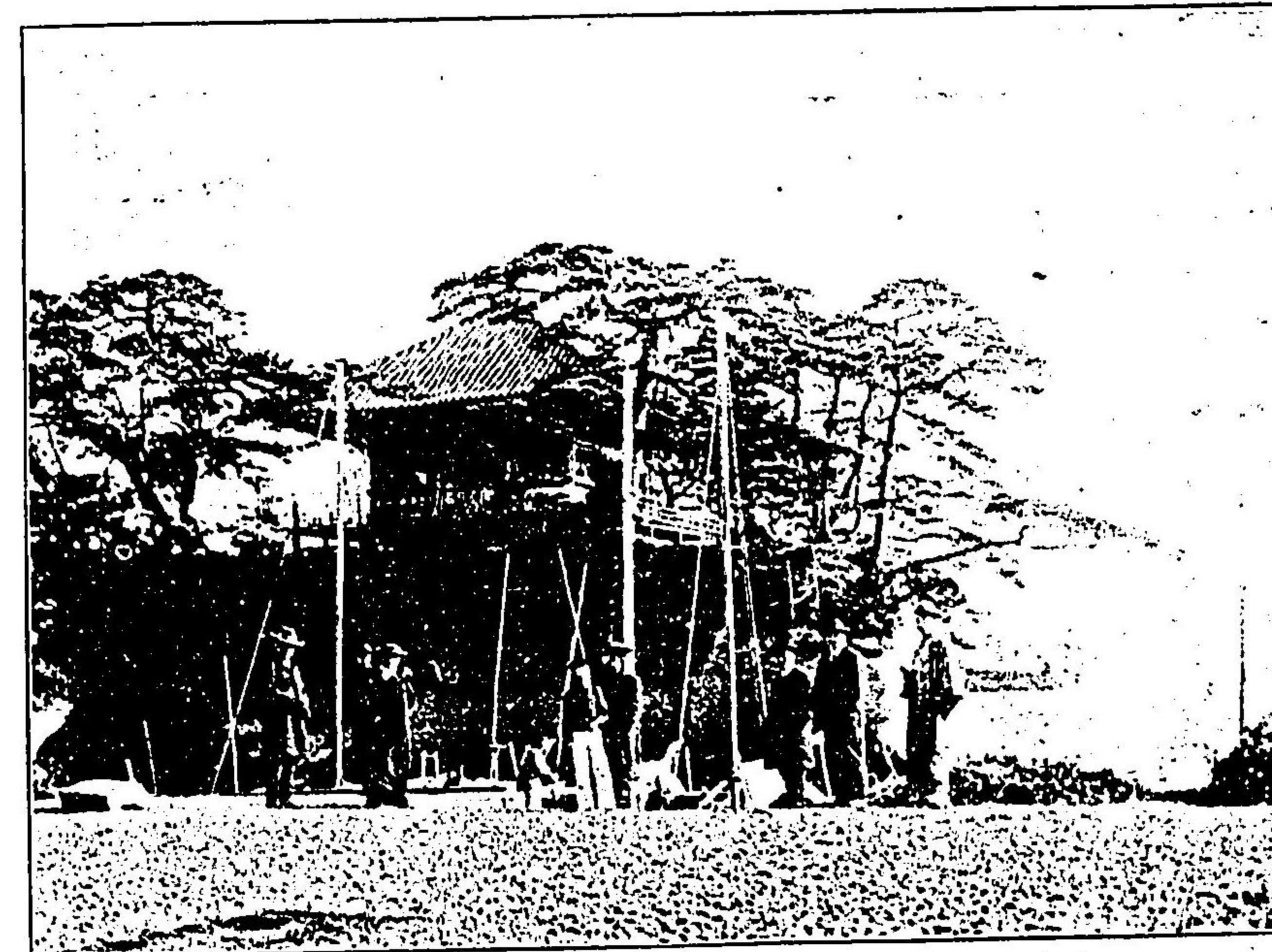
(第六十九圖)

島子二島松前陸



(第七十二圖)

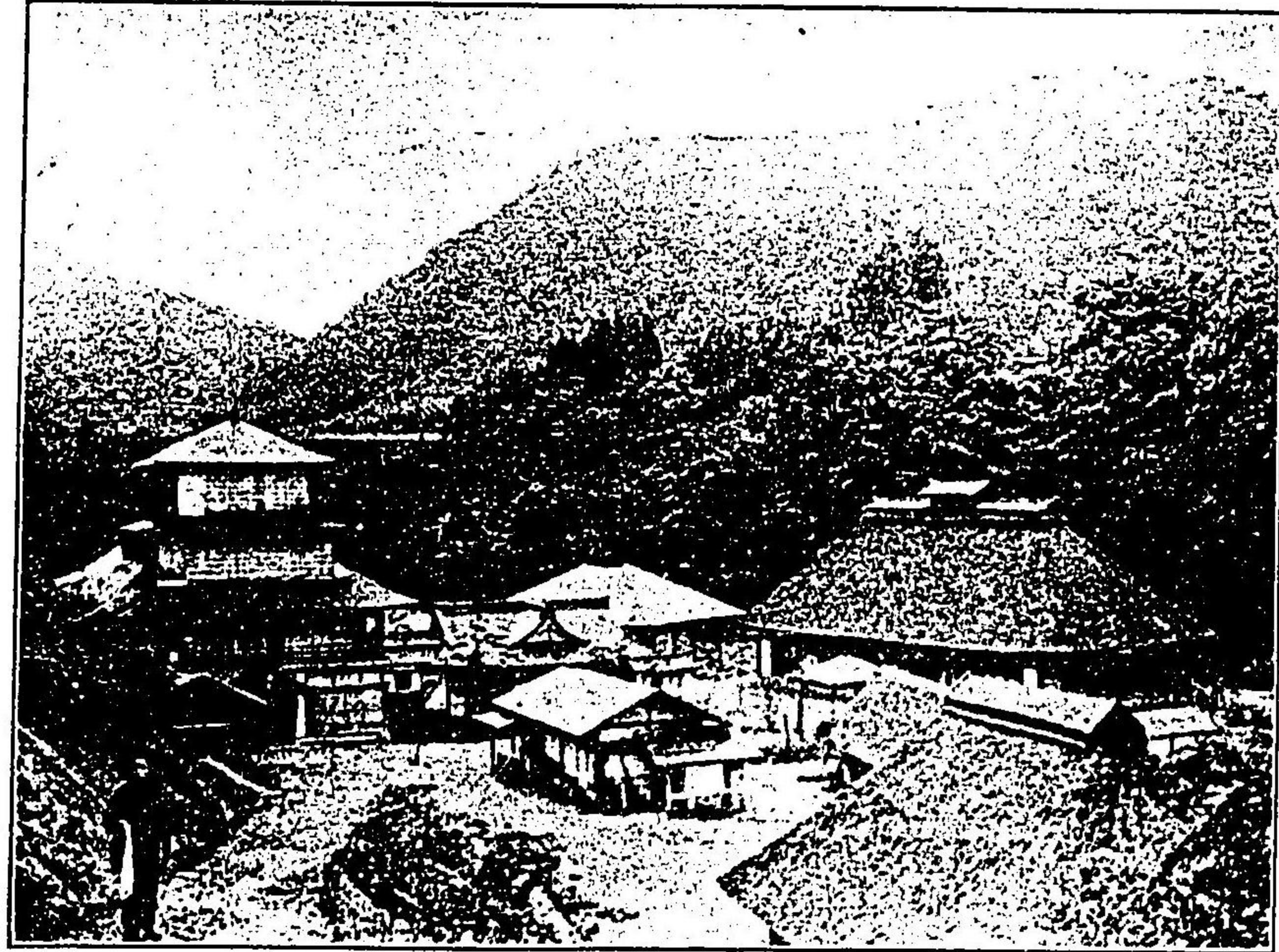
蹟古の川玉の田野前陸(甲)



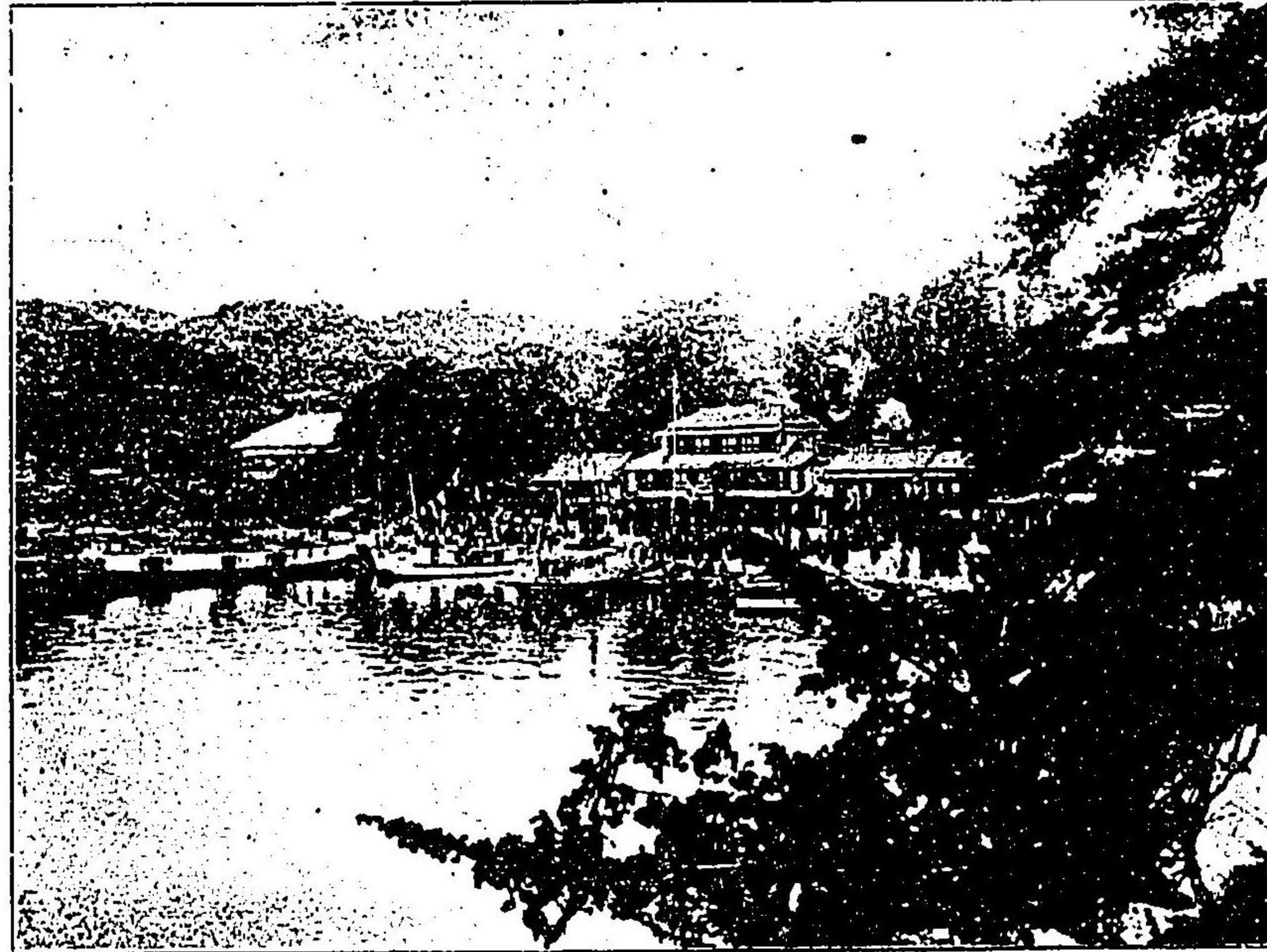
堂大五島松同(乙)

(第七十一圖)

泉 温 鉛 中 陸 (甲)



島 松 前 陸 (甲)



(第七十四圖)



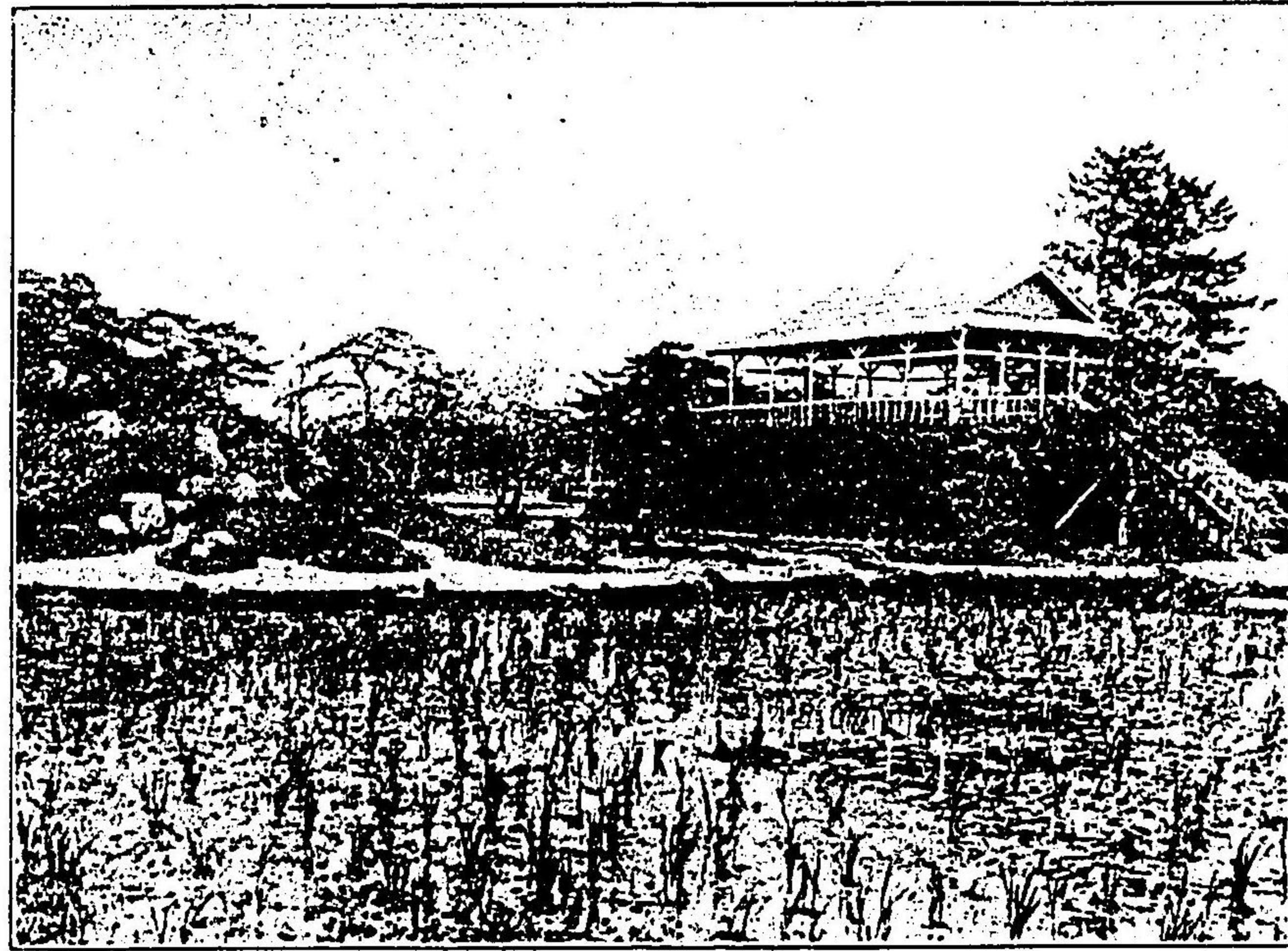
泉 温 田 湯 全 (乙)



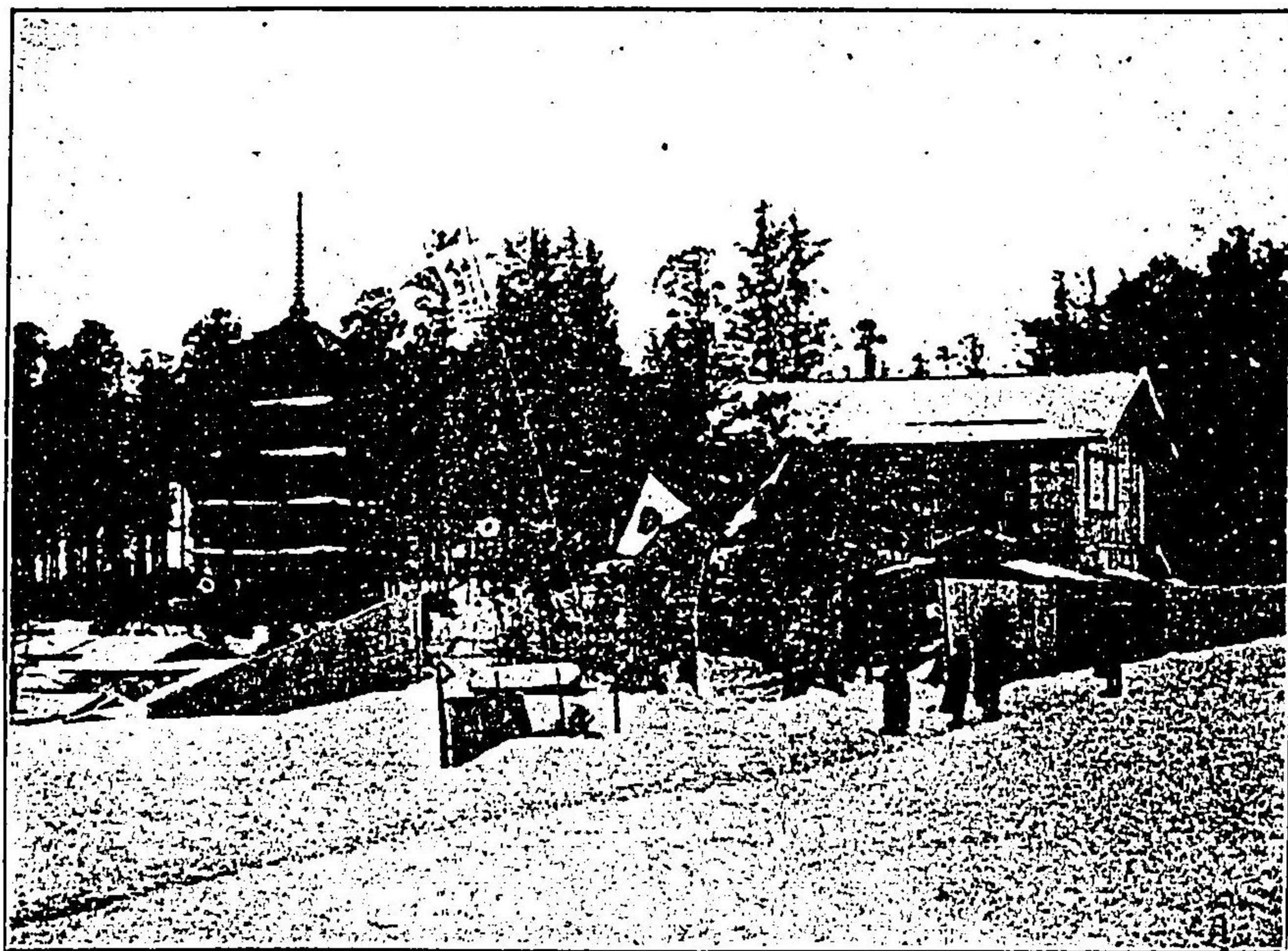
(第七十三圖)

内 境 社 上 水 町 田 高 前 陸 (乙)

園公清合森青奥陸 (甲)



(櫻割石)石雲櫻岡盛中陸 (甲)



塔の阪入市前弘奥陸 (乙)



じ望を灣森青りよ園公森青奥陸 (乙)

(第七十六圖)

(第七十五圖)

羽後酒田港

其一



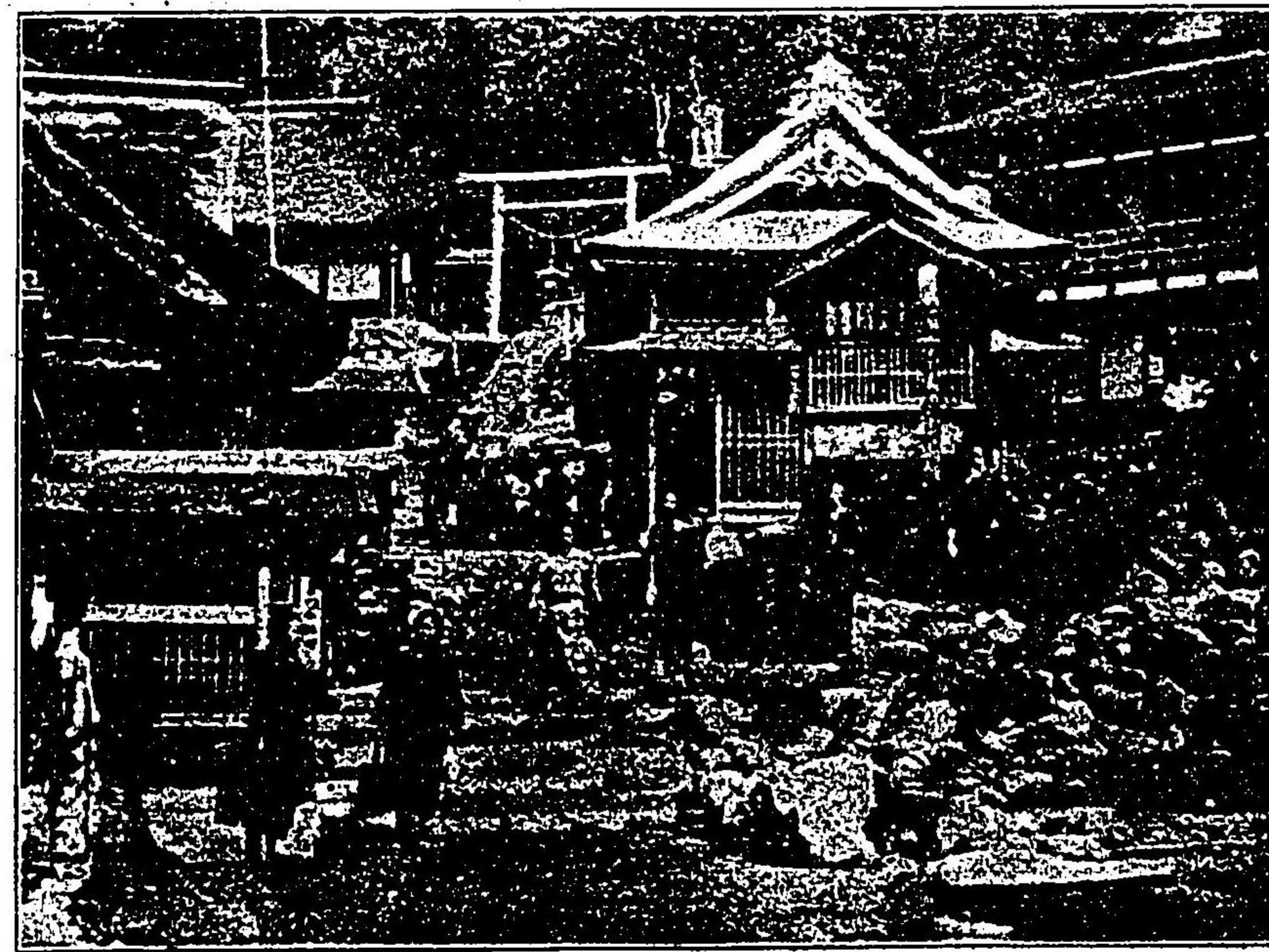
其二



同日和山

(第七十八圖)

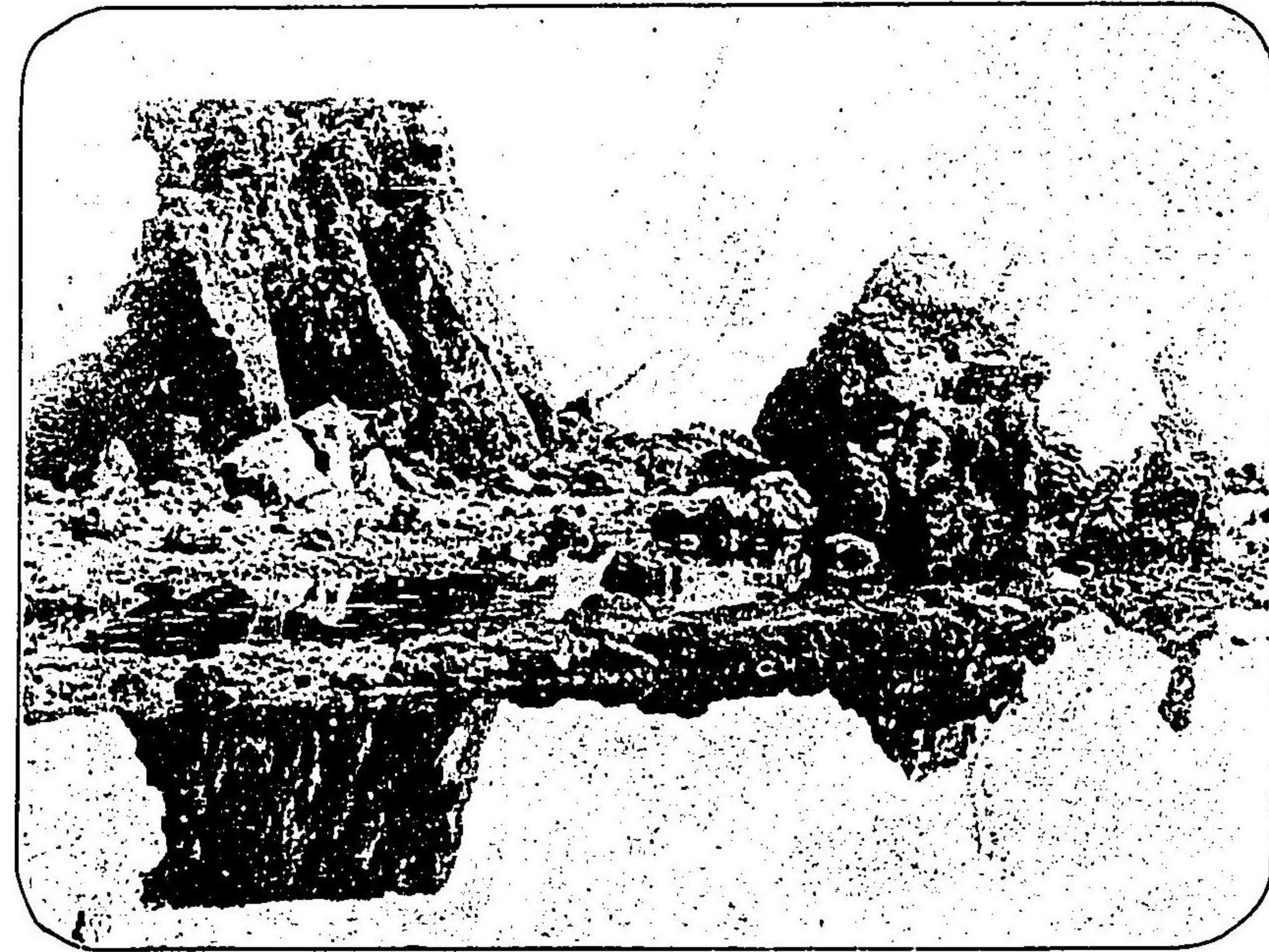
羽前米澤澤停車場附近 (甲)



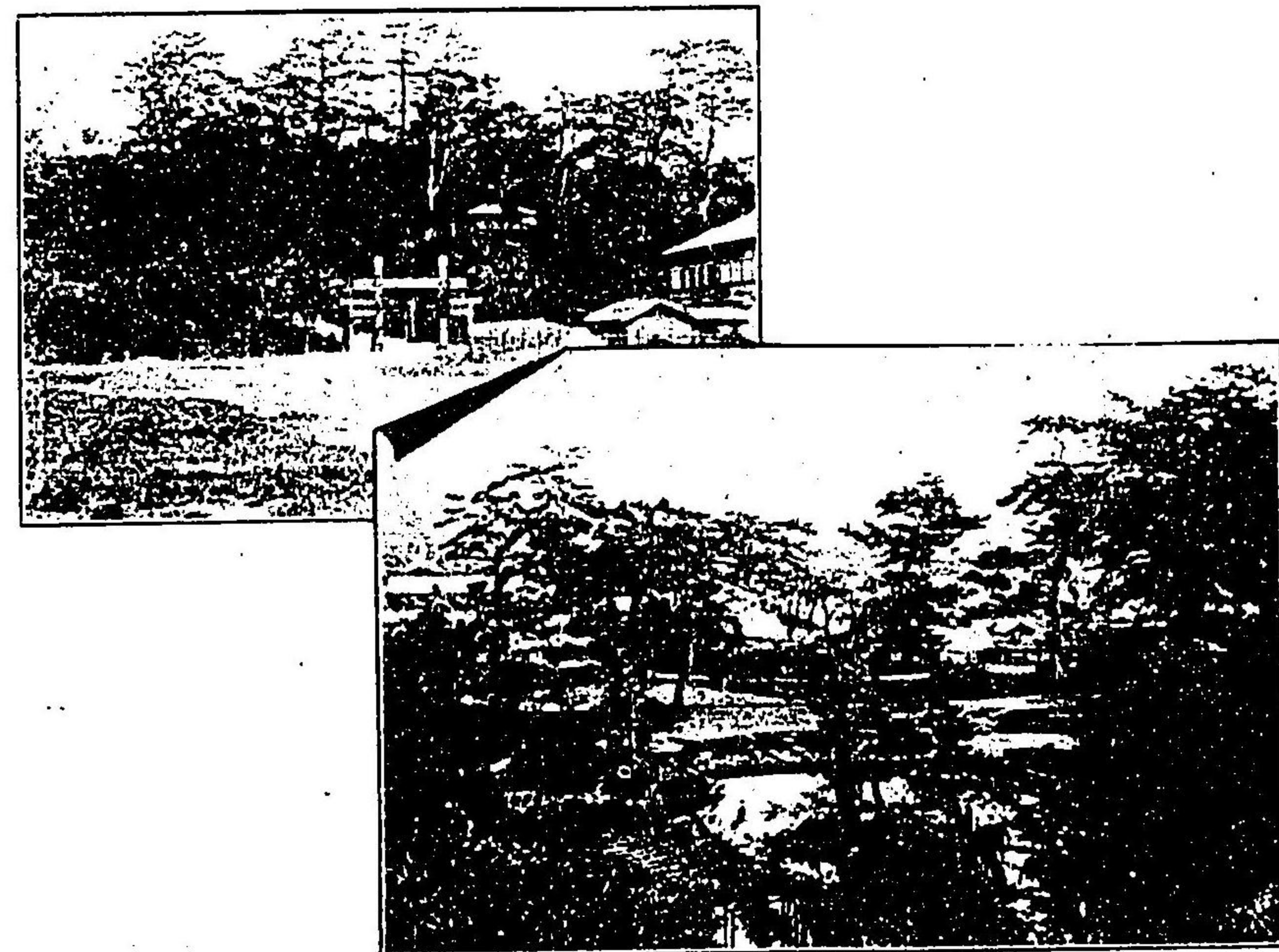
羽前高湯温泉泉 (乙)

(第七十七圖)

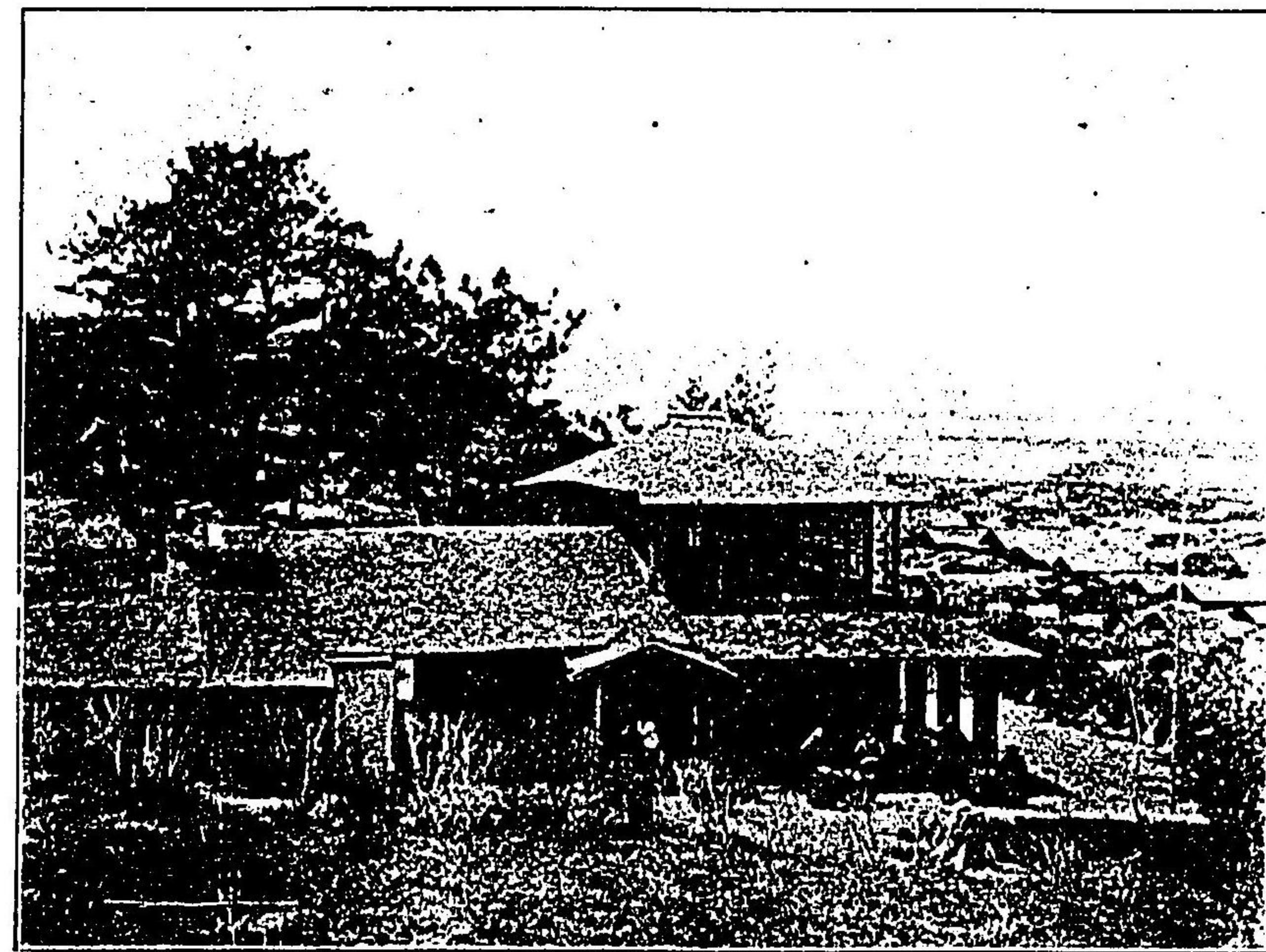
岩立帆島半鹿男後羽(甲)



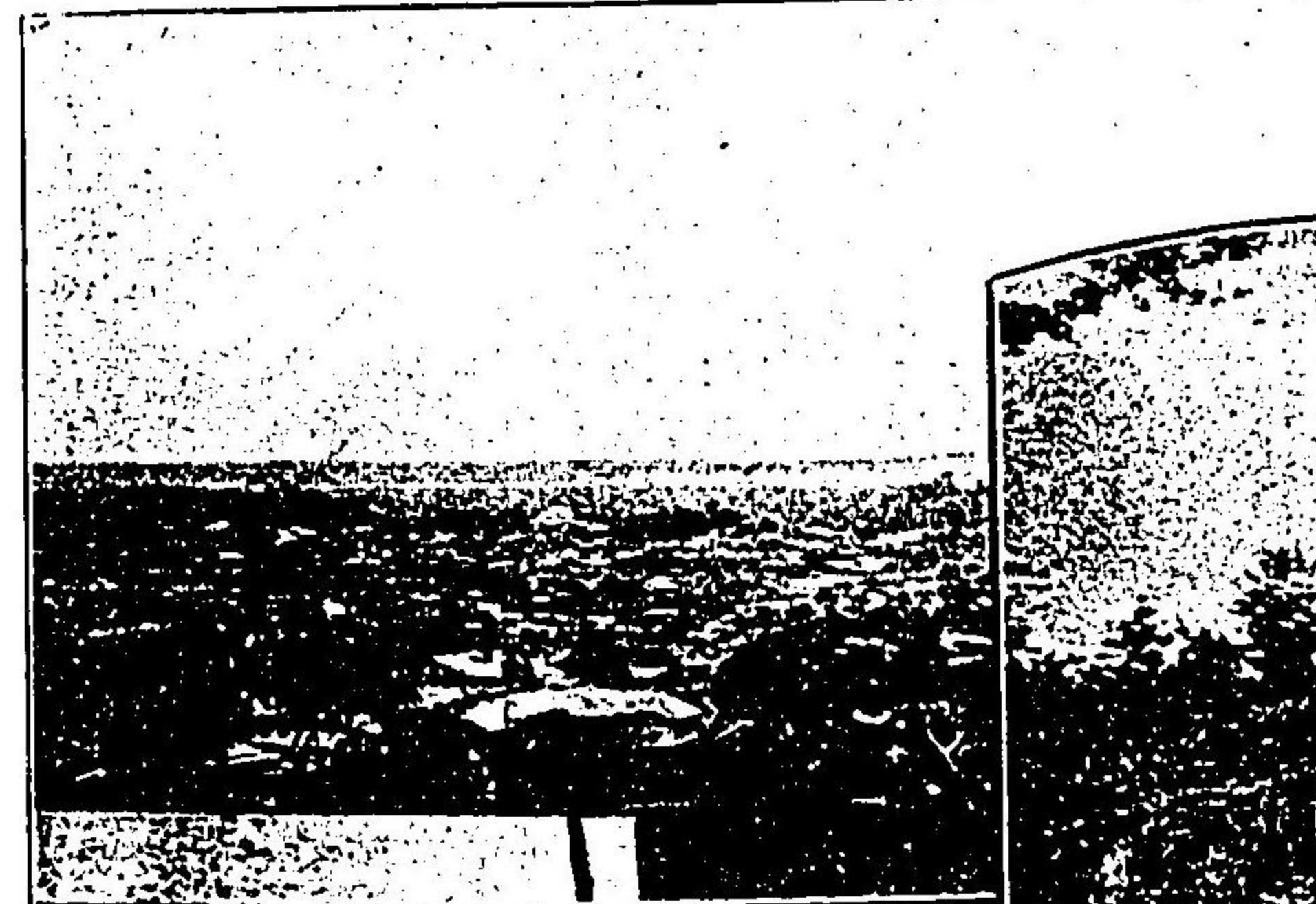
園公田秋後羽(甲)



第八十圖



山若盤代能後羽(乙)



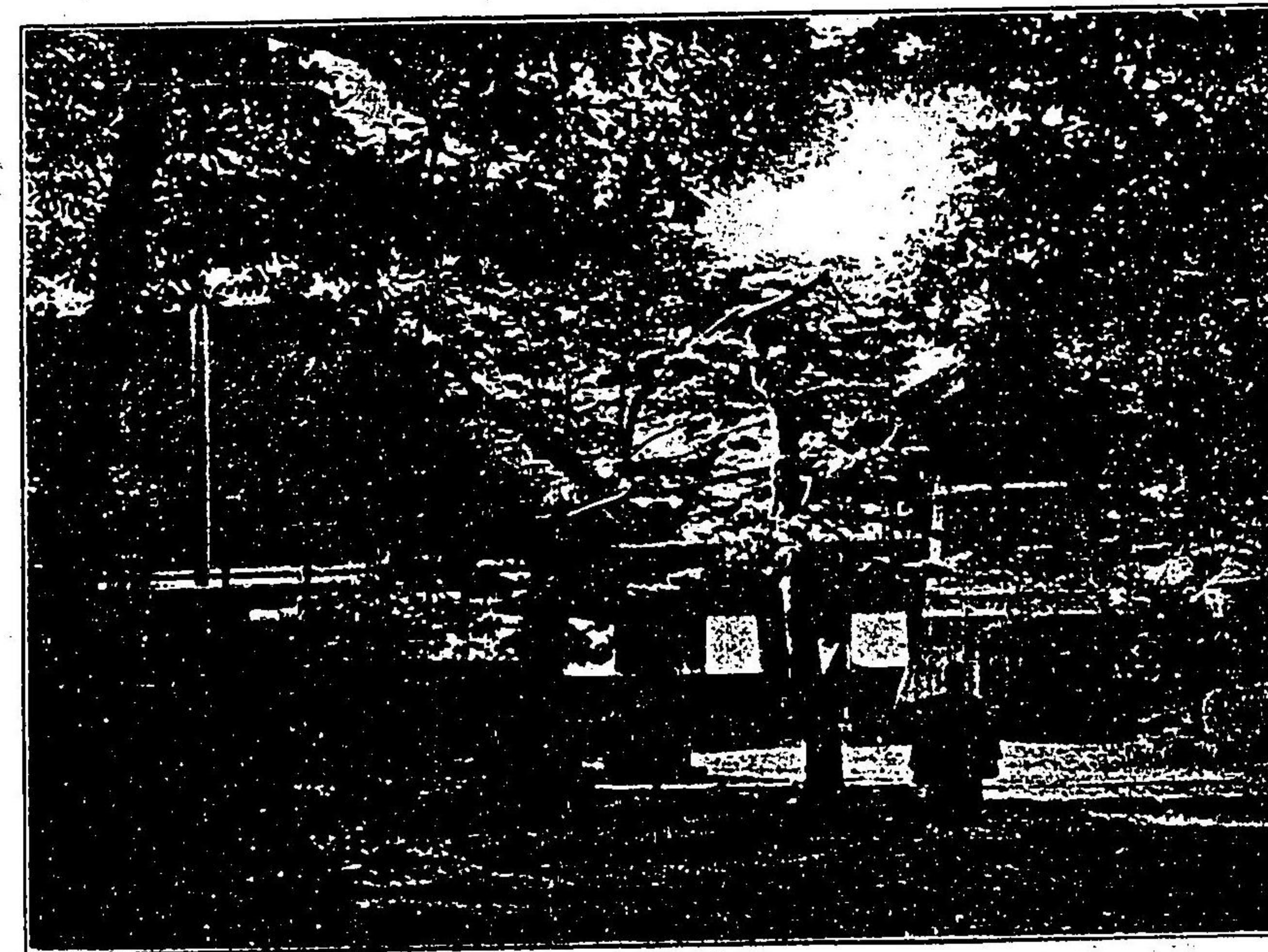
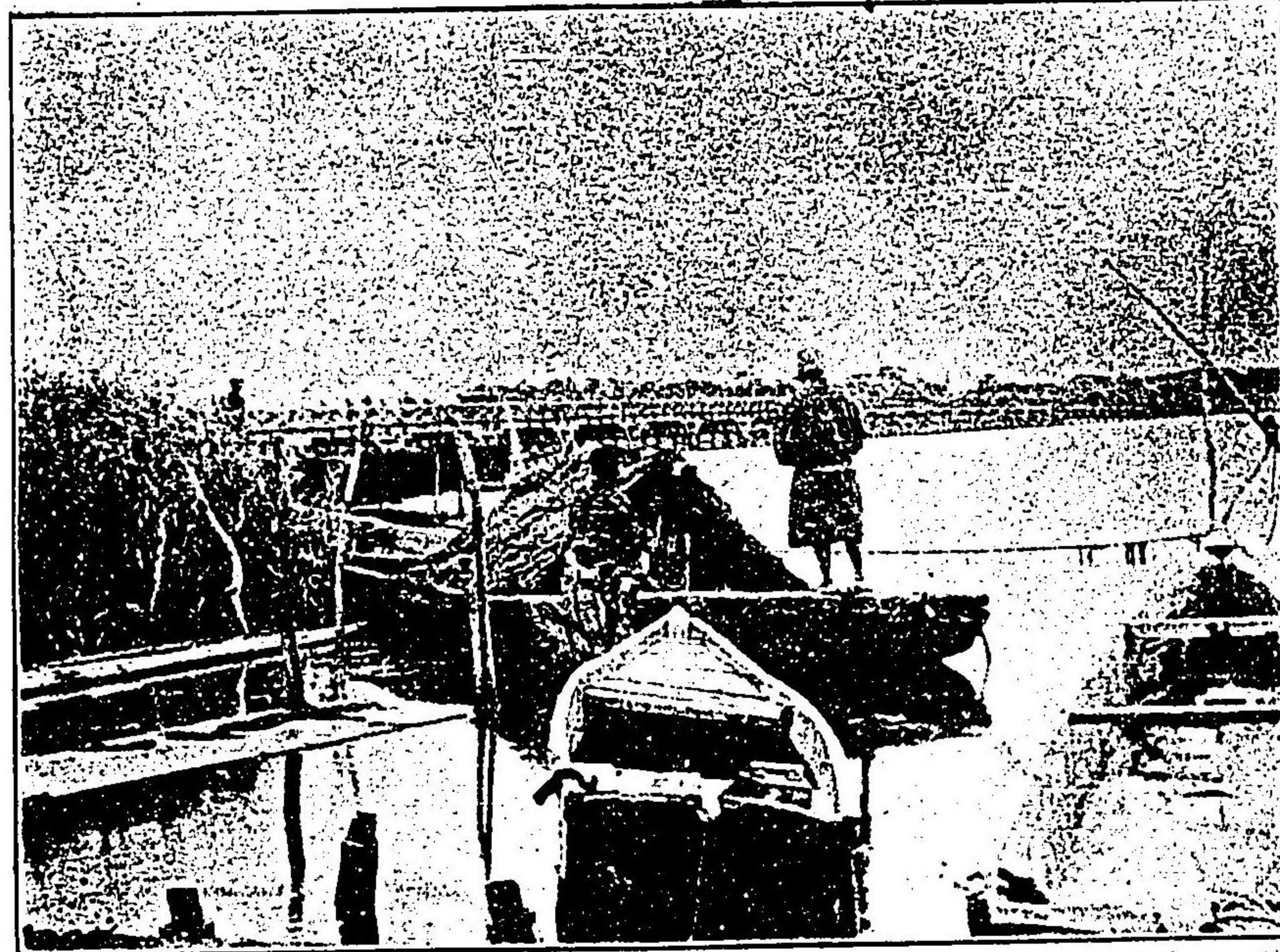
望眺の街市田秋(乙)



墓奥の胤篤田平(丙)

第七十九圖

橋 羽 兩 後 羽 (甲)



寺 滿 井 湯 象 後 羽 (乙)

第八十一圖

地勢

米澤山形の兩
平野

これに次くものは西置賜の七十五方里、東田川の六十三方里と爲す。而して最も小なるものは東村山南村山の二郡なり。共に十四方里を有するに過ぎず。人口の最も密なる地方は飽海北村山の二郡にして、南置賜郡を最も疎なりと爲す。

地勢は南北に長く、東西に短かく、西方北半の海に瀕せるの地を除くの外は四面に群山峻嶺相連亘し、即ち脊梁山脈は東境をなし、越後山脈及び出羽丘は國中を縦貫せり。而してこの兩山脈の間に開かれたる平野は則ち縣下第一の豊饒地なる山形平野米澤平野の横れる所にして盆地をなし、田圃よく開け、農業頗る盛んに商業工業まに甚た般はへり。米澤平野と山形平野との間には中山峙の小丘陵ありてこれを限り、共に其の中心たる米澤市山形市を以つて、箇々獨立せる繁華を保てり。今や奥羽西線その兩平野を縦貫し、以て遠く新庄地方に達したれば、其の交通運輸の便益開け、商業愈々活潑の趣を呈し來れり。而して最上川は西境山脈の峽地を出て、西村山郡左澤町より最上平野に注ぎ、月山葉山の東麓を流れ、本合海町より更らに越後山脈と出

庄内平野

羽丘陵の間を穿ち、遠く飽海田川の平野に落つ。此の沿岸は土地皆豊饒にして、村山各郡は殊に穀物の産出多きを以て名あり。置賜の一部、最上川の上流の未だ峡谷の地を出でざるの邊は、ことに養蠶を以て其の名縣下に高く、荒砥町長井町等桑樹の栽培を見ざるところなく、繰車の音また到る處に聞ゆ。而して米澤市の織物を以て東北に著名なるは世人の夙に知る所なり。

されど農業の盛なるは縣下田川飽海の各郡に及ぶものなし。田川飽海の諸郡は所謂庄内平野の地にして、山脈を以て、全く最上川上流の平野と隔絶し、風俗人情又甚だ此等の地方に異なるものあり。庄内平野は、沃野遠く開け、北には鳥海山の秀拔なるを仰ぎ、東には月山を戴ける一聯の山脈蜿蜒たるを控へ、西は全く日本海に瀕して、其沿岸新潟縣界鼠ヶ関ネズガキより秋田縣界吹浦フクノ浦に至る間には、加茂酒田の兩港ありて、海濱の風光又甚だ明媚に、白沙青松相連り、湯ノ濱温泉一帯の地は實に縣下に於ける樂園の稱あるに至れり。殊に酒田町及び鶴岡町は山形米澤二市に次げる都邑にして、實にこの平野の西南部にあり。この平野は産業よく興り、人口の密度また縣下に冠たり。

道路

本縣、重なる産物は米生糸織物海荷等にして、米は田川飽海の二郡を以て第一と爲し、村山各郡これに次ぐ。生糸は置賜各郡市最も多くこれを出だし、米澤製糸場の如きは實に縣内第一の稱あり。織物は米澤織これが最たるものにして一年の産額五十万圓餘に達すといふ。其他、西田川郡大山町の酒、米澤町の漆器、西村山郡の茶、最上郡小國町の牧馬、最上置賜各郡の材木等あり。海岸には魚介海藻の收穫また尠なからず。

縣内、鐵道は福島縣より來りて板谷の嶮嶺を横斷し、米澤平野山形平野を縦貫して新庄町に至れる奥羽西線あるのみ。道路は鐵道に沿ひて北に駛れる兩羽街道を幹線とし、是より四方に岐るゝ者、米澤より入谷新道を経て、大峠隧道を過ぎて福島縣若松市に達する者を若松街道と爲し、小松小國を過ぎて新潟縣に達する者を越後街道と爲し、其他上の山より金山峠を過ぎ、或は赤湯より高畑二井宿を経て宮城縣に至るもの、山形市より笹谷峠を越ゆる者、山寺より二日越を越ゆるもの、神町より關山新道を過ぐるもの等あり。更に北して、尾花澤より宮城縣古川町に出づるものと、舟形町より瀨見温泉を經

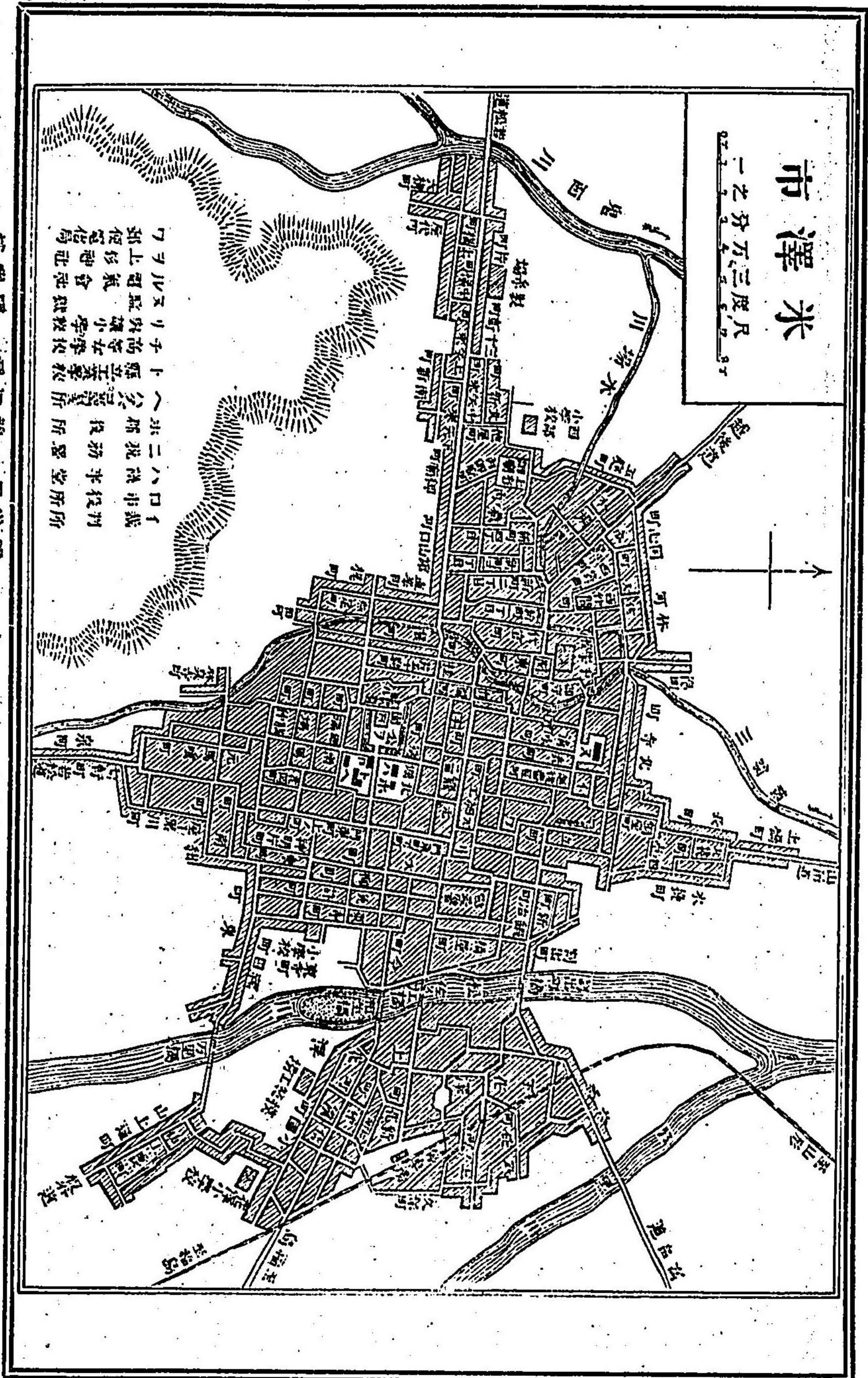
て、玉造郡鳴子に達するものとの二路あり。庄内地方に達するの道路は舟形町或は新庄町より西折し、本合海町にて最上の清流を渡り、磐根新道を過ぎ、清川狩川の諸水を渡り、之より二路に岐れ、一は西して鶴岡町に至り、一は西北に向ひ酒田町に達す。濱街道は新潟縣界鼠ヶ関より來り、ツルギ温海三瀬加茂等の諸邑を経て、酒田町に至り、これより直ちに鳥海ツルギの山麓吹浦町に達して秋田縣に入る。

福島縣境には山嶽重疊して、栗子峠板谷峠の險あり。行旅皆その難きを憂ひたれど、今は奥羽西線の工事漸く成り、最早旅客のその險を越ゆるの要なく、交通の便全く昔日に異なるに至れり。板谷嶺を横断せる鐵道は東北各地方最も開鑿に困難なりし地にして、福島盆地より次第に登り來りて幾多の隧道を過ぎ、山愈々深くして中に板谷關の二村に停車場を置く、之より漸く北走して山を下らんとする處、廣潤なる米澤の平原は眼下に展開して米澤市の人家は歴々其間に指點するを得べし。

米澤市は南置賜郡の北部に位し、沓上杉氏の城市として甚た著名なり。市

板谷隧道

米澤市



米澤市 地形圖

坊の數百三十二、市街は東西に長くして一里十二町、南北に狭くして三十町、戸數五千五百餘、人口三万千餘を有し、其中央に舊城址あり。街衢整正、人家櫛比頗る都會の趣を爲せども、茅葺の家屋多きが爲めに蕭條の趣ありて、山形市に比し、外觀甚はた寂寥なれど、商業は生糸織物等を産して市況甚はた活潑なり。土地平坦、松川の水その東を流れ、鬼面川その西を擁し、近きは一二里、遠きは凡そ三四里にして山麓の地に達すべし。停車場は(第七十七圖の甲)市の東端花澤町にありて、最も繁華なる所を立町桐町大町とし、官衙には市役所南置賜郡役所等あり。其の他、山形縣立工業學校米澤中學校米穀織物取引所等の建物あり。此地は米澤織の産地にして、機杼の響到る處に喧しく、一週一日の市場には尠なからざる賣買の取引ありといふ。(工業の部署)市の中央にある米澤城址は始め松崎城と稱し、後舞鶴城と呼び、曆仁元年源頼朝の臣長井時廣の始めて是を築きたるもの、七世の孫廣房に至り、伊達政宗の滅ぼすところとなる。天正十八年豊臣秀吉これを蒲生氏郷に與へ、後、上杉氏の領と爲り、直江兼續これに居りしが、慶長六年上杉氏會津より移りて、

佐氏泉公園

歴代これに住し、以て維新に及べり。現今、この地を以て公園と爲し、以て四民偕樂の地と爲せり。濠渠四方をめぐり、入口に舞鶴橋のあるあたりは、之れ往時大手門のありし處なりといふ。上杉神社は其中央にあり。縣社にして上杉謙信及び治憲の靈を祀る、治憲は即ち鷹山公にして、境内に其紀功碑あり。以て農桑織績の業を勸め、治國富民の政を力め、士民今日に至りて猶ほ其の恩澤に霑ぶの大なるを勸す。林泉寺は字林泉寺町にあり。曹洞宗にして上杉氏の故城越後春日山より移したるもの、市内第一の巨刹にして、寺域大凡八千坪、上杉氏歴代の墓は皆この寺にあり。直江兼續の墓も亦た其中にあり。境内閑雅にして幽邃の趣を極む。其他、極乗寺日朝寺長命寺等あり。市を東に距ること凡そ二十五町、字花澤に佐氏泉公園あり。これ、米澤市を訪ふもの、必ず過ぐべき處にして、その境の静寂なる、田圃の中に一小丘を成し、老松の盤旋、清泉の噴出、人をして思はず悠遊半日の閑を消せしむ。傳べ云ふ、此地は佐藤正信の宅址にして、其の子繼信忠信は此處に生ると。而して湧出する清泉を名けて佐藤清水といふ。これ、園の其の名を得たる所

以なり。傍に蟠屈せる小丘を月見山と稱し、佐藤氏觀月の地と稱す。丘南に一禪房あり、正徳山常信寺と號し、三社あり、正信繼信忠信の靈を祀れり。且、園内二三の茶樓あり。

また、市の西北一里餘に成島八幡宮あり。寶龜八年將軍大伴駿河麿の建立にして、坂上將軍の再建せし者、後、源義家の神領を寄附したることあり。蓋し、國內の古祠なり。

南置賜の一郡、温泉極めて多し。小野川温泉白布高湯温泉吾妻温泉五色温泉姥湯温泉新五色温泉新姥湯温泉滑川温泉佐原澤温泉等あり。而して景色の幽邃閑雅なるは姥湯温泉を以て第一と爲す。されど地の深山の中にあるを以て、冬に至れば家を鎖して里に下るをつねとす。五色温泉また浴すべし。

高島町は米澤市の東北三里餘、國道を右に離れて、糠の目停車場より二里餘を隔てたり。赤湯町より二井宿を経て福島縣に達する要路に衝り、戸數六百、人口大凡四千五百餘を有し、地に東置賜郡役所あり。城址あり。織田氏の天童に移らざる以前此地に城主たりき。大字安久津に入幡神社あり。境内

高島町

龜岡文珠堂

に千年松と稱する巨松あり。芦恒馬頭觀音は大字鹽の森にあり。此の附近有名なる古墳あり。今猶ほ種々の古器物を發掘せり。なほ南すると一里にして、龜岡文珠堂あり。寺を松高山大聖寺と號し、新義眞言宗にして、春日の作文珠菩薩を安置す。大同元年伊勢國度會郡神乳山より此地に移したるものと稱し、堂宇の壯麗なる蓋し此附近稀に見るところなり。また、堂側に古櫻樹あり、其の幹の外皮に虫喰の跡を存し、其の形恰も文珠菩薩青獅に駕せるの狀に似たり。これを以て俗にこれを虫喰文珠と稱す。

この平原より福島縣に通する道路一條あり。則ち二井宿より至れるものと金山より至れる者との相合して、福島縣桑折と宮城縣白石町とに至れるものはなり。此間を山中七ヶ宿と稱し、風光頗る美なり。渡瀬の材木岩もまた此間にあり。

國道は米澤より屋代川を渡りて、直ちて赤湯町に達す。赤湯町は戸數六百、人口三千六百を有し、市街稍般賑なり、ことに、地温泉を湧出するを以て、行旅のこゝに宿する者多く、鍍泉は四ヶ所に湧出し、鹽類泉にして、無色透

赤湯町

宮内町

明、浴客は年々三万に下らずといふ。町の西北に城趾あり、二色根と稱す。烏帽山に入幡神社あり。殊に赤湯沼は町の東北にありて、一名白龍湖と稱し、鮮魚及び蓴菜を生し、夏期は納涼に適せり。

宮内町は國道より北に入ること一里、最上川沿岸の諸町村に通する要路に衝れり。戸數五百、人口三千を有し、商舖相櫛比し、稍市街の趣を爲せり。町の背後なる小丘に熊野神社あり。平維盛潛居の地と稱すれども、信すべからず。

上の山町

國道を一直線に東北に進めば、米澤平原と山形平原とを劃する中山峠は其間に横りて、四面自ら狹隘なり。路傍に一大奇岩あり。高さ三丈、周圍十間、石下自ら窟を爲して風雨を避くへし。名を掛入石と稱し、上杉氏の最上氏と戦ひたる古蹟なり。南村山郡界の一小嶺を越え、前川の潺湲たる流に沿ひて下れば、上の山町は早くもその粉壁を一帶の平地に展け來らん。町は山形市を距る南三里、戸數一千、人口六千四百餘を有する一都邑にして、羽後街道は一直線に其の中央を横斷し、その中央最も繁盛を極めたり。停車場はその東南端にありて交通の便甚だ富めり。ことに此地は古來温泉を以て聞えたるの地、鶴脛温泉の名は長祿年間僧月秀なるもの、野鶴の脛を泐水に浸して傷部を洗ふを見、始めて此の泉を發見したるの故を以て始まる。現時の淨光寺は當時月秀の經營したる稱徳院の後なり。泉質は鹽類泉にして、市街の一段高き宇湯町の北、日枝神社の傍より湧出し、旅舎は大抵篋を用ひて遠く是を館内に引き、以て旅客の澡浴に供せり。會津の東山、羽前庄内の湯ノ濱と共に奥羽地方の三樂園と稱せらる。月岡城趾は湯町の西丘にありて、天文年中武衝義忠が始めて此地に築きたるもの。前に藏王の連山を望み、眼下に酢川の流を帯にして、地勢廣濶、眺望頗る佳なり。維新の際、松平氏これに居りしが、明治に及びこれを撤し、今は公園と爲せり。月岡神社はその公園内にありて、舊藩祖の靈を祀るもの、祭典は舊式今猶存して、頗る嚴正なりといふ。また、十日町の一丘陵に湯上觀音あり。札所觀音にして、境内櫻樹多し。上の山新道の碑を見、猶行くこと少許、細徑を田圃の中にとゞめ、酢川の流に添うて、右に入ること三里、藏王火山の爆裂火口壁たる龍山の南麓、南

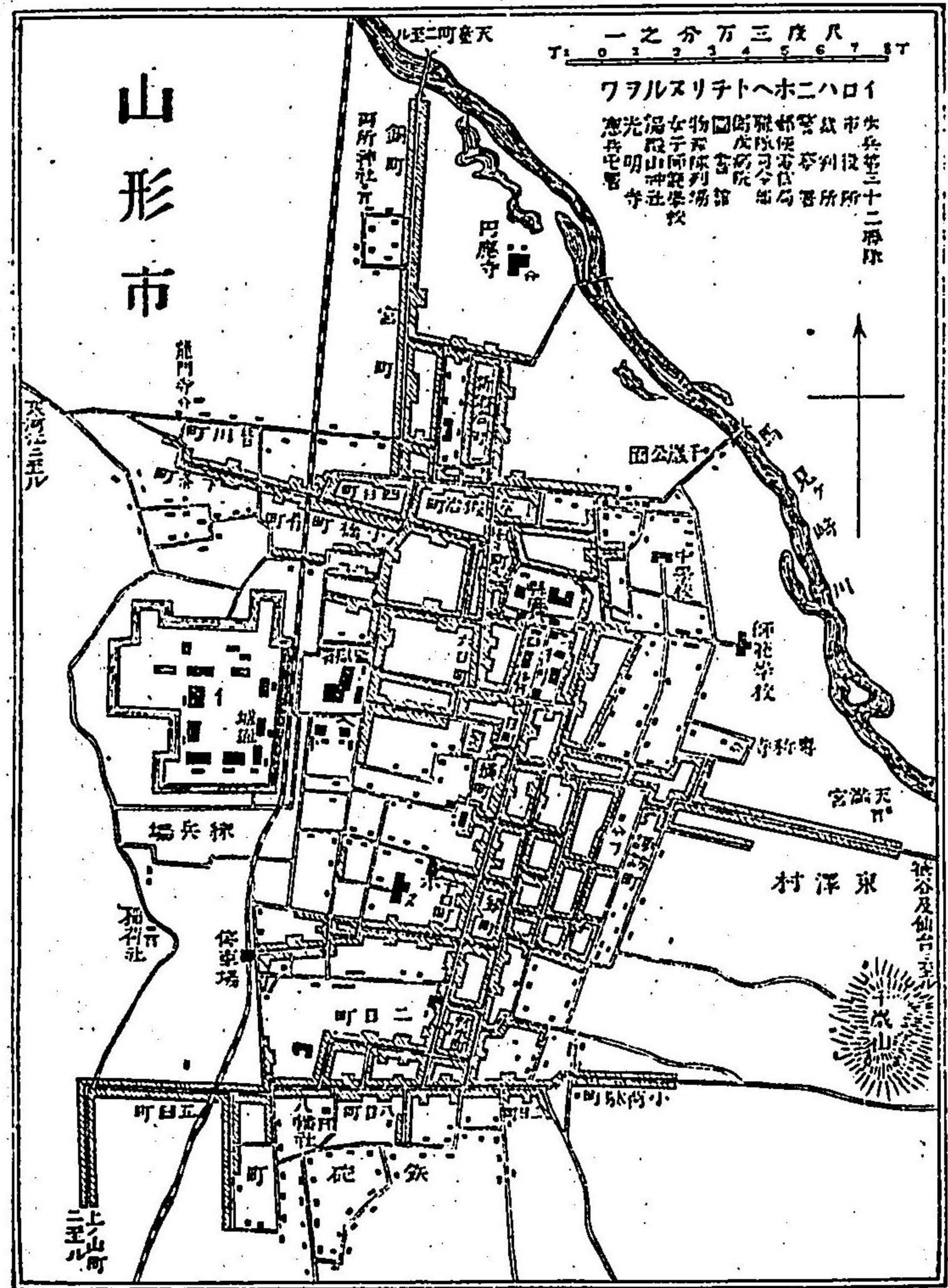
高湯温泉

村山郡堀田村に高湯温泉あり。(第七十七圖の乙)其の地は東に三寶荒神熊野岳刈田山の諸嶺をめぐらし、北に烏甲地藏の連山を帯ひ、南に高デア山を控へて、唯、西の一方に遠く山形平野の開けたるを見る。泉質は酸性泉にして、無色透明、反應は強酸性を呈し、硫氣の盛なる、東北の草津温泉を以て目せらるるに至る。癩病梅毒腺病等に特效を有し、ことに小兒の諸病を醫すを以て甚た著名なり。また、多少の湯の花を産せり。鑛泉の發見は詳かならざれども、三代實錄に貞觀十五年六月二十五日正六位上酢川温泉神社に従五位下を授くとあるを見れば、其の以前既に發見せられたるものなるを知るに足らん。村の後方高所に藥師堂あり、甚た眺曠に富めり。一小湖あり、杯湖といふ、浴客の遊ぶ者多し。また、此の地より登ること廿七町、龍山の頂に酢川神社あり。藏王山は活火山にして、宮城縣に跨り、直立凡そ二千米、高湯より登路三里、山頂に池あり、御釜或は藏王沼といふ。所謂火口湖なり。上の山町より國道を一直線に進めば、二里半にして山形市に達す。

山形市

山形市は南村山郡の北隅に位し、縣内第一の都會なり。東西廿一町、南北

一里六町、戸數五千五百餘、人口三万五千餘を有し、山形縣廳の所在地なり。四望廣潤、所謂山形平野の中央に位し、兩傍の山脈は蜿蜒として其翠微を送り、直に人をして形勝の地なるを思はしむ。此地は元、最上と稱し、後山方と改め、中古山縣に作り、近頃山形の字を用ゆ。國司葉室光顯を亡して、最上氏の祖斯波兼頼の此の地を領せしは實に建武年中のことに屬す。徳川氏に及びて鳥居保科の兩氏これを領し、爾來封を受くるもの、松平・奥平・堀田・秋元・水野等の數氏あり。停車場は市の西端にありて、陸羽南線の鐵道は市の西部を掠めて走れり。山形城址は一名霞ヶ城と稱し、市の西部に位し、今は歩兵第三十二聯隊の營所を置けり。山形縣廳は(第七十七圖の丙)市の中央にありて、三層の大厦なれども、其の構造甚た古くして且つ劣れり。その前なる大路の東に山形縣物産陳列所あり。以前は開きて以て奥羽六縣聯合共進場に爲したる所、縣下の物産は皆此の中に陳列せらる。其他、山形師範學校・山形中學校あり。孰れも壯大なる建物なり。市中般盛なる地を六日町・旅籠町・七日町・横町・三日町とし、銀行諸會社、及び商賈旅館等多く此處にありて、百貨の辨する



山形市

處とす。殊に、此の市の特色は商賈皆類を以て集りたる事にして、塗師町に漆器商多く、桶町に桶商多く、旅籠町に旅店多く、其他材木町蠟燭町鍛冶町銅町等皆然らざるなし。而して五日町八日町二日町三日町の稱は、皆な市場の立ちたる日を以て町に名けたるものに似たり。神社は鍛砲町に縣社八幡神社あり。六株の大なる榊樹あるを以て一にこれを六榊八幡と稱し、天平九年鎮守府將軍大野東人蝦夷征討の際、國家防護の爲め石清水八幡を勸請したるものなりといふ。境内老樹鬱蒼として天空を蔽ひ、まことに幽邃を極む。宮町に鳥海月山兩所宮あり。同じく縣社にして一に武門吉事宮と號す。寺には、七日町に光明寺あり。最上氏の始祖斯波兼頼の墳墓あり。三日町に光禪寺あり。最上氏中興の祖義光の墓あり。専稱寺は七日町字寺町にありて、その欄間の猿の彫刻はその形真に迫り、人のこれを射撃したる銃痕あるを以て有名なり。

千歳公園

千歳公園は市の東北築師河原にありて、元柏山寺の境内を以てこれに宛てたるもの、馬見ヶ崎川はその東を流れて、松影の參差たる、轉た翔するに堪

へたり。園内に招魂社あり。柏山寺の薬師堂は園の中央にあり。堂宇壯嚴ならざれども、其の草創は甚だ古く、天平年中聖武天皇僧行基に勅して一國一宇の國分寺を創立したるもの一なり。古來、源頼義藤原秀衡大江原元最上義光等相次て堂宇を修めしも、屢、祝融の災にかゝりて、中古の堂宇悉く烏有に歸せり。今の堂宇は嘉永元年僧宥海の再建したるものにかゝる。毎年四月八日を以て執行せらるゝ大法會には、近隣より來り賽するもの極めて多く、露肆茅店境内に相隣次し、その盛んなること地方稀に見る所にして、頗る雜沓を極むと云ふ。

千歳山
市を東に距ること里許、形、倒扇に似て、全山松樹を以て蔽はれたる小丘あり。千歳山といふ。其麓に千歳山公園なる者あり。園内熊野神社の傍に阿古屋の松の舊址あり。山の西麓の稍、平斜なる處より望めば、山形市街の瓦甍粉壁をはじめとして、渺茫たる最上の平原は悉く一眸の下に集り、その登臨の快、蓋し多く求むへからざるものあり。また、此附近に陶磁器製造所あり。原料を千歳山附近の陶土に仰ぎ、重に實用品を目的として多額の産出あり。

漆山村

山寺

り。其他大字釋迦堂に生釋迦如來あり。東澤村大字妙見寺に、唐松大悲閣あり。最上札所五番の靈場にして、その風致宛然京の清水に類せりといふ。市を北に羽後街道を進めば、一里餘にして漆山驛なり。この停車場を下りて、東に田間の細路を求むると一里半、忽ちにして山寺村に達す。村は宮城縣に通する二口越の麓にありて、著しく浸蝕せる第三紀の凝灰岩は種々の奇形を呈し、山寺の怪岩の名は縣下に著名なり。寺は寶珠山立石寺と號し、(第五十圖の甲)國內屈指の靈刹なり。先、蕭疎たる山寺村の人家を過れば、寺門は屹然として道路の上に聳え、仰げば既に奇岩怪石の陸續として眼中に映し來るを認めん。石階を上り、總門を入りて、その右側に中堂あり、其の背後に巖屹として聳ゆ。聖女堂念佛堂鐘樓堂を経て、多寶塔の傍より磴道に就き、階を上ると數百歩、二王門あり。老杉の鬱蒼たる間に、御手掛岩彌陀洞琵琶石等あり。二王門を入る、二町、左方岩山の上に開山堂あり。これより左折すれば、五大堂極樂院旭觀音窟に至り、右曲すれば性相院澤之池金乘院中性院を経て奥の院に達す。山中奇岩錯落して、其狀の奇なる一々名狀すべから

ず。蓋し、關東に於ける妙義山の小なるものか。就中、岩石の著名なるものは、胎内窟天狗岩、垂水岩、鹽岩等にして、其の他、龜石堂石壽老石立石赤石鸚鵡石硯石等の名あり。天狗岩は直立百餘尺、其の形恰も大柱を立てたるがごとく、傍の松樹に攀縁して以て岩上に登るを得べし。岩の前面に洞あり、十六羅漢の像を置けり。されど、この表山のみを見て、以て山寺の勝を説くは未だし。山寺の勝は寧ろ奥の院にありと云ふべく、千手院の東北三里を窮めて、始めて四十八瀧の奇を觀るべし。而して七瀧地藏瀧天然石橋を併せて山寺の三奇景といふ。

天童町

天童町は山形市の正北三里餘にして東村山郡役所所在地なり。戸數大凡千人口五千八百餘を有し、郡内第一の都邑なり。城址は宮城山にありて、舞鶴城と稱し、建文中斯波兼頼の孫頼直の始めて此處に城きたるもの、子孫世々天童を氏とし、近傍八館の長なり。天正中最上氏の滅す處となり、徳川氏に及びて、織田氏高島より移り住む。戊辰の役、小藩を以てよく勤王の義を唱へ、奥州連衡軍の兵と戦ひ、城市悉く兵燹にかゝれり。大字北目小字愛宕山

寒河江町

に縣社愛宕神社あり。建勳神社は舞鶴山にありて織田信長の靈を祀れり。を距る數十歩、招魂社あり。勤王の士吉田大八の靈また茲にあり。天童町の東北一里、津山村大字山元に若松觀世音あり。最上札所第一番の靈場にして、賽者陸續として絶えず。寒河江町は羽後街道より左折し、最上の大河を渡りて、更に一里ほど田疇の間を行きたる處にあり。最上平原中、所謂往昔の西根の地にして、最上川と寒河江川との間に介立し、地に西村山郡彼所を置けり。戸數千餘、人口七千七百餘を有し、寒河江城址は字元楯南にあり。大江廣元の嫡男親廣の居城にして、其七代の孫時茂は南朝の爲めに屢、最上の斯波兼頼と戦へり。後十六世にして最上義光の爲めに亡さる。今、その城址に郡役所あり。長岡山は町の西北に位する小丘にして、戊辰の役、戦争のありたることろなり。又、町の北一里を隔て、慈恩寺村に同じ名の一巨刹あり。天台眞言兩宗兼學にして、神龜年間僧行基の草創する處にかゝり、此附近有名の靈境なり。境内廣潤にして、南に蜿蜒たる葉山の連山を望み、北に寒河江川の碧流を擁し、河

左澤町

岸には奇岩磊々として起伏し、風景また甚た凡ならず。猶南すること二里、左澤町は最上川の万山相重れる間を出て、是より東に大屈曲を爲さんとする一角にありて、人烟碧流と相臨み風光甚た佳なり。戸數大凡五百、人口四千六百餘を有し、驛路逶迤として三たび屈曲し、商賈旅館多く稍一邑の趣を爲せり。城址あり。大江氏が最上氏に對して構へたる屬城の一なり。今は唯斷礎空際を存せるのみ。町を距る十町、最上川の東岸に柏瀨と稱する地あり。岩石壁立し、形柏葉に似たり。それと相對して一酒樓あり、百目杭の茶店と稱し、築ありて鮮魚を絶たず。山形市より特に行きて遊ぶもの多し。

谷地町

寒河江町より寒河江川を渡り、北に進むこと二里、谷地町は最上川の沿岸にありて、前の二町と共に西根三市街の一なり。人口七千を有し、繁華寒河江町と相伯仲す。ことに、最上川運運の便あるを以て、百貨の集散頗る頻繁に、商業又自から活氣に富めり。

町の西、二里を距る白岩村あり。庄内地方に通する六十里越の要路に衝り

幸生銅山

葉山參詣の行者は皆此地より登山す。幸生銅山はこれより二里の山中にありて、多少の銅を産せり。

東根町

谷地町より二里にして、羽後街道の神町に戻れば、坦途髪のごとく遙かに楯岡町に通せり。東根町は最上川地方古來有名の地にして、今は街路の南に外れたれど、昔は最上唯一の名城として其名高く、流石の最上義光もこの一城のみは容易に動すこと能はざりしといへり。町の東北隅八幡山に若宮八幡神社あり。康平年中三浦下野守が鎌倉御岡八幡宮より神璽を奉じたるものにして、爾來近隣の總鎮守たり。境内幽邃にして、老杉古松の間に櫻楓を交へ春秋の色彩自から新たなり。社殿も總て檜を用ゐ、郡中第一の社殿と稱せらる。

楯岡町

神町より以北、國道は坦として一直線を劃したるがごとく、直ちに楯岡町に達す。楯岡町は山形を距ること七里、北村上郡役所のあるところ、戸數大凡千二百、人口七千五百を有し、市街の繁盛にして家屋の整頓せるは、蓋し山形以北是に比すべき者あるを見ず。往昔は所謂最上八館の一にして、斯波

尾花澤町

兼頼の曾孫滿國初めて茲に築き、後、楯岡上總介の居城と爲る。小松澤觀音愛宕山湯澤沼等の名勝あり。町を西に距る二十町、最上川に碁點橋と稱する大橋を架す。河中岩石點々、恰も碁石を列するがごとくなるを以て其の名を得たり。

汽車は此の間絶えず國道の西に添うて走り、本飯田より少しく北に迂回して、最上川に近づき、その川の要港とも稱すべき大石田町に停車場を置けり。此地は最上川を舟にて下らんとする人の集る所にして、百貨の集散自づから頻繁なり。されど最上川の舟は風向によりて遅速の差甚しく、機會宜しからざれば三日にして猶酒田に達する能はざる事あり。是を以て、庄内地方に赴く人は好事の士にあらざれば、この便に依るもの少く、大抵は舟形及び新庄より磐根新道を越えて田川郡の清川村に出づるを常とす。尾花澤町は大石田町より南に一里、國道の中にある一名邑にして、人口四千を有せり。此地は縣下第一積雪の地にして、嚴寒の節に至れば、殆ど一丈餘の深さに達し、家屋多くは其中に没却せらるゝを以て有名なり。藤原實方が陸奥の地に歌枕見

舟形町

新庄町

にまかりて、人麿が咏せし陸奥の尾花澤の人なれば澤瀉澤の衣きなましの咏を石に刻みし古碑は町の西北隅にありて、同地柴崎氏の園中に存し、探古の士來り訪ふもの少なからずと云ふ。

猿羽根新道を越へて、舟形町に至れば、山影の迫るもの次第に深く、最上川はその北數町の所に於て、源を陸前の國境中山峠附近に發し、西流し來れる小國川を合せ、更に北に折れて、合海町の山中に入れり。瀬見温泉はこれより三里餘、中山越、宮城街道に當り、無色透明にして、中性の反應を呈せり。文治三年源義經が奥州に下らんとせし時、其の夫人この地にて男兒を産み、辨慶この湯を以てその産湯と爲したりとの俗説あり。

新庄町は山形市を距る十有六里、羽後街道の要路に衝り、戸數千七百、人口一万二千を有し、管に郡中第一なるのみならず、縣下米澤市鶴岡町に次げる繁盛なる都會なり。新庄城趾は初め最上氏の族日野將監の居城にして、徳川氏に及びて、元和八年戸澤政盛常陸松岡より來り封ぜられ、以て維新の亂に及び。此藩は天童藩と共に早く歸順の意を表したれば、従つて奥羽連衡

軍の攻撃を受け、城廓これが爲めに全く焼失せり。町には、郡役所區裁判所等あり。町内、見るべきもの、戸澤神社瑞雲院の二三に過ぎず。奥羽西線は、今この地を以て一時の終端驛と爲し、着々院内峠に向つて工事を進む。これより更に北に向ひ國道を行くこと二三里、烏海山の翠微を仰ぎつゝ、猶進めば、金山村は山中にありて、山影水聲、次第に人寰に遠きを覺ゆ。猶二三の小嶺を上下して、及位村に至れば、杉峠は蜿蜒以て秋田縣に入り、院内に達す。

更らに米澤市に戻れば、市より西北小松町小國町を経て、越後國村上地方に出づる一路あり。其の路、險にして、處々車を通せざる處あれど、越後に赴くの捷路なるを以て、旅客の往來また尠なからず。小松町は米澤市を距ること三里、山形市を距る、十二里、戸數八百、人口五千を有し、また小繁華の地なり。縣下、養蠶の卓絶せる地はこの地及び長井町にして、此の地は長井町に及はざれども、猶將來發達の見込多し。町に、皇太神宮諏訪神社大光院等あり。大光院は奥羽の高野山と稱せらるゝ地にして、その創立といひ、

小松町

小國町

寺院といひ、山緒といひ、此の地方に珍しき巨刹なり。小國町はこれより諏訪宇津の二峠を越へ、相距ること七八里、西置賜郡北部の山中に位せる一小邑なり。猶進むこと、一里、荒川の流に添うて、新潟縣の國界に入る。

西置賜の一部、南村上の一部、最上川の流に沿うて、蜿蜒帯の如き一谷地あり。この谷地は、東置賜郡の北より始りて、虚空藏山脈と長峰山脈との間に介在し、最上の平野とは實に一小山脈を隔てたり。此の谷地、最上川の便によりて、自然の發達を爲し、道路は川に沿うて透進として東北を指し、左澤町に至りて、所謂西根三市街の地に接せり。此地方は縣下第一の養蠶地にして、桑樹の相連れる、繰車の相輾れる、自から他と異なる一特色を呈せり。赤湯町より、宮内町を経て、伊佐澤村に至れば、先、有名なる久保の櫻あり。幹の周圍三丈五尺、高さ四丈八尺、枝、八十四間四方に蔓延し、花は桃色にして一莖より七八英を發し、その花時の壯觀なる、狀するに言葉なしといふ。傳へ云ふ、桓武天皇延暦年間坂上田村麿陸奥を征して此地に至り、豪族久保氏の家に宿し、愛娘玉なるものと契る。將軍去りて後、玉これを思ふこと篤

久保櫻

長井町

し、遂に病を得て死す。將軍再び此の地に至るや、これを聞きて悲痛自から禁せず、墓地に植うるに一株の櫻を以てす、これ即ち此の櫻なりと。説、信ずべからずと雖も、亦擲すへきの詩趣なからずや。

長井町は僻陬に位すれども、縣下養蠶の主産地なるを以て、猶多少の繁華を保てり。戸數九百、人口大凡五千餘を有し、西置賜郡役所の所在地なり。總宮神社は宇宮にあり。縣社にして、日本武尊天兒屋根命大貴已命を祀り、延暦廿一年坂上將軍の創建するところ、長井の庄五十餘ヶ村の神社を合祀せしを以て總宮の稱ありといふ。社地は平坦にして、老樹森然盡猶暗く、自から神威の尋常ならざるを覺えしむ。其の他、遍照寺あり。新義真言宗の巨刹なり。

荒砥町

猶川に添ひて下ること、二里、鮎見村の對岸に荒砥町あり。蠶業最も盛にして、近年は多額の地織をさへ産するに至れり。城趾あり、八乙女又は石那田城と稱し、伊達氏の時、桑島和泉守之に居れり。八乙女八幡神社は郷社にして、荒砥郷十二ヶ村の總鎮守を司り、古來神事に八乙女の樂を奏するを例

虚空藏山

とするを以て其の名を得たり。

虚空藏山は東西南村上の三郡と東西置賜の二郡とに跨る山脈にして、山形市より見れば、西北連山の間に聳えて屹然群山の宰たるもの即ち是なり。絶巔に靈顯赫著なる虚空藏尊を安置せるを以て、四方より登山參詣するもの常に絶えず。その本路は荒砥町よりこれに通し、登路三里、頗る險峻なりと稱す。

最上川の上流

最上川は上流を松川と稱し、大瀬今平の山中を過ぎて、西村山郡に入り、始めて其の名を得。此の間、山深く、溪急に、また尋常山水にあらざるもの多し。上郷大瀧を経て、稍平地を得、宮宿村の一集落はその東岸にあり。楠南谿の東遊記の中に記されたる大沼は、川の西岸一里を隔てたる處にありて、山形市を距ること、(左澤町を迂回す)九里、大谷村大字大沼にある一小湖にして東西二百間、南北三百五十間、湖中大小數十の浮島あり。皆萱根芦根の相集りて島狀を爲せる者、風に從ひて集散離合するさま、また一奇觀たるを失はず。その南に浮島神社あり。

明神禿

明神禿と稱するは、大谷村にありて、最上川の東岸崩削るかごとく、その絶壁赤く禿げて、遠くこれを望むを得るのみならず、其の上に明神の古祠を祭りたるを以て其の名を待たり。此の附近、水石の相戦へる、雲烟の相集れる、實にこの山中に埋没せるは惜むべしと思はるゝばかり奇景に富めり。これより一里にして、左澤町に達す。

庄内地方

縣下より宮城縣に通ずる街道は、山形市より笹谷村に達するものを笹谷街道とし、山寺より野尻村に達するものを二口越とし、神町より關山を経て作並温泉に達するものを關山新道と爲す。而して關山新道最も平夷に、笹谷街道これに次く。二口越の如きに至つては、旅客のこれを越ゆるもの甚少し。庄内地方は、月山葉山の嚙响と最上川の大河とを以て、全く最上置賜地方と區別を異にし、其の風俗人情の異なる、恰も他縣の觀を呈せり。これに赴くには、羽後街道の舟形町又は新庄町より、本合海町に出て、最上川の沿岸、所謂磐根新道を過ぎて、以て東田川郡清川村に出てさるべからず。舟形町より西に入れば、葉山月山の連山を左に、鳥海山の支脈を右に、そ

本合海町

肱折温泉

今神温泉

最上川の溪流

の風景の瀾大なる、思はず人をして襟を披いてこれに向はしむ。一小嶺を越えて、猶行くこと一里、本合海町は最上川の東岸にありて、新庄町より起れる路も亦此の町に來り會せり。道路の要地に位せると、最上川舟楫の便に當れるとを以て、入車總立所貨物荷揚所等あれど、畢竟山間の一小邑なるに過ぎず。肱折温泉はこれより三里、大藏村字南山の山中にありて、炭酸泉及び鹽類泉に屬し、儂麻質斯に効ありと云ふ。地に、地藏倉の奇巖、小松淵の蛇窟等あり。これより西北、一山を隔て、角川村大字長倉に今神温泉あり。共に縣下北部の名泉なり。

一箇の春水、本合海の渡津を渡れば、灰色なせる八向山の絶壁は面白き形したる松と一字の小祠とを以て最上川の清流(第十七圖の甲乙)に對せり。畑蔭岡の諸村を過ぎ、古口村に至れば、最上川は東山の山脈を横断して峽流をなし、漣帆擧げたる蓬舟の急流に乗して陸續西下するさま、まことに南宗の墨畫を見るが如き心地す。大瀧東瀧の奇を賞し、外川村に至れば、對岸に仙人掌あり。郡内の古祠なり。川は幾たびか曲折して、兩岸の翠微の層々相重せる間

に、濛々として流れ去れり。白糸瀧は草薙村の人家と相對し、高さ七十丈、幅四間、ことにその中段の少しく塊みたる、その嬌態掬するに堪へたり。かくて最上川はこの山中を横流すること五里、清川驛を過ぎて濛々東田川郡の平地に入る。

清川村

清川驛は最上川の流に近く、翠微の影甚た濃かに、狩川町に至りて、漸く山を離れ、交通線路は之より放射して平原の中を走り、其主なるものは酒田地方に達し、一は西の方庄内の地を指せり。

羽前の三山

世俗の羽前の三山と稱する羽黒山・月山・湯殿山は最上川上流の平原と庄内平原との間に横れる山脈中にあるなり。月山最も高く且大に、羽黒湯殿のことは實に其驪尾に附するに過ぎず。唯、其月山に比して甚た名高きは蓋し宗教的迷信によりてなり。最上平原よりも登路甚た多けれど、普通は東田川郡手向村の羽黒神社より始むるを本道とすれば、今は此處に記すことと爲せり。手向村より半里、羽黒山神社は(第五十圖のこ)羽黒山の山腹に鎮座し、國幣小社にして、社殿亦甚た壯麗を極めたり。左傍に攝社蜂子神社あり。按ずるに、

本社は推古天皇元年の創建にして羽黒大權現と號し、當時七千の僧徒を以てこれを守らしめたるもの、冷泉天皇の天喜年間には奥羽の總鎮守たるべしとの勅宣さへ賜りたる由緒を有せり。殊に、崇峻天皇御三の皇子蜂子皇子はこの地に來りて修驗道を開き、自から羽黒派なる者を起し給ひしかば、歴代の皇室これを尊崇すること盛に、徳川氏に及びても千五百石の社領を附せられ、明治に至りては國幣小社に列せられたり。これより山を越え、谷を渡り、或は岩石に攀ぢ、或は絶壁に縋り、行くこと六里、漸くにして月山の絶巔に達すれば、その岩石磊々たる間に一社殿あり。石を以て四面を疊み、危磴纒かにこれに通せり。即ち官幣中社月山神社にして、延喜式神名帳に出羽國飽海郡月山神社と書せる、是なり。山は郡中第一の峻嶺にして、山容、渾大にして臥牛の如く、その絶頂に於ける眺望の絶佳なる、西は日本海の濛々として極りなき、北は鳥海山を隔て、羽後連山の波濤のごとく連れる、或は最上平原より陸前の連山、或は會津地方の遠きに至るまで、一つとして眼中に集らざるなし。蓋し天下の大觀なり。山中に、鍛冶屋敷毒水腰掛岩等あり。大祭

なり。地に、郡役所地方裁判所支部中學校高等女學校等ありて、市街整頓し、百貨輻湊し、風俗また甚だ敦厚なり。城趾は赤川の流にのぞみ、庄内藩の名は維新の亂に於て多少の勢力を有したるの地、徳川譜代の臣酒井忠勝以下十一世歴代の居城なり。今は城櫓を撤し、壘壁を毀ちて、庶民偕樂の公園と爲し、中に庄内神社を祭れり。社は酒井氏の祖忠次家次忠勝の靈を祀れる縣社にして、明治十年の創建にかゝり、境内廣濶にして、城濠の水にのぞみ、松杉の影自から一種神さひたる趣を呈せり。境外東北隅に稻荷神社あり。西方、百間隄と稱する城濠には、蓮花亂發して、花時は頗る奇觀なり。其の他、國町に日枝神社、天神町に春日神社、家中新町に大督寺等あり。

金峯山は鶴岡町の南二里に聳ゆる高山にして、上古は七葉山と稱せり。後花園天皇の御宇、楠氏の一族、此の麓に遁れて、高阪赤阪の二村を設け、山號を金峯山と改め、後醍醐天皇の宸筆を神體と爲し、更に吉野神廟を勸請してこれを祀れり。

鶴岡町より北に起れる道路二つ、一は大山町を経て加茂港に達し、一は三

大山町

加茂町

湯ノ瀨温泉

温海温泉

瀨を経て鼠ヶ關に達せり。大山町は元、尾浦と稱し、戸數七百、人口四千を有する一名邑にして、酒造を業とするもの多く、大山酒の稱は縣下に冠たり。町を距る里許、西郷村大字馬町に縣社稻尾神社あり。大字下川の善寶寺は水夫の海上安全を祈る著名の巨刹にして、賽者常に陸綬として踵を絶たず。加茂町は大山町の西、一里、日本海に瀕し、船舶常に輻湊し、頗る繁盛の港灣を有せり。戸數大凡七百五十、人口大凡五千、酒田を距ること五里、鼠ヶ關を距ること八里、左右の岡巒海中に突出し、巒頭春日神社あり、風光の明媚なるを以て聞ゆ。(第三十圖の甲)更に北して湯ノ瀨に至れば、海山の風景一層の趣を加へ、温泉沸々として波打際より湧出す。これを以て温浴水浴共に甚だ著名にして年々の浴客二万を下らずといふ。

海岸、越後街道に従ひて西し、三瀨町の氣比神社に詣て、更に進めば、山良油戸今泉等の村落は海岸に沿ふて相連なり、長汀曲浦斷崖奇礁の一步ことに一景を生し來れるの景は容易に他に求むへからざるものあり。猶ほ行くこと二三里、温海岳アヲイの美しき姿は高くその海邊に峙ちて、その麓に温海温泉あり

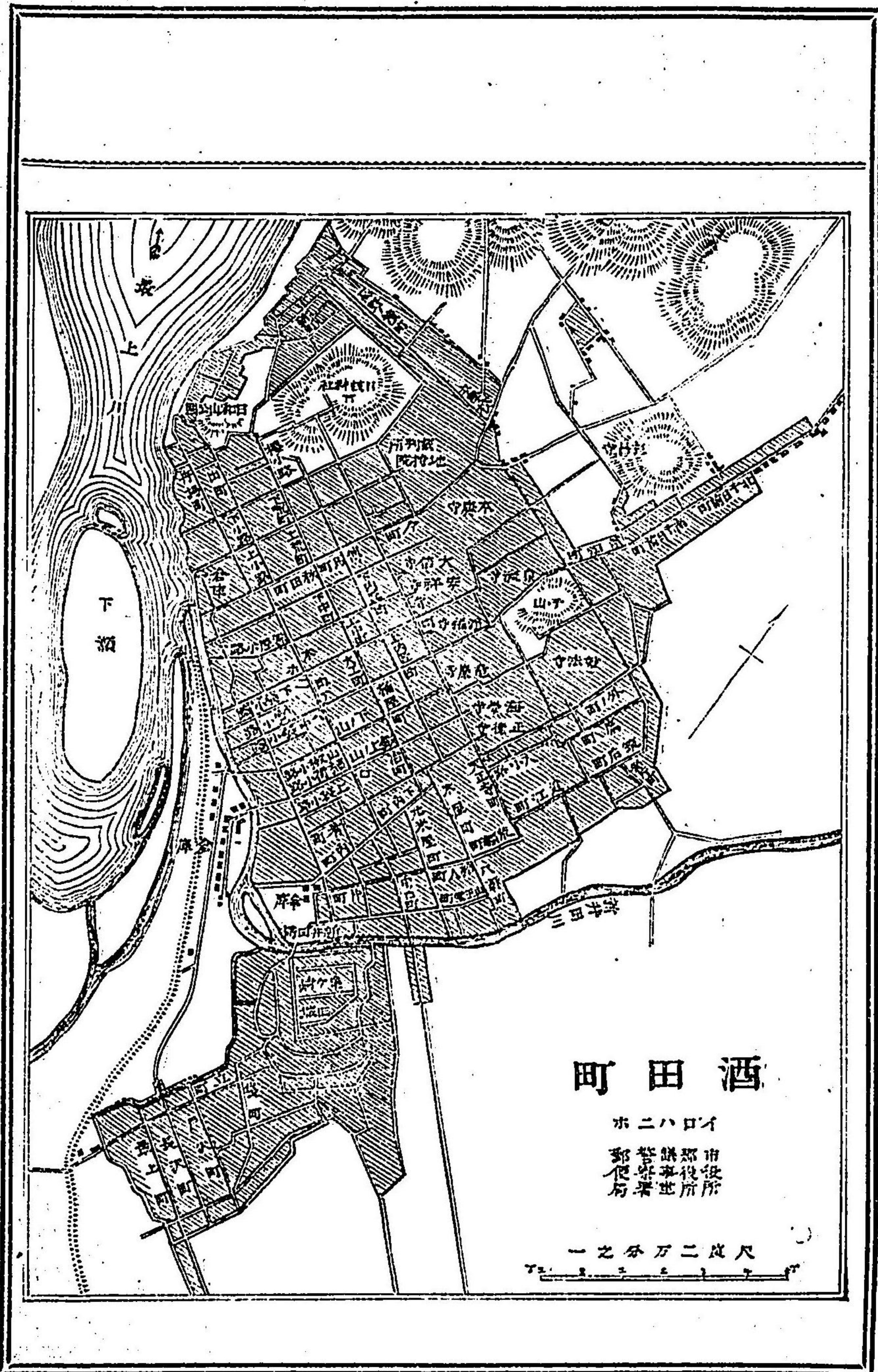
鼠ヶ關

り。硫黄泉にして、後堀川天皇嘉祿二年の發見にかゝる。これより猶南すること數里、鼠ヶ關に至れば、海岸皆怒濤を湧し、狂瀾を倒にし、辨天島の附近、和布島方の島横あち島の諸島を點し、その風光の壯絶、蓋しまた名狀すべからざるなり。(第三十圖の乙丙)

鼠ヶ關を越れば、地は既に新潟縣なり。

狩川より岐れたる一路は廻館余目の諸村を経て新堀村に至り、此處に羽前羽後兩國を界せる最上川の兩羽橋を渡り、一路遙々として、酒田町に入る。

酒田町は山形市を距る二十八里餘、最上川河口に位せる一商港(第二十九圖の乙)にして、維新前は羽前羽後兩國の貨物皆この地に集り、その盛なること近國に冠たりと言へり。此の地は元、砂瀉と稱し、後、坂田と改め、次いで今の字を用ゆ。市坊の數七十六、東西二十一町、南北二十六町、戸數凡そ四千、人口大凡二万餘を有し、郡役所を始めとして、議事堂裁判所病院高等女學校等皆此の地にあり。町は日和山公園及び日枝神社を有する一丘陵を以て海と劃り、市街は廣く最上川北方の平地に連り渡れり。明治廿七年の震災以來、



日和山公園

大に舊觀を損したれど、猶、縣下有數の都會たるは争ふべからず。城址は一名龜ヶ崎城と稱し、武藤氏の雄を唱へしところなり。町の西南の一路を進めは、その盡る所に日和山公園(第七十八圖の丙)あり。一帯の小丘直ちに海に面し、最上川の溶々として海に入れる、數十の日本船の舳を連ねて其間に碇泊せる、風光頗る凡ならず。一丘を隔て、日枝神社の古祠あり。松樹鬱蒼たる間、一碑を立て、土蒙本間某が天明年間風砂の患を除かんが爲め丘陵を築き松樹を栽えたるの事を記す。其の他、泉流寺林昌寺等の古刹あり。概して、此の地、明治以後甚た振はず、船舶又來り泊するもの少きは、最上川年々泥沙を流すこと多く、到底大船を泊せしむるに足らざればなるべし。されど、日本海に於ける郵船會社の航路寄港地にして、定期汽船は港外一里の處に碇泊し、端舟によりて以て旅客と貨物を上下せしむ。(第七十八圖の甲乙)

鳥海山

鳥海山(地形の部参照)は奥羽の名山にして、山容の雄偉なるは、一たび此地方を過ぎしもの、齊しく唱ふる所なり。飽海郡の北境に位し、其裾は遠く羽後の由利雄勝平鹿の諸郡に及び、高く日本海頭より起り、峭崿天を摩し、山頂四時白雪を絶たず。此處に大物忌神社あり。縣下屈指の舊社にして、現に國幣中社に列せらる。登路三、一は吹浦よりし、一は巖岡よりし、一は由利郡矢島よりす。而して吹浦巖岡に遙拜所を設く。本社は四方石を以て是を圍み、四方の眺望甚だ大なり。絶頂には噴火口の址を存し、又山頂を下る半里にして鳥ノ海なる小湖あり。史上最初の噴火は貞觀三年にして、爾後屢、汽烟を噴出せしが、今は全く休火山に屬せり。形、富士に似たるを以て一名出羽富士の稱あり。

吹浦村

秋田街道は酒田より一路髪のごとく北を指し、直ちに鳥海山の山麓吹浦村に至る。此間は、往昔海砂の甚しく飛揚せし地にして、橋南齋が東遊記に亦之を悉くせり。現今は松樹鬱鬱として林を爲し、また當時の髣髴をも留めずなりぬ。(挿畫参照)村に、大物忌神社の華表あり。村を去りて、一丘陵を越れば、日本海の烟波は俄かに眼前に開けて、一望開豁思はず人をして快哉を叫ばしむ。丘上、一茶亭あり、その背後の松林を穿ちて海濱に下れば、巨岩刻するに十六羅漢の像を以てし、其の奇まさに一訪の價值あり。里人は是を吹浦の羅

羅漢岩

淡石といふ。(第二十九圖の甲) 猶進むこと二十町、湯ノ田温泉あり。酒樓浴舎海に

面して、また悠遊一日の閑を銷するに足る。

鳥崎を過ぎ、女崎村の荒涼たる海岸を傳へば、鳥海山の支脈なる觀音森三ツ森の諸峯は海中に突出して、その中央に、山形縣秋田縣境界の標柱を建つ。

飛島はこの海上八里餘のところにある一孤島にして、其形狀は北に廣く、南に狭く、恰も撞木鯨がその頭部のみを水上に顯はしつゝ、南秋田縣男鹿島



(樹南溪東遊龍吹浦砂蹟挿畫)

飛島

に向ひて游泳するがとき狀を爲す。周圍大約二里、最長の部に於て東西十一町、南北二十五町あり。島を法木浦及び勝浦の三大字に分ち、戸數一百七十、人口千五十あり。皆漁業を以て職とせり。此の島は東岸灣入して西風を防ぎ得べく、且つ自然碇泊に便利なるを以て、冬季風荒く沿岸の諸港皆碇泊の便を失へるときには、汽船はこの島に寄港して、風濤の靜まるを待つといふ。

秋田縣

秋田縣は奥羽の西半北部に位し、東は嶮峻なる脊梁山脈を以て岩手縣宮城縣と接し、北は青森縣に境し、南は山形縣に隣り、西は全く日本海に面す。縣廳を秋田市に置き、羽後國の一市八郡と陸中國の一郡とを管す。一市とは秋田市にして、八郡とは雄勝平鹿仙北山利河邊山本北秋田南秋田、陸中國の一郡とは即ち鹿角郡是なり。東西二十八里餘、南北六十五里餘、面積七三四方里餘(一三〇九方軒)、戸數十二万八千餘、人口七十八万一千餘。(一方里千

秋田縣

人口面積

七十四人、一方軒六十九人各郡中面積の最も大なるものは北秋田郡にして實に二百九十八方に達し、これに次くを仙北郡鹿角郡と爲す。而して其の最もなるものは、平鹿郡にして、僅かに二十二方を有するに過ぎず。されど人口の密度は平鹿郡を以て最とし、一方里四千人餘を有する割合なり。而して面積の最大なる北秋田郡は人口の密度最も小にして、一方里僅かに四百餘人にとゞまる。

地形

地形は南北に長く、東西に短かく、稍長方形を爲し、男鹿半島の突出せる外は海岸單調なり。城內山嶽に富み、殊に東部脊梁山脈附近及び北部青森縣界の地方最も峻峻を極む。御物川は脊梁山脈と出羽丘陵との間を北西に流れ、其の沿岸には縣下第一の豊饒地なる御物川平野をつくり、その下流に近く一縣の首腦秋田市のあるを見る。土地頗る農業に適し、稔々たる稻梁の遠く金波を漂はせる所尠なしとせず。其の中央横手町大曲町のごときは、實に東北地方に多く見るべからざるの繁華を呈せり。蠶業また漸く盛に、處々に繰車の響を聞く。殊に、奥羽西線の鐵道は南北より來りてこの平野を縦斷せんと

河川平野

しつゝあれば、完成の曉には、交通の便なるに伴ひて、商業更に一層の活氣を呈するに至るべし。

縣の北部、能代川の流域は鹿角大館鷹巣能代の盆地相連りて一聯の平野を作りて、幾個の小市街其の中にあり。此の地方の四方山岳に圍まれたるにも拘らず、縣下屈指の繁華を來せるは、附近に多數の鑛山を集めたるが爲めにして、小阪鑛山を第一とし、尾去澤鑛山阿仁鑛山太良鑛山、其の他多數の小鑛山に至るもの皆その交通をこの平野に求め、之に加ふるに、有名なる本縣の林産は其の根據を南北秋田の兩郡、及び山本郡に置きたるを以て、能代川の水はまたよく其の材木を輸して能代に運搬の便を與へ、而して能代港はこの輸出輸入を吞吐する重要な地點たるのみならず、又平野の農産物をも集散し、最も繁華の光景を呈せり。

日本海一帯の地は砂丘丘陵相連り、土地また甚だ肥沃ならず。然れども子吉川の流域、則ち本庄町のある附近は、稍山間海邊の小平野を爲し、其の上流には矢島と稱する縣下屈指の養蠶地あり。本庄より以北、秋田市及び土崎

道路

港に至る間は、海岸皆滑かなる砂汀にして、一道の坦途さながら砥のごとく此の間に通せり。されど日本海沿岸の特色として、縣下又良港に乏しく、土崎能代其名は甚た著はれたれど、海岸水淺く、砂堆くして、近く船舶を碇泊せしむるに堪へず。唯、男鹿半島の南部に船川の一港ありて、地形日本海の風濤を避くるに足れども、地の僻にして且つ設備完からず、爲めに未だ良港の實を擧ぐる能はず。

本縣の街道を擧れば、奥羽中央線の鐵路は、北線の一部青森縣碓ヶ關より大館能代秋田市を経て、和田驛まで十六驛、八十哩餘の長さを完成したるに過ぎず。道路は概して良好にして、國道は山形縣界杉峠より秋田市に至る、三十里二十五町餘、秋田市より青森縣界の矢立峠まで三十五里十六町餘、合計六十六里二町餘を有せり。この幹線より岐る、支道は湯澤町より宮城縣に通ずる手倉越街道、横手町より岩手縣黒澤尻町に出づる平和街道、同町より由利郡本庄町に達する本庄街道、六郷町及大曲町より縣の東部角館町を経て仙岩峠を越え岩手縣盛岡に至る角館街道、鷹ノ巣町より阿仁嶺山に達する阿

上下院内町
横畑町
湯澤町

仁街道、其の他、鹿角郡に至れば、毛馬内より大湯を経て岩手縣三戸に至る來滿街道、毛馬内より花輪を経て岩手縣に通ずる鹿角街道なり。海岸の一路は山形縣界三崎山より來りて、象潟の古趾を過ぎ、本庄町を縦貫して、龜田町の西を掠め、滑らかなる海岸の砂汀を縫ひて一路坦々以て秋田に達す。而して能代町より岐れて青森縣大間越村に出づるものを名づけて大間越街道といふ。

山形縣及位村より杉峠を越ゆれば、秋田市に達する國道は蜿蜒として御物川の上流に沿うて下り、狹長なる谷地の相迫りたる處に上下院内町の一小邑を展く。院内銀山はこれより西に入ること一里八町、日本有名の銀山にして由來その設備の完全せると採掘額の多大なるとは世人の遍ねく知るところなりしが、近年稍衰頽の趣あり。院内町を距る東北十五六町、横畑町なり。大田二千餘を有し、市街稍繁盛の趣を呈す。國道の路傍、小野村に小野小町の古蹟あり、稱して小町の生れたるところと云ふ。

湯澤町はこれより北方三里餘、雄勝郡中第一の都邑にして、市坊の數二十

一、東西三町、南北十七町、戸數一千七百餘、人口八千二百餘を有し、市街般昌、商業活潑、町内に雄勝郡役所區裁判所等あり。此の地は養蠶甚た盛に、繰絲の歌到る處に聞ゆ。町に城址あり、小野寺輝道の臣三春信濃守の住せし所にして、佐竹氏以後は其の支族佐竹氏これに居れり。この附近、床舞村に岩井堂あり、全山堅岩より成りて飛瀑綫のごとく下り、境甚だ幽邃を極む。三輪明神祠は杉宮村にありて、湯澤町を距ること一里、養老二年に建設せられたる古祠として甚た著名なり。湯澤町より岩手縣に達するもの二、一は増田を経て田子内牛倉より同縣に入るもの、舊時はこれを手倉越といひ、一は川連、稻庭小安を経て、酢川嶽を越ゆるもの、これを酢川越といふ。宮城縣に入るものは、横堀町より國道を左折じ、湯の岱を経て、鬼首に達するものと、黒森峠を越ゆるものとの二あり。其の他西馬音内を経て大澤町に至り、横手町より來れる本莊街道に合する一路あり。岩手縣に達する酢川越の道路を東南に進めば、其途中の村落漆器を業とす。行くと三里餘にして稻庭村に達す。人口二千六百餘を有する寒驛に過ぎざれども、文治年中平氏追討の功により

稻庭村

オヤス川の上

て雄勝一郡を領したる小野寺四郎の居住せし古邑にして、城址は今猶ほ存せり。これより山嶺次第に相重り、貝沼皿小屋小安等の諸村を経て湯元村に至れば、オヤス川の溪谷は細くして綫のごとく、其水流の深く峽地を穿ちて、急湍の聲宛も巨人の嘯くかごとく、眞に壯絶を極む。殊に湯元村附近には溪流全く瀑布を爲し、危殆の溪橋之に架し行人をして覺えず寒心せしむ。且つ地には温泉を湧出して、その人家の山に凭り溪に架したる、眞に別天地にあるを覺えずんばあらず。蓋し、郡中山水の最も奇なるものか。湯澤町より本莊街道へと志せば、西馬音内村は人口三千五百を有する小邑にして、これより足田新町を経て大澤村に至りて、横手町より來れる本莊街道に合す。此地は雄勝郡の東北隅に位し、長大なる御物川橋を隔て、平鹿郡の深井村と相臨めり。人口千餘を有する一小邑に過ぎざれども、古の雄勝驛なるものは實に此の地を指せるにて、其の近傍には今猶雄勝柵の遺址を殘せり。金峯山は其の東北に聳え、滿山老樹蒼鬱として晝猶暗く、白兔の跳躑するもの甚た多し。又、山中に相生の松小野寺石等あり。金峰神社は其の絶巔

鷲座山

に祀られたる古祠にして、養老七年齋主阿部山元の創立する處と稱す。
 鷲座山は雄勝由利平鹿三郡に跨れる高山にして、一名を足倉山又は鷲座高倉といふ。續日本紀に、寶龜十一年遣二千兵經略鷲座と記せるは即ちこの山の事にして、往古は白爪の鷲常に栖たりといひ、今も猶その翼の音を絶たず。万葉集にこの山を詠せる歌甚た多し。山上より望めば西南鳥海山の偉大なる山容と相對し、遙に由利郡の海岸に怒濤の掀翻するを望み、風光甚だ佳なり。湯澤町の北方一里餘、人口千餘を有せる岩崎町を経て、岩崎川の長橋を渡れば、地は既に平鹿郡に屬せり。増田町は人口五千餘を有し、國道を東に距ること一里餘、ミナセ川の北方に位し、稻庭街道手倉街道淺舞街道の焦點に當れるを以て、貨物の集散甚だ盛んに、街衢の形状自づから十字形を爲し、商業の活潑なる、郡中稀に見る所なり。

増田町

横手町

横手町は岩崎町より三里、御物川平野の東に位し、岩手縣界の山は近くその翠微を街頭に送れり。市坊三十二、戸數二千餘、人口一万二千餘を有し、實に縣下東部第一の都會なり。ことに此地より岩手縣に通する平和街道は奥

淺舞町

羽の中央を縦貫せる脊梁山脈の最低所を越えて、御物川平野と北上川平野との連絡を保てるを以て、商業交通共に盛んに一種特色なる繁華を呈せり。町内に平鹿郡役所區裁判所あり。その北部に横手中學校等あり。古城址は一に朝倉城と稱し、小野寺遠江守景道の築く所、佐竹氏の領となるに及んで、世々戸村氏の居城たり。戊辰の亂、城主戸村義得勤王を此の城に唱へ、孤軍以て奥羽聯合の兵に當れり。その城址の臺地に八幡宮あり。横手の市街より延いて平鹿一郡の平野を俯瞰し、その風景の美實にこの附近に冠たり。正平寺は長祿年間の創立にして、小野寺泰道の持佛たる黄金の十一面觀世音を安置す。横手川の水、町の中央を貫流し、其處に蛇の崎橋と稱する長橋を架せり。石瀬月を碎きて、夏の夕は甚はた納涼に適せるを以つて、住民の來り遊ぶもの陸續として絶えず。町より本莊街道を西北に距ること二里餘、淺舞町は平鹿平野の中央に位し、大小の道路四方より來りてこれに集まり、また繁華なる一集落を爲せり。人口五千八百餘、町に縣社八幡神社あり。天平十二年の草創に屬し、境内には松杉柳櫻と相交はり、清楚にして頗ぶる雅致あり。沼

波宇斯別神社

館村に一古城あり、治暦延久の頃、清原家衡の據りて以つて官軍に抗せしところといふ。

波宇斯別神社はそれより御物川を渡りて、八木澤村大字八木澤の保呂羽山中にあり。祭神は或は安閑天皇と稱し、或は大國主神なりといひ、一定せず。孝謙天皇の天平寶字元年の勸請にかゝり、縣内に於ける式内古社の一なり。毎年一月の祭典には押合ひと稱し、數百名の壯夫境内に集り、互に押合を爲すの例あり。

鹽湯彦神社

横手町を東に入り、平和街道に沿ふこと三里、山内村字大松川の山中、御嶽山に鹽湯彦神社あり。延喜式内の郷社にして紀州熊野の早玉神社を勸請すといふ。境内廣潤にして幾百年の星霜を閱したる老樹森々として天に參し、自から太古の趣を備へたり。而して此の山の白瀧觀音は、後朱雀天皇の御宇、神主ト部某が紀州那智山に擬して西國三十三所觀世音を供養せし所なりといふ。

金澤町

金澤町は國道の一驛次にして、横手町を距ること三里、人家長く街道に添

金澤柵趾

うて連り、金澤金澤本町金澤中野の三つの大字を合すれば其長さ殆ど一里に達せり。人口五千四百、後三年役に清原武衛家衡の籠れる金澤柵は實にこの地に遺址を存し、其の地勢の要害を占めたる、奥羽の分水山脈を尾にし、南北の丘陵を左右の兩翼と爲し、本丸二の丸を頭とし嘴と爲し、恰も孔雀の双翼を張りたるか如き觀あるを以て、一にこれを孔雀柵と呼へり。今日猶多少の舊形を存し、憑弔の客をして、宛然當年の狀を睹るの思ひあらしむ。城址に祭れる八幡祠は源義家の勸請せしものにして、甚だ當時の遺什に富めり。

六郷町

これより國道を進む二里十九町にして六郷町あり。往昔は六郷兵庫頭の城地にして、慶長七年以來佐竹義重及び其の後裔の居城なり。明治二十九年の震災に此の町殊に害を受くること夥しく、殆ど全市街を顛覆破壊せしめられたる。今は稍その舊觀を復せり。人口六千九百餘にして、見るべきもの、諏訪明神大桂寺永泉寺飯沼古城趾等あり。此地より角館町に達する路あり。國道はこれより西折し、御物川の流再び路傍に近く、四倉小巻の諸山の翠微の稍眼頭に迫らんとする頃、粉壁瓦甍の俄然として其の前に展けられたる。

大曲町

を認む。これ即ち秋田市以東頗る繁盛の趣を呈しつゝある大曲町の市街なり。此の町、西に御物川を控えて甚た運漕の便に富み、丸子川の流この中央を貫流して、その商業の活潑なる、市街の整頓せる、まことに上三郡の好市場たるに耻ぢず。ことに、御物川の重要な河港にして船舶常にその岸に群集せり。官衙には仙北郡役所地方裁判所支部監獄支署等あり。町に近く農學校農事試験場等あり。戸數一千三百、人口七千二百餘を有し、縣下屈指の地なり。大川寺はもと大溪寺と稱し、眞言宗なりしを、後、曹洞宗に屬し、今は總持寺末輪番寺なり。

角間川町

角間川町はこれより御物川に沿ひて南すること二里、横手川の將さに御物川に注かんとする一角にありて、人口三千八百を有し、大曲町と共に重要な河港の一なり。この地は國道を迂回せずして、十文字より淺舞町を經、平鹿平野を横斷して、直ちに大曲町に至るの路に衝り、其の里程また國道よりは甚た近きを以て、旅客この道路を選ぶもの少しとせず。従つて市街甚た繁盛の趣を呈せり。また、上三郡より秋田市地方に運輸せる貨物の此町より御

角館町

物川の舟路を利用するもの甚だ多し。

角館街道は大曲町より北東に岐れ、四ツ屋長野を經て、角館町に達す。町は人口を有すること五千、其の繁華に於て横手大曲に及はざること遠しと雖も、秋田侯支藩の居城地にして、其の威逼なく四隣に震ひ、縣下に於ける最も著名なる市街の一なり。且、人民質素にして専ら職業を營むを以て、家々皆富めり。天寧寺源太寺は町内にありて、光明寺は西明寺村にあり。共にこの附近に於ける著名なる巨刹なり。これより岩手縣に通ずる生保内村に至れば、田澤湖は其の西一里にありて、一に槎湖と稱し、その風光の明媚なる實に縣下に冠たりと稱せらる。東西廿六町、南北卅三町、周圍三里餘にして、正しき圓形を爲せり。而してこれに赴くには卒田より瀧村に達するものと、生保内より田澤を經て湖水に達するものとの二路あり。四面皆山を以てこれを繞らし、其の湖水の深碧にして靜かに樹影山影を涵したる、春晩夏初山櫻藤花の美しくその山隈水涯に點綴せられたる、實に別天地の思ひあり。殊に雪の白濱と稱する所は、石英粒の白砂人目を眩し、その玲瓏美麗なる既に尋

田澤湖

生保内村

常の風光にあらざるに、加ふるに雲烟の集散、翠嵐の搖曳、宛然一幅の畫圖の如く、眞に仙境に似たるを覺ゆ。湖頭、浮木明神祠あり。養客常に遠きより至り、賽日には山中俄かに一市街を幻出すとぞ。

生保内村より玉川の沿流を溯れば、大先達川の上流に黒湯蟹ノ湯鶴ノ湯等の温泉あり。田澤玉川の諸村を過ぎて溪山愈々深く、女神嶽の東麓を遶りて、川の東岸に鳩ノ湯あり。これより猶ほ三里、鹿角郡の國境に至れば、焼山の山容高く其の前に聳え、鹿ノ湯温泉は其の半腹に湧出せり。

生保内村より更に東に進めば、二里にして岩手縣の境なる仙岩峠の絶頂に達す。

大曲町より國道を進めば、花館村は人口二千を有する一邑なり。これより長さ四百八十間を有する玉川橋を渡り、神宮寺村(人口三千)に入れば、八幡神社は村の中央にある著名なる古祠にして、其の寶什、八幡大菩薩の旗は源義家の眞蹟なりと傳ふ。

これより路は御物川に沿うて、栢岡村を過ぎ、刈和野村に至れば、今まで

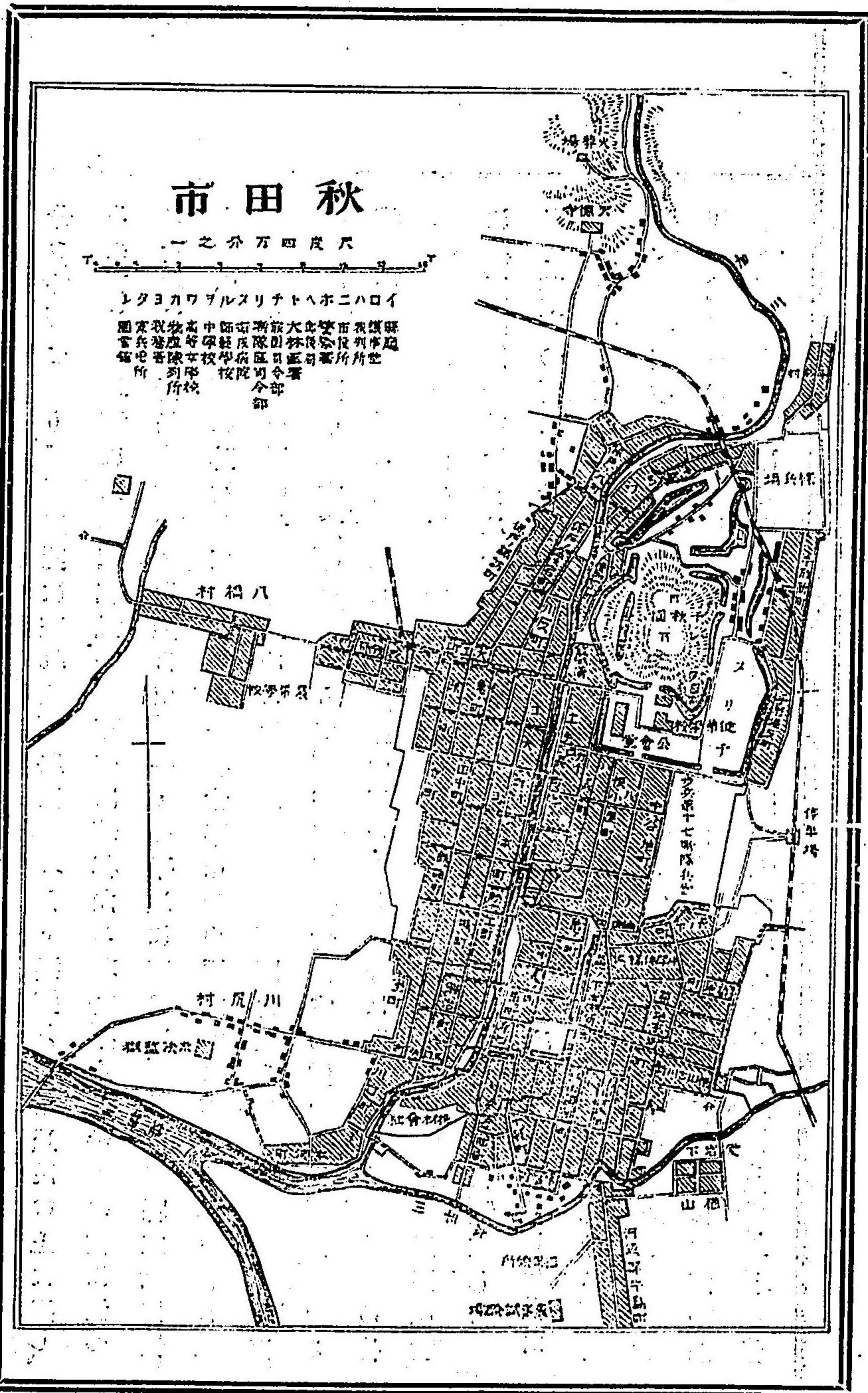
秋田市

過ぎ來りし御物川の平原は漸く盡きて、次第に小丘陵の路傍に起れるを見る。これより和田村に至る間見るべきの名勝古蹟は峯吉川に田村歴の開基に於ける高寺山觀音、其の奥の山中に白糸の瀑布、境村の西方に鎮座せる唐松神社等の二三に過ぎず。荒川鑛山は境村より三里、平坦なる臺地をなし秋田平野に望み、銅山として本邦有数のものなり。

和田村は人口二千七百を有せる驛次にして、これより丘陵次第に開け、豊成に至れば鹿島臺の高地あり。此地は嘗て東北御巡幸の時、蹕を駐められたる地、眼下に近く展開せる平野を瞰み、一道の坦途砥の如く延ひて秋田市の粉壁に到り、更に遠く日本海の蒼波天際に連れるを望み、自然の活畫は悉く一眸の中に集り、其快言ふへからず。此附近石器時代の遺物の發掘また尠からず。仁井田牛島を過れば、秋田市に達す。市は兩羽國中第一の都會にして、往昔は佐竹氏の城市に屬し、今は秋田縣廳の所在地なり。御物川の巨浸は溶々として其の西南を流れ、東南より來れる太平旭の二川は秋田城墟の丘陵を夾みて、蜿蜒として御物川に會す。而して市街は旭川の東西によりて内町外

千歳公園

町の目を分ち、内町には官衙兵營學校士族町等相連り、外町には百貨を鬻げ
 る肆廛陸續として相隣次す。東西二十町、南北廿八町、市坊の數百六十三、
 戸數七千、人口二万九千餘を有し、市役所を土手長町中町に置けり。官衙に
 は縣廳を始めとして、歩兵第十六旅團本部歩兵第十七聯隊地方裁判所區裁判
 所憲兵屯所監獄署稅務署大林區署等あり。學校には中學校師範學校高等女學
 校等あり。また、圖書館物產陳列所等の設あり。工業學校もまた近き將來に
 於いて創設せざるべしと云ふ。市中最も見るべきものは、舊城墟をそのまゝ
 開きたる千歳公園なるべく、その設備の完全せる、東北諸市の中に冠絶せり。
 城墟は丘陵一帶の地にありて、其の丘陵は元神明山と稱せしを、慶長八年五
 月、佐竹侯、家宰澁江政光梶原美濃に命して、新城を築かしめ、これを牛籠
 山矢止城と號せしより、世々佐竹氏の居城となりて、三百年間據りて以てこ
 の地方に雄視せるもの、其の地屹立せる丘陵より成り、本丸二の丸帶廓別廓
 北の丸兵庫曲輪上中城下中城山の手及び外廓に分ちたりしも、今は全く開き
 修めて公園と爲し、(第七十九圖の甲)庭園を開き亭榭を設け、洒掃到らざるなし。



第參編 地方誌 秋田縣

先づ外廓を入りて、正門に至れば、路はこれより逶迤として丘陵の上に通し、その圍める城濠には、蓮花亂發、夏時は馥郁たる花香殆んど遊人の袖に滿つるを覺ゆ。青松修竹の間を過ぎて、一帶の平地に至れば、其處に縣立秋田圖書館あり。更に陣を放ては、東北一帶太平山の山脈遙かに其湧くがごとき翠微の色を送て一層の景致を添ゆるを覺ゆ。猶、石階を登ること數十歩、秋田神社の社殿はその本丸の地にありて、瀨祖、佐竹義宣の靈を祀り、清酒たる構造の中に一種言ふへからざる壯嚴の趣を存し。今は縣社に屬せり。其の傍に招魂社あり。國事に盡瘁せしもの靈を祀る。而してその本丸の周圍は實に公園設備の粹を集めたるものと稱すべく、茶樓旗亭また其間に散在して、以て遊客の便に供せり。其西北に面したる一角より望めば、(第七十九圖の乙)秋田市街の數千家は唯、是れパノラマを睹るが如く、白堊粉壁の夕陽に輝ける、寺院會堂の空中に聳えたる、宛然東京愛宕山の眺望と髣髴たり。ことに、御物川の流は市の外廓を繞りて溶々として遠く、一帶の砂丘を隔て、日本海の怒濤の響の地を撼して來れる、孰れか登臨の客の心を惹くの料たらざるべき。停

車場は城墟の東南、赤湯長沼と稱する新開地にありて、十七聯隊の兵營と相臨めり。市中繁華なる所は、重に外町にありて、市場地なる通町實にこれが魁たり。次に田中町、柳町通は劇場寄席飲食店等軒を連らね、莖を並へて、一種特色の繁華を呈せり。八幡神社は元、舊城内にありしを、今は東根小屋町に移せり。昔は藩主これを尊崇せしか爲め、祠宇祭事共に頗る見るに足るものありたれど、今は全く荒廢して、賽者また少し。誓願寺光明寺は市中有名な巨刹にして、共に字寺町にあり。誓願寺は慶長十年佐竹義宣の創建せるところにして、淨土宗に屬し、春日作彌陀如來をその本尊と爲す。光明寺は弘長二年、北條時頼の創開するところにかゝり、また淨土宗なり。時頼の寄附せしと稱する辨才天像唐織の袈裟等を寶什として藏せり。其の他、有名な國儒平田篤胤の墓は、市を距る東北十町、手形山にあり。(第七十九圖の丙)天徳寺は市の東方旭川村にありて、停車場より五六町を隔てたるに過ぎず。曹洞宗にして、佐竹家累代の菩提寺たり。開山は僧伊達、本尊は聖觀音なり。昔は藩内三百餘所の録所にして、威を全國に揮ひ、本堂書院庫裡山門總門等

頗る壯麗を極めたれども、今は衰頽して、纔かに佛殿庫裡佐竹氏の廟所山門等を存したるのみ。

太平山

物産は畝織八丈金銀細工齋砂糖漬等あり。

太平山は南秋田北秋田河邊の三郡に横れる高山にして、秋田市を東北に距ること三里餘、一名を三本ヶ嶽と稱し、奥嶽に役の行者の草創なりと稱する太平山神社あり。本殿に大名持命少名彥命を合祀し、別殿に三吉權現を祭れり。夏時白衣行者の登山するもの、實に夥しく、其の數實に數万に及ふといふ。而して其の山頂は甚だ眺望に富み、晴天の日は遙かに佐渡の翠螺を指點するを得へし。

土崎港

市を出て、西北に向ひ、(汽車又は馬車鐵道の便により)一里三十町にして、土崎町に達す。町は御物川の河口にありて、東西五町、南北三十町、市坊三十、戸數二千二百、人口一万二千餘を有し、其の繁華殷盛なる、縣下實に秋田市に次けり。町内に郡役所稅務署郵船會社支店秋田汽船會社電燈會社等あり。此の地は南方大部分の地、殊に雄勝平鹿川邊南秋田仙北の五郡より米穀

物産を輸出する所にして、船舶の出入夥しく、商業の盛大昔は兩羽第一の名を博したりしも、近年港の不完全なると、奥羽鐵道線の開通せられたるによりて、多少の影響を蒙りたるが如し。港は日本海沿岸に於ける諸港と同じく、水淺く冬季は風濤烈しく、例年十一月より翌年四月までは全く大船の往來を停止するを以て、良港を以て目すべからすと雖も、猶ほ郵船會社の日本海航路の要港なるを以て、汽船常に港外の沖に碇泊し、端舟を以て旅客貨物の陸揚を爲せり。

之より北方飯島を過ぎて追分に至れば、路は二に岐る。(第五十四圖の甲)本道は大久保驛より八郎瀨の沿岸を縫ひ、別路は八龍橋を渡りて男鹿半島に入る。この分岐點を榎の岐路と稱し、鐵道線の追分驛は實にその蕭條たる白砂青松の中にあり。今、此處に男鹿半島の勝を記さんに、榎の岐路より砂原を過ぐることに三里にして、典農村あり。宇上出戸に祭れる北野天神社と典農村に鎮座せる八阪神社とに詣て、猶進むこと數町、忽ち眼前に一大湖水開けて、其の外海と相通する處に虹霓も霞ならさる一大橋の長く遠く連れるを見る。これ

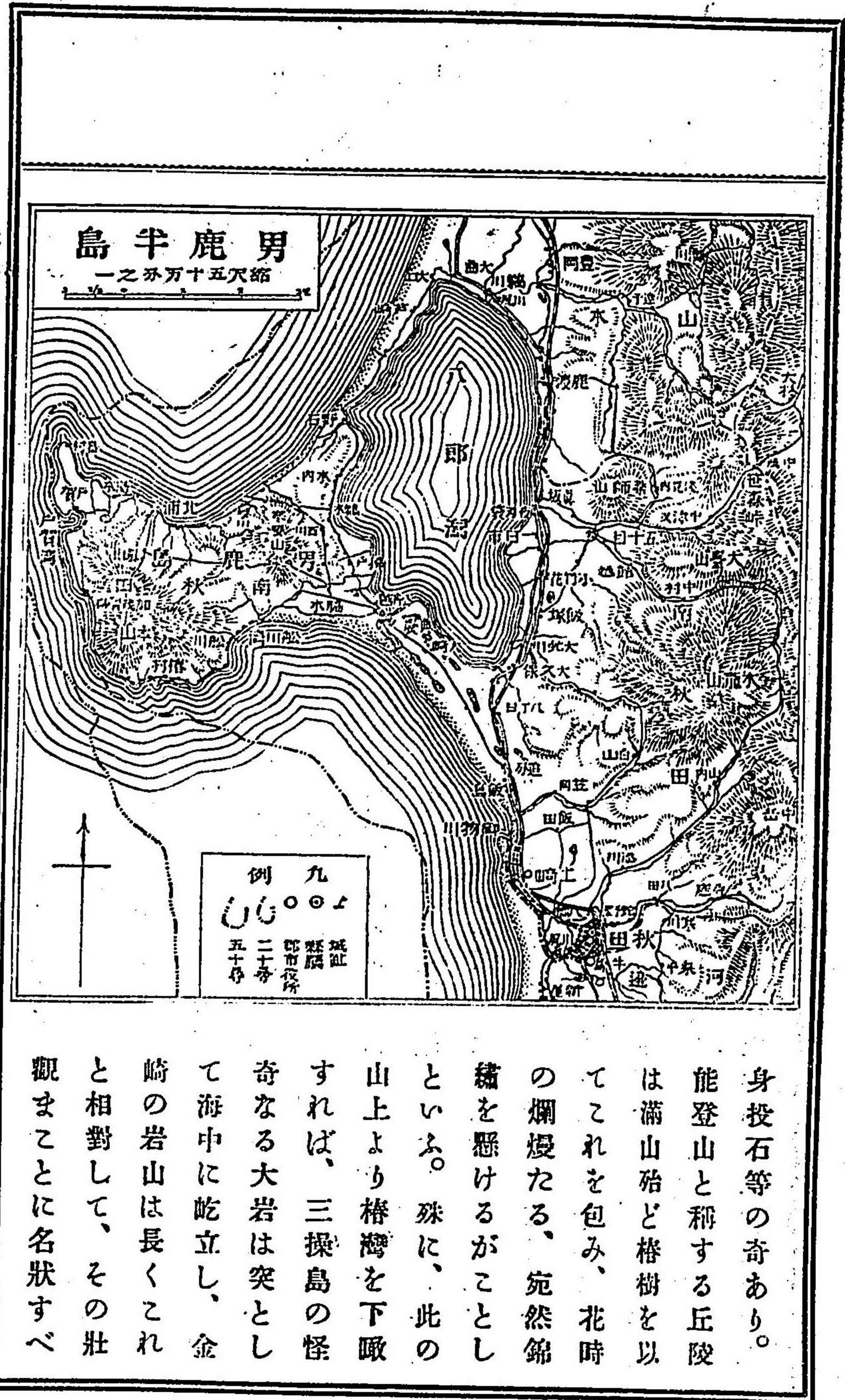
男鹿半島

榎の岐路

八龍橋

船川港

即ち八龍橋(第二十八圖の甲)にして、其の長さ實に二百八十間を有せり。橋を渡れば即ち男鹿半島の地、路は船越村より二つに岐れて、一は八郎潟の西岸に沿ひて能代に達し、一は日本海に沿ひて船川より所謂男鹿半島の四周をめぐる。而して有名なる雄鹿の勝は實にこの日本海の沿岸の怒濤と奇岩とにあり。船越村より脇本村に至る、一里餘。宇雄猪鼻崎に脇本古城址の長く海中に突出したるを望み、寒風山の右方咫尺の間に聳えたるを仰きつゝ、二里餘にして船川港に達す。港は東北屈指の良港にして、根の崎の一角長く日本海の怒濤を拒ぎ、海水また甚だ深くして、よく大船を泊せしむるに足れり。則ち冬季風濤の激甚なる時、よく西北の強風を拒くが爲め、船舶の避難地としては、日本海岸中實に此港に及ぶものなく、土崎港に入る能はさるものは皆な此港にのがれ入るを例とす。これより根の崎に出づれば、燈臺あり、風景また甚だ美なり。女川村に地藏院あり。これをも過ぎて鶴の崎に至れば、奇岩怪石陸續として相起伏し、波濤のこれに當つて掀翻するさま實に人をして快哉を叫はしめずんはあらず。壺島村に至れば奇勝愈出て、雄島雌島蛭子島龍ヶ崎



第參編 地方誌 秋田縣

身投石等の奇あり。能登山と稱する丘陵は満山殆ど椿樹を以てこれを包み、花時の爛熳たる、宛然錦繡を懸けるがごとしといふ。殊に、此の山上より椿灣を下瞰すれば、三操島の怪奇なる大岩は突として海中に屹立し、金崎の岩山は長くこれと相對して、その壯觀まことに名狀すべ

門前村

からず。椿村より半里にして双六村あり。斜に双六灣の風濤を抱き、斷崖絶壁次第に多く、巨鰐の口を開きたる如きものを鰐淵石と稱し、天女の祠を祀れるものを辨天島といひ、道の左右に蟠れるものを潜り岩と名づく。小濱に至れば、琵琶石長塚森、殊に有名なる帆掛島の大岩は屹々然として怒濤の中に聳立し、怒濤の吠吼する音、恰も遠雷の響を聞くが如し。猶行くこと一里にして門前村に抵る。

眞本山

本山眞山は本島の名山にして、共に七百米の高さを保つ。男鹿の勝を説く者は言ふ、本山の絶巔に上りて眺望の快を食り、舟を舩して島めぐりの一遊を爲さざるものは、未だともに男鹿半島の勝を談するに足らずと。而して其の本山に登るも、島めぐりの舟を舩するも、共にこの門前村に於てするを例と爲す。本山の半腹には赤神祠と稱する一神社を祭り、それより猶登ること一里にして、所謂袴腰の頂上に達すれば、上に一字の薬師堂あり。其の絶巔の眺望に富めるは、一度登臨せし者の夢寐忘るゝ能はざる所にして、南は飛鳥より遠く烟濤漂渺の間に佐渡が島の翠螺を望み、日本海の海岸線のさなか

島廻り

ら弓弦を張りたる如く長く遠く連れる上に島海山の屹然諸山を帥ひて聳えたるを仰き、北東は奥羽の諸山遶繞して襟帯を爲し、其の氣宇の濶大なる、水天の渺茫たる、誰れかかゝる邊陲の地にこの名勝區あらんとは想像すべき。男子一搜男鹿島松洲始覺夙妖嬈と頼三樹三郎が此の地に遊ひて吟詠したるも、決して誣言にあらざるを覺ゆ。

島廻りはこれより南及び西の海岸を巡遊するものにして、これを行ふには六七月の候、天候極めて晴穩なる時にあらざれば、甚た危険なり。舟を舩して海に泛へば、先づ帆掛島の宛然帆を洋中に漂はせたるかとき奇岩來りてわれ等の舟頭に顯はる。(第八十圖の甲)これより五郎投石・島・扉島・垢取島・組島・油石等を経れば龍像岩あり。形も恰も龍の海濤の上に挺出したるかごとく奇觀言ふへからず。御幣島を過れば、岩愈出て、愈奇に、舟人の指點する島の名は一々記憶するに堪へず。阿字ヶ島は岩上平坦にして、四方眺望に富み、最も行厨を開くに適せり。この島の右方に懸れる大瀧の壯觀を見て、其の儘に西に進めば、有名なる高雀窟は、峭壁駢立して屏風のごとく、海濤の

高雀窟

激すること、恰も雪山を崩すに似たり。半町許にして窟口に至れば高幅共に二丈ばかり、中は空洞にして甚だ暗黒に、巨石の頭上を壓せるもの今將に墜ち來たらんとするがとき状あり。少しく入れは、岩石玲瓏として潤黄を帯ひ、陰風颯として人を襲ふ。入ること二十間、砂磧あり。猶進めは二坑の左右に開かれたるを認む。暗黒にしてその深き幾許なるを知らず。傳へ言ふ、古代の鑛坑なりと。窟を出て、更に西に進めば、五ヶ一濱小棧橋大棧橋三社島辨天腰掛島立島蓮花島等あり。それより船を加茂村の海岸に舣し、更に北して戸賀に向へば、奇岩依然として相顯れ、小壺奥壺白岩赤岩蓬萊島鷹巢島大黒島仙臺島等あり。戸賀灣は正西に面し、南東北の三方は山巒を以てこれを遶らし、圓形を成せるを以て、頗る風浪を避くるに適す。灣口には、宮島地藏島等あり。入道峰はその海岸の更に北に突出せる一角の名にして、其の絶端に燈臺あり。水島の大なる島嶼は恰もこれと相對して、男鹿半島西北岸名勝の殿軍を爲せるに似たり。(第二十七圖の甲乙)
これより路は屈曲して東に向ひ、海岸また此の奇岩怪石をとどめすなり。

寒風山

湯本村に温泉あり、炭酸泉にして、溫度は攝氏の五十四度を保ち、無色透明にして反應は中性なり。浴客また尠なからず。眞山は湯本より登路一里餘、絶頂に眞山神社あり。本山に通ずる山路を大峰道と稱し、頗る險峻なり。北に下れば、北浦村あり。村に日枝神社あり。相川村に古城址を探り、それより全く海に離れて、丘陵逶迤たる間を進むこと里許、瀧川村に至れば、寒風山は其の東に聳えて、登路僅かに十四五町に過ぎず。
寒風山は眞山本山と共にこの半島に於ける名山なり。(地形参照)而して本山眞山の日本の眺矚を一眸の下に集むると均しく、此山に登れば、八龍湖は一面の明鏡を展べて眼下に横はり、波光帆影、今まで雄壯なる風景に奪はれたる双眸をして更に一種幽渺穩和なる感に撲たれしむ。これより路を東南に取りて下れば、忽ちにして大字富永の地に達す。村に蘇武澤と稱するの地あり。稱して淡の蘇武が匈奴單宇の爲めに徙されて羊を牧せし遺跡なりと傳ふ。されと其の説の信すへからざるは勿論なり。これより舟越まで里程僅かに一里半、男鹿の勝はかくの如くして盡く。此の地、秋田の蝦夷地と稱せられ、邊

大久保村

眞阪の鼻

能代町

阪にあるを以て、人の其の勝を説くもの多からずと雖も、その雄偉壯大の景に至りては、東北地方實にこれに軼くる者はあらざるなるべし。

更に國道に戻りて、追分より進むこと二里、大久保驛に至りて、前方遙かに八郎潟の渺茫宛も海と相若けるの風景を望む。五城目村を過ぐる頃より、潟湖の風景漸く潤く、遊客をして覺えず足を佇めしむる所甚だ多し。殊に、眞阪村にある三倉ヶ岬は明治十四年車駕東巡の時、鸞輿を駐められたるの地、南面岡の名は實に至尊が賜ひたるるところにして、その一角に川田江が撰文をせるあり。八龍湖の全景を一時の中に集め、漁村蟹戸の相連れる、松影白砂の夕陽にかゝやける、白帆の影の其の間に漂へる、一の遜影あるを見す。眞に絶景なり。これより天瀬川鯉川鹿渡の諸村皆この巨浸に面して、朝夕風光の美を擅にせり。

汽車はそれより岐れて、森岳村楢山町等即ち維新前の秋田舊街道に向ひて駛り、國道は鶴川より一路遙々として能代町に達す。

能代町は能代川の河口に位し、大館町と共に縣下北部に於ける二都會を以

て目せらるゝの地、酒田土崎新潟と均しく日本海漕運の要港なり。戸數二千二百、人口一萬一千餘を有し、郡役所區裁判所等あり。停車場は町を距ること約一里餘なる鶴形村にあれど、馬車人力車ありてこの缺を補ひたる上、道路また坦として砥のごとくなるを以て、更に不便を感ずることなし。港内水淺く、巨船大船を容るゝ能はず、且毎年十一月より翌年四月に至るの間は、風濤の爲め航海を停止するを例と爲せるか故に、漕運また盛なること能はざれども、郵船會社の定期航路の汽船は常に遠く沖にかゝりて、汽笛の音絶えず烟波に響けり。有名なる能代挽材會社は能代川に臨める規模廣大なる建物にして、其の機械の設備甚だ整頓せるを以て名あり。而して其の原料は南北秋田郡中より伐採する秋田杉にして、東京及び其の他の地方に輸出するもの甚だ多く、將來頗る有望なりと稱せらる。また、能代川を隔て、向能代と稱する處に古川氏の所有にかゝれる東雲製鍊所あり。阿仁鑛山及び鹿角郡地方より米代川阿仁川能代川の水運を利用して粗鑛を集め、更に之を製鍊す。其産額年々六千噸以上に達すといふ。殊に、現今産出する所の丁銅は性質良好

にして其の名世界に高し。此の地は元、淳代と言ひ、其の名は早く日本紀齊
 明天皇の四年に見ゆ。天正十六年秋田城介其の臣大高某をして此の地を守ら
 しめ、佐竹氏に及びては代々能代奉行を置き、以てこの地を統治せしむ。神
 社佛閣には日吉神社八幡神社長慶寺三十三観音等あり。般若山(第八十圖のこ)は町
 の南に連れる丘陵にして、山上には商店を設け、以て遊覽の便に供せり。山
 上より眸を放ては、能代市街の粉壁瓦葺相連れる、能代川の溶々として海に
 注げる、皆悉く一望の中に盡きて、風光の美宛然として畫圖に似たり。地方
 の人、これ呼んで能代公園と爲す、決して誣言にあらざるを見る。

能代町より日本海岸に沿ひ、能代川の長橋を渡り、水澤自名海入森岩館等
 の諸村を経れば、忽ちにして青森縣の大間越村に達す。此の間、入森に鑛山
 あり、その山中に白布瀑あり。ことに、此の海岸は絶壁直ちに海に迫り、路
 は纔かに其間に通し、怪岩奇石の錯落するもの又甚た多く、怒濤の掀翻せる、
 まことに壯絶奇絶を極む。

能代町を出て、國道を東に進めば、路は能代川の溶々たる平野の間に通し、

七座山神社

石切に至りて、一大鐵橋の恰も虹霓のごとく横はれるを認む。是、奥羽西線
 青森秋田間に於ける最大の鐵橋にして、其の長さ實に九百餘尺に達せり。川
 を隔て、二井村に停車場を置けり。七座山神社は有名なる縣社にして七座村
 字小繫にあり。天神七代を主神とし、配するに安倍比羅夫の靈を以てせり。
 社は能代川の清潭に枕みて、對岸に聳ゆる七鬘の翠微は來りて賽者の衣袖を
 掠め、まことに一勝區と稱すべし。其の他この附近に高岩山神社鐘神社あり。
 荷上場村より藤琴川を遡れば、粕尾藤琴に鑛山あり。猶遡ること二里にして、
 太良鑛山あり。

鷹ノ巢町

阿仁鑛山

加護山小繫附近、山秀て水曲りて風光甚だ佳なり。
 鷹ノ巢町は小繫より二里餘、北秋田郡役所の所在地にして、戸數五百、人
 口二千五百餘を有せり。阿仁鑛山は此の地を距ること南方九里、盛に銅を産
 し、古川氏の所有に屬す。交通は重に大阿仁川の舟路に由りて、小繫荷揚場
 に出づ。

一路遙々、米代川の流を溯れば、兩岸の丘陵次第に展開して、廣濶なる段

大館町

丘の上に、數百の粉壁の夕陽に映するを認む。これ即ち縣下東北部第一の都會なる大館町なり。町は北に大館川を帯ひ、南に米代川を回らし、奥羽西線の鐵路は停車場を市北約二十町の處に置きて、直ちに矢立峠に向つて駛れり。戸數一千六百、人口七千五百餘、維新前は秋田四家の一に位せる支藩にして、往昔は秋田藩の津輕及び南部の諸藩に備へし樞要の地なり。中學校地方裁判所支部監獄支署等あり。附近に著名の鑛山多きを以て、貨物の出入甚だ多し。二井田村に贊の柵趾あり。藤原泰衡が其の臣河田次郎に弑せられたる遺址として有名なり。

千馬内町

大館町より岩手街道を東南に進み、扇田より十二所を経て、陸中國鹿角郡に入ればその盆地の中央に毛馬内町あり。人口四千餘、岩手縣より秋田縣の北部に通する要路に衝れると、小坂尾去澤其他の鑛山に近きを以て、人馬の往來甚だ頻繁に、従つて僻地に珍らしき繁華を呈せり。

小坂鑛山

小坂(第五十八圖の乙)は、全く鑛山の爲めに成立ちたる所と稱すべく、四面皆山岳を以てこれを圍み、行客此山中にかゝる熱鬧地を現出せんとは夢にも想像

花輪町

する能はざるべし。戸數八百、人口八千を有し、鑛山所屬學校あり、鑛山醫務所あり、電車を通し、電燈を點し、道路を理め、水道を引き、俱樂部を設くる等、全く山中の一小都會を爲せり。本鑛山は今より二十年前、大阪の商藤田傳三郎が官より拂下を乞ふて、引續き採鑛せるものにかゝり、以前は银山なりしも、明治三十年頃より銅山となり、爾來益々盛大に赴き、現今にては實に東北地方第一の鑛山たるのみならず、實に本邦有數の鑛山となれり。その一斑を述べば、工場は規模廣大にして、最新なる器械の設備に富み、溶鑛爐の如きは、極めて巨大にして自から誇りて世界無比と稱す。旋風器亦甚だ新式を用ゆ。而して原動力は數里を隔てたる銚子の瀧附近に於て二ヶ所の水力電氣を利用し、運搬設備としては奥羽西線白澤停車場と小坂との間及び扇平と小坂との間に鐵索を懸け、其他水力電氣等を利用すること實に夥しく、覽者をして殆ど驚心瞪目せしむるの概あり。猶、詳細は本誌鑛業の部に説明したれば就て參照すべし。

花輪町は毛馬内町を距る二里餘、人口七千を有する一名邑にして、此の地

尾去澤鑛山

より岩手縣界まで三里半を隔つ。鹿角郡役所の所在地なると、西方尾去澤鑛山あるとを以て、頗る繁盛の趣を呈せり。

尾去澤山鑛山は花輪町を距ること西方僅かに一里に足らず。又古來有名の銅山にして其の設備は小阪の半に及ばざるも、發電所を鑛山を距る四里の處に設け、二百馬力の水力電氣を利用して、以て種々の工作を爲せり。其の他鑛山より薪炭の産地に至る間に鐵索の架設あり。銅の産出額は一年大約八百二三十噸に及ぶ。三菱合資會社の所有に屬せり。

鹿角郡中、溫泉甚た多し。湯瀧溫泉は宮川村字湯瀧にある硫黄泉にして花輪町を南に距ること二里二十二町、米白川の北岸にあり。大湯溫泉は大湯村大字大湯にありて、泉源三ヶ所、之を上湯下の湯河原湯と稱し、硫黄泉にして溫度頗る高し。毛馬内町を距る纒かに一里半に過ぎざるを以て、村民及び鑛夫等の來り浴するもの多し。其の他、砂子澤溫泉湯ノ巻溫泉逆ノ湯溫泉等あり。

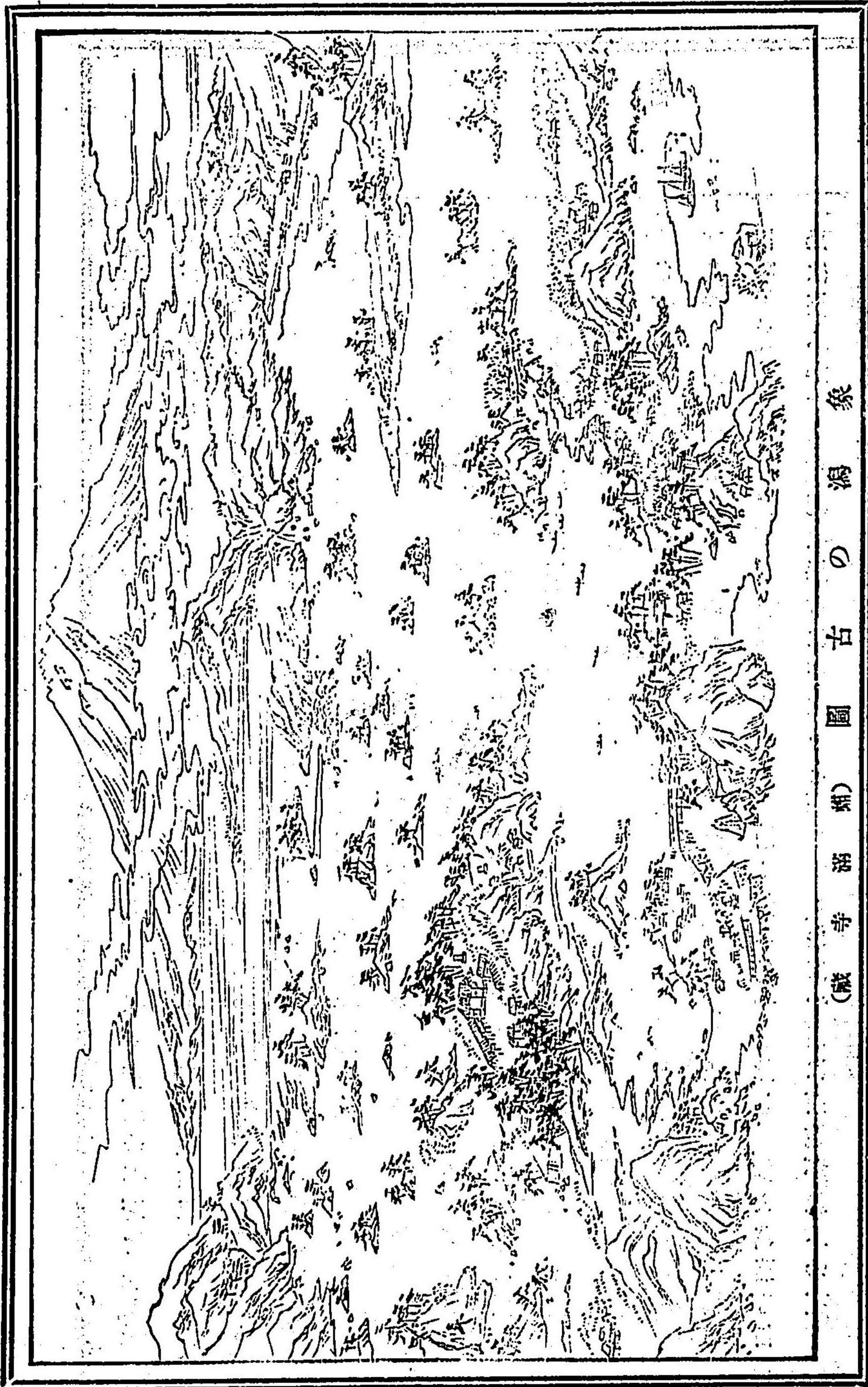
再び大館町に還りて、更に國道を北に趁へば、古杉樹の林相甚た美なる矢

象潟

立峙の翠微は次第に眼前に近く、白澤驛に至りて、全く背面の平野を失ふ。前にも記せし如く、此の地より小阪鑛山に達する約十一哩の鐵索架設せられ、停車場より約五哩の處に於て繼立を爲せり。地に、社地觀音見入地藏等あり。これより、汽車の進行次第に緩に、陣場驛に至れば、全く山影の中にあり。陣場驛は長走村の支郷に屬し、往昔、南部津輕秋田對陣の地たりしよりその名を得たりと傳ふ。これを過ぐれば、忽ちにして青森縣なり。

更に南方山形縣の國境に還れば、烏海山の山麓の海中に入るところ、即ち大師崎より以北、秋田街道は山形縣吹浦より來りて、蜿蜒として海岸の長汀を縫うて走れり。小砂川川袋を過ぎて、有邪無邪の關趾を越ゆれば、象潟の古址はそこより一里餘の處になり。

象潟（第十八圖の乙）は東の松島と相並びて、奥羽の勝地として聞えたるの地、文久元年六月四日の地變の爲めに、湖底隆起し、水涸れ島残り、尋常一様の田疇と變せしまでは、西行法師も花の上漕く蟹の釣舟と詠し、俳人芭蕉も松島は笑ふか如く象潟は怨むに似たりと題して、「象潟や雨に西施がねふの花と



本庄町

吟したる天下の名園。今その跡は象潟町を過ぎ、一橋を渡りて、猶その街道を三四町進みたる處にあり。蚶滿寺の寺門(第八十一圖のこ)を松影深き處に求め、雜僧に導かれて寺後に至れば、鳥海山の美しき姿は宛として眼前に落ち、島の形したるもの幾つとなく田疇の間に残れる、眞に往昔の九十九島八十八潟の好景も偲ばれて、この景色今猶ほ有らばと座ろに追懐に堪へざらしむ。舊記に曰く、潟、東西二十町、南北三十町、蚶滿寺を繞りて九十九島八十八潟あり。南の市を荒谷といひ、市内の海中に丈岩あり、冠岩といふ。市東の水汀に石壁あり、青塚と稱す。此處を經れば二刹あり、南を長佛寺、北を千手院と號す。其の海上にあるを妙見島三隻島稻荷島岡入道島彩石島といふ云々と。されど今は其の勢滂をも辨すへからず。只、蚶滿寺の一古刹と、四五の松影面白き島の形とに、多少の古蹟を留めたるのみ。

象潟より金浦平澤等の諸村を過れば、子吉川の河口に本庄町あり。町は秋田市を距ること十里二十五町、秋田街道の要路に衝り、更に子吉川に添ふて、雄勝郡に達する別路を起せり。市坊三十、東西八町、南北五町、戸數二千

矢島町

九百、人口九千九百餘を有せる西北部の一都會にして、町に由利郡役所區裁判所中學校等あり。又、公園あり。城址は尾崎城址一名舞鶴城址と稱し、最上義光の巨楯岡蒲茂の築くところ、徳川氏に及びて、六郷政乗常州府中より來り移り、子孫これを領すること二百四十餘年にて廢せり。此の町は山本秋田諸郡より出だせる米穀貨物の集點なるを以て、其の繁華秋田市、及び土崎港に次けり。ことに子吉川の橋上より望めば、鳥海山の峻峯巍然として高く聳ゆるを望み、山氣町を壓するの趣あり。

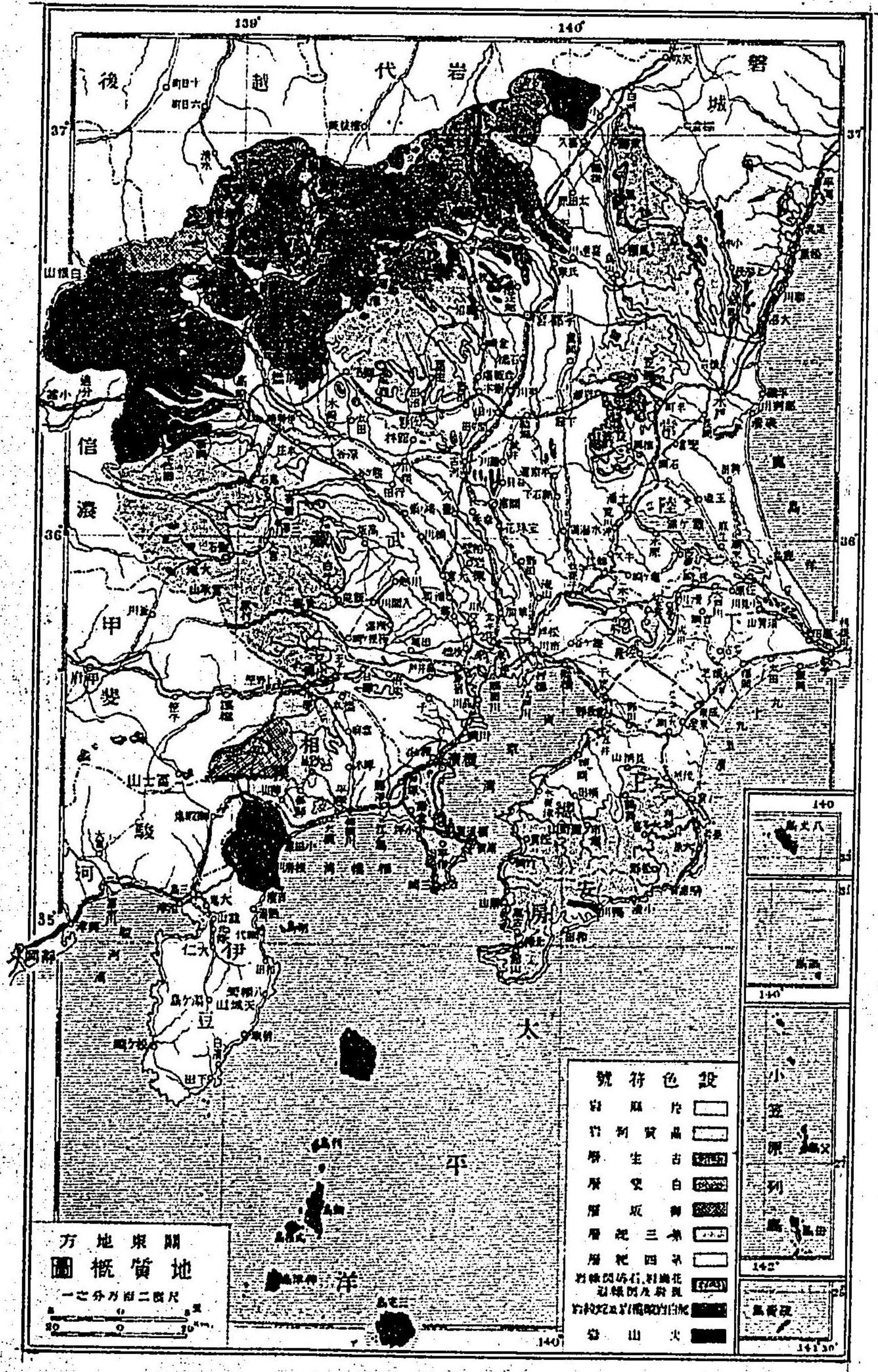
雄勝街道を子吉川に沿うて溯ること十二里にして、矢島町あり。人口五千餘を有し、養蠶酒造を以て縣下に名あり。この地より猶行くこと十五里、松木峠を越えて下院内町に達す。

龜田町

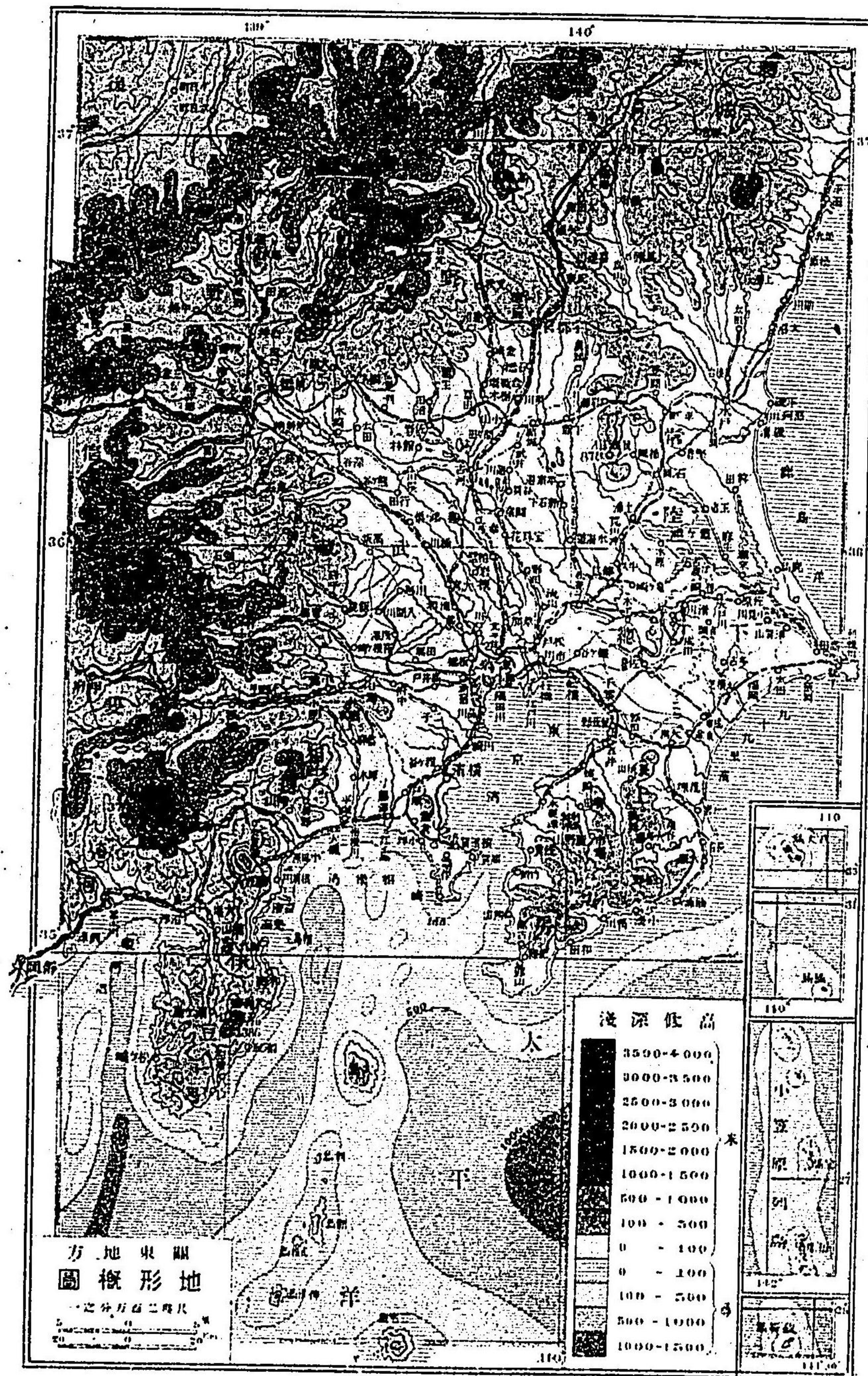
本莊町より再び海岸に出て、風光絶奇なる長汀砂丘の間を傳ひ行けば、松ヶ崎より南に距ること一里にして、龜田町あり。市坊三十一、東西十五町、南北三町、戸數八百、人口四千餘を有せり。町に、應仁年中地頭赤穂津彌九郎の住せし古城址あり。人民質素にして農桑を勤め、近年織り出だせし麻織

は縣下の一名産として其の名高し。

道川長濱新屋の諸村を経て、御物川の長橋を渡れば、秋田市の粉壁は早くも眼前にあり。



大日本地誌 卷二終



三六四	二	思田	思國
三七八	三	紀使	使紀
四〇六	八	唐橋	廣橋
四〇八	一	唐橋	廣橋
五一一	八	菊多	石城
五一五	七	産類	産額
五三七	八	錫	鳥賊
五四三	一	ありしと	ありしも
五四七	統計表中場所に箇處、面積に坪の字を脱す		
五七二	四	露出	噴出
五七七	五	母岩の第二次	母岩中の金の第二次
五九三	一	第四紀古層を被覆せる	第四紀古層にて被覆せらるる
全	二	鉛鍍	鉛鍍
六一二	一	褐に炭	褐炭に
六二二	一	草生土	草生土
六二四	一	の需要地	米穀の需要地
六六五	三	沼津沼	沼津沼

明治三十七年四月五日印刷
 明治三十七年三月廿日發行

大日本地誌卷貳
 定價金貳圓五拾錢



發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

編者 山崎 佐藤 傳

發行者 大橋新太郎

印刷者 飯田三千太郎

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地 株式會社秀英舎第一工場